

明石市

# 明石城武家屋敷跡Ⅱ

- 神戸地方法務局明石支局新営工事に伴う発掘調査報告書 -

2003年3月

兵庫県教育委員会

明石市

# 明石城武家屋敷跡 II

- 神戸地方法務局明石支局新営工事に伴う発掘調査報告書 -



調査地遠景（南西から）



第1次全面調査全景（東から）



第2次全面調査南区（西から）



第2次全面調査東区（南から）



1区SK010（東から）



SK007・009出土遺物



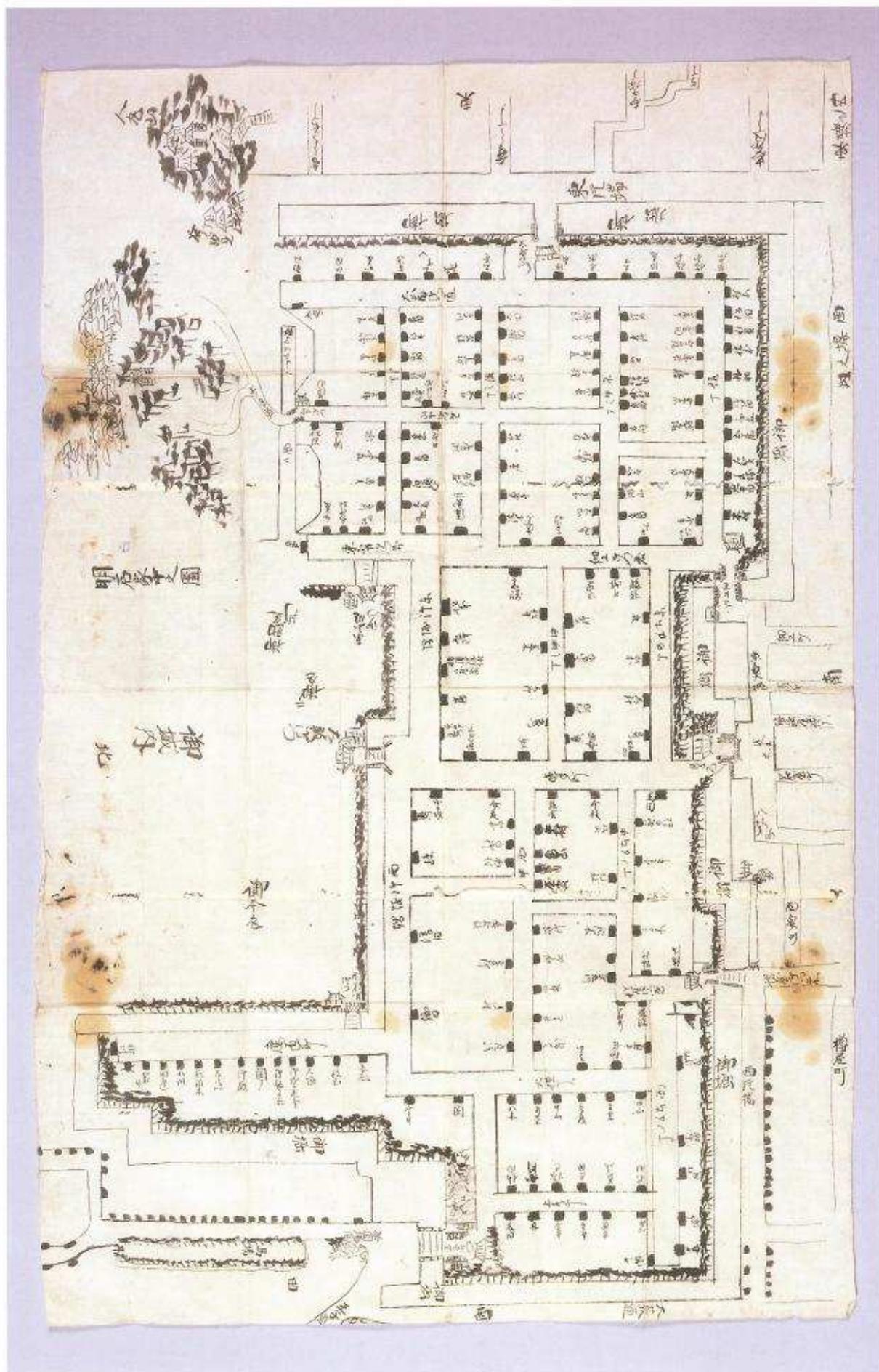
SK010出土遺物



S K 0 8 7 出土遺物



S K 2 2 1 出土遺物



『明石家中之図』(平崎旭氏蔵)

写真提供：明石市立文化博物館

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県明石市大明石町2-4-29に所在する明石城武家屋敷跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、神戸地方法務局明石支局新営工事に先立つもので、国土交通省近畿地方整備局の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成12年度に確認調査、平成12・13年度に全面調査を実施した。
3. 整理作業は、平成14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が同事務所にて実施した。
4. 本書に示した座標は日本測地系による国土座標（第V系）を使用したもので、方位はすべて座標北を、標高は東京湾平均海水準で示している。
5. 本書の編集・執筆は池田征弘が行った。
6. 本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管する。ただし卷首図版5の写真については明石市立文化博物館より提供いただいた。
7. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。

明石市立文化博物館、稻原昭嘉、平崎旭、宮本博、山下俊郎

# 本文目次

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2

## 第2章 遺跡の位置

第1節 遺跡の位置	3
第2節 明石城の沿革	4
第3節 明石城武家屋敷跡の調査	4

## 第2章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

### 第2節 遺構と遺物

1. 区画施設	9
2. I区	10
3. II区	14
4. III区	16
5. IV区	17
6. 近代	19
7. 包含層	20

## 第3章 まとめ

第1節 遺物について	29
第2節 遺構について	30
第3節 武家屋敷の変遷について	33

## 挿 図 目 次

第1図 調査地の位置 .....	3
第2図 姫路口門付近（『播磨名所巡覧図会』） .....	4
第3図 武家屋敷調査位置図 .....	6
第4図 遺構変遷図 .....	31
第5図 武家屋敷地割復元図 .....	35
第6図 武家屋敷宅地番号図 .....	36
第7図 『明石御廟内之図』の居住者名 .....	41
第8図 『明石城侍屋敷絵図』の居住者名 .....	43
第9図 『明石町旧全図』の居住者名 .....	45
第10図 『明石家中之図』の居住者名 .....	47
第11図 『文久年間明石町之図』の居住者名 .....	49

## 表 目 次

第1表 調査一覧 .....	1
第2表 武家屋敷調査一覧 .....	7
第3表 遺構一覧表（1） .....	21
第4表 遺構一覧表（2） .....	22
第5表 遺構一覧表（3） .....	23
第6表 遺物一覧表（1） .....	24
第7表 遺物一覧表（2） .....	25
第8表 遺物一覧表（3） .....	26
第9表 遺物一覧表（4） .....	27
第10表 遺物一覧表（5） .....	28
第11表 武家屋敷変遷表（1） .....	37
第12表 武家屋敷変遷表（2） .....	38
第13表 武家屋敷変遷表（3） .....	39
第14表 武家屋敷変遷表（4） .....	40

## 卷首図版目次

- 卷首図版1 上：調査地遠景（南西から）  
下：第1次全面調査全景（東から）
- 卷首図版2 上左：第2次全面調査南区（西から）  
上右：第2次全面調査東区（南から）  
下：1区SK010（東から）
- 卷首図版3 上：SK007・009出土遺物  
下：SK010出土遺物
- 卷首図版4 上：SK087出土遺物  
下：SK221出土遺物
- 卷首図版5 『明石家中之図』（平崎旭氏蔵）

## 図版目次

- 図版1 調査区配置図  
図版2 全体図  
図版3 調査区地区割図  
図版4 I・II区遺構配置図  
図版5 III・IV区遺構配置図  
図版6 調査区土層断面図  
図版7 区画施設位置図  
図版8 区画施設（1）  
図版9 区画施設（2）  
図版10 I区の遺構（1）  
図版11 I区の遺構（2）  
図版12 I区の遺構（3）、II区の遺構（1）  
図版13 II区の遺構（2）  
図版14 II区の遺構（3）、III区の遺構  
図版15 IV区の遺構（1）  
図版16 IV区の遺構（2）  
図版17 IV区の遺構（3）  
図版18 近代遺構配置図  
図版19 近代の遺構（1）
- 図版20 近代の遺構（2）  
図版21 I区の遺物（1）  
図版22 I区の遺物（2）  
図版23 I区の遺物（3）  
図版24 I区の遺物（4）、  
図版25 I区の遺物（5）、II区の遺物（1）  
図版26 II区の遺物（2）  
図版27 II区の遺物（3）、III区の遺物  
IV区の遺物（1）  
図版28 IV区の遺物（2）  
図版29 IV区の遺物（3）  
図版30 IV区の遺物（4）  
図版31 IV区の遺物（5）、VII区の遺物（1）  
図版32 IV区の遺物（6）  
図版33 IV区の遺物（7）、近代の遺物（1）  
図版34 近代の遺物（2）  
図版35 近代の遺物（3）  
図版36 金属製品、包含層の遺物、刻印  
銘款

## 写 真 図 版

- 写真図版1 上：調査地遠景（南西から）  
下：調査地遠景（南から）
- 写真図版2 第1次全面調査全景（上から）
- 写真図版3 上：第1次全面調査全景（西から）  
下：第1次全面調査全景（東から）
- 写真図版4 上左：第2次全面調査北区（東から）  
上右：第2次全面調査西区（北から）  
下左：第2次全面調査南区（西から）  
下右：第2次全面調査東区（南から）
- 写真図版5 1段目左：SD203（西から）  
1段目右：SD205（東から）  
2段目左：SA201-SK225（北から）  
2段目右：SA201-SK229（北から）  
3段目左：SA201-SK245（北から）  
3段目右：SA201-SK233（北から）  
4段目：SD202（南から）
- 写真図版6 上：I区SK007・020（南から）  
中：I-1区土坑群（東から）  
下左：I区SK010（東から）  
下右：I区SK010遺物出土状況（北から）
- 写真図版7 上：I区SK005・019（北から）  
中：I区SK018（東から）  
下：I区SK216（東から）
- 写真図版8 上：I区SK234（南から）  
中：I区SA101（東から）  
下：I区SE005（南から）
- 写真図版9 上：II区SK065（北から）  
中：II区SK030・037（南西から）  
下左：II区SK036（西から）  
下右：II区SK036断面（西から）
- 写真図版10 上：II区SK035（南から）  
中：II区SK048（西から）  
下：III区SK107（東から）

- 写真図版11 上：IV区SK087・SD007（東から）  
中：IV区SK070・090（北から）  
下：IV区SK070・245（東から）
- 写真図版12 上：第1次全面調査IV区全景（西から）  
中：IV区SE006（東から）  
下：IV区SK221（東から）
- 写真図版13 1段目左：I区SE001（東から）  
1段目右：III区SE002（東から）  
2段目左：I区SE001断面（東から）  
2段目右：III区SE002断面（東から）  
3段目左：III区SE003（東から）  
3段目右：IV区SE004（北から）  
4段目左：III区SE003断面（西から）  
4段目右：IV区SE004断面（北から）
- 写真図版14 上：IV区SE201（東から）  
中：I区SK015（南から）  
下：II区SK123（北から）
- 写真図版15 区画施設の遺物、I区の遺物（1）
- 写真図版16 I区の遺物（2）
- 写真図版17 I区の遺物（3）
- 写真図版18 I区の遺物（4）、II区の遺物（1）
- 写真図版19 II区の遺物（2）
- 写真図版20 II区の遺物（3）
- 写真図版21 II区の遺物（4）、III区の遺物、IV区の遺物（1）
- 写真図版22 IV区の遺物（2）
- 写真図版23 IV区の遺物（3）
- 写真図版24 IV区の遺物（4）
- 写真図版25 IV区の遺物（5）
- 写真図版26 IV区の遺物（6）
- 写真図版27 IV区の遺物（7）、近代の遺物（1）
- 写真図版28 近代の遺物（2）
- 写真図版29 近代の遺物（3）
- 写真図版30 近代の遺物（4）、金属製品、包含層の遺物

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

国土交通省近畿地方整備局は兵庫県明石市大明石町2-4-29において神戸地方法務局明石支局新営工事を計画した。工事予定地は周知の遺跡である明石城武家屋敷跡（兵庫県遺跡地図遺跡番号40181）の範囲内にあたる。そこで、兵庫県教育委員会では国土交通省近畿地方整備局より依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成12・13年度に確認調査・本発掘調査を実施した。

第1表 調査一覧

遺跡調査番号	調査の種別	調査担当者	調査期間	調査面積	備考
2000221	確認調査	別府洋二	平成12年7月17日・18日	78m <sup>2</sup>	
2000325	本発掘調査	種定津介・池田征弘・大崎晃司	平成13年2月5日～3月23日	760m <sup>2</sup>	大明石町地区第29次
2001010	本発掘調査	種定津介・池田征弘	平成13年5月14日～6月2日	193m <sup>2</sup>	大明石町地区第29-2次

## 第2節 調査の経過

### 1. 確認調査〔図版1〕

事業用地は東西に長い長方形と、その南東側に小さい長方形が引っ付いた逆「L」字の形状を呈している。調査時には設計の詳細が決定していなかったため、事業用地全域を対象として確認調査を実施した。トレチは北側の本庁舎建設予定部分に3ヶ所（T1・2・6）と南側の別棟建設予定部分に3ヶ所（T3～5）の計6ヶ所を設定した。

調査の結果、T1西部・T2・T6西部などの事業用地西半部で井戸・土坑などの遺構、T1東部・T4・T5・T6東部などの事業用地東半部で耕作による土壤層などが検出された。

### 2. 第1次本発掘調査（大明石町地区第29次）〔図版1〕

確認調査の後、事業用地の南東部には建物が建てられず、駐車場として利用されることとなったため、本発掘調査は事業用地北部の本庁舎建設予定範囲を対象におこなった。

表土・盛土の掘削は重機で行い、包含層の掘削や遺構の検出・掘削については全て人力でおこなった。検出した遺構については写真撮影（航空写真を含む）および実測図（クレーンによる写真測量を含む）の作成を行った。

### 3. 第2次本発掘調査（大明石町地区第29-2次）〔図版1〕

第1次本発掘調査の後、庁舎建物の設計の変更及び配管の設計が明らかとなった。それにより、第1次本発掘調査範囲の周囲が損壊されることとなったため、当該範囲を対象に本発掘調査を行った。

表土・盛土の掘削は重機で行い、包含層の掘削や遺構の検出・掘削については全て人力でおこなった。

検出した遺構については写真撮影（航空写真を含む）および実測図の作成を行った。

なお、第1次・第2次本発掘調査にあたっては調査補助員：牛谷好伸、大城知己（第1次のみ）の協力を得た。

### 第3節 整理作業の経過

出土品整理作業は平成14年度に行った。調査で出土した遺物（281入りコンテナにして51箱・金属器24点）について、当事務所にて接合・復元・実測・拓本・写真撮影などを行い、遺構図および遺物実測図についてトレース・レイアウトを行った。

作業は整理保存班菱田淳子の補助のもとに調査第3班池田征弘が担当し、金属器の保存処理作業については整理保存班加古千恵子が担当した。

また、上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

栗山 美奈	吉田 優子	喜多山好子	眞子ふさ恵	早川亜紀子	中田 明美
前田千栄子	西野 淳子	横山キクエ	小寺恵美子	岡井とし子	三好 純子
藤井 光代	柏木 明子	前田 恭子	三島 重美		

## 第2章 遺跡の位置

### 第1節 遺跡の位置

明石城の所在する明石市は兵庫県西部の播磨地域に属し、その東端に位置している。そして、その南側には幅約4kmの明石海峡を挟んで淡路島が対している。東西に長い市域の大半は段丘であり、明石川の河口部にのみ沖積地が広がっている。この河口部西岸の沖積地に明石城の城下町を基に発展した市街地が広がっている。現在明石市街地には国道2号線・JR山陽本線・山陽電鉄などが東西に通り、市街地の南側に設けられた明石港を通じて淡路島と結びつき、近年は明石海峡大橋に大きくその役割を譲るにいたっている。

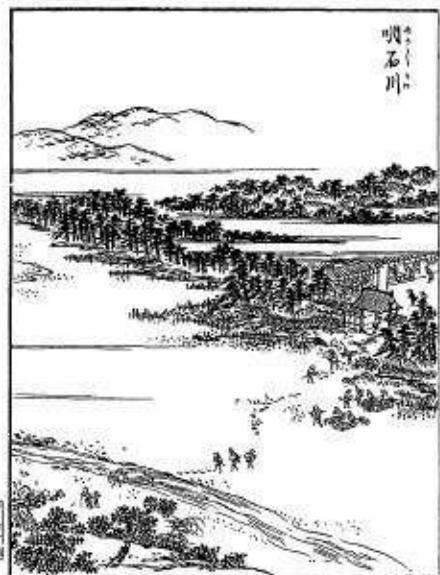


第1図 調査地の位置

明石城は現市街地の北側に突き出た段丘を利用して主郭部を造り、その南側を取り囲むように中堀・外堀が2重に巡っている。現在も残る中堀に囲まれた範囲には殿様の御殿（居屋舎）や一門の屋敷地が設けられ、明治期に埋められた外堀に囲まれた範囲には家臣たちの武家屋敷が建ち並んでいた。武家屋敷の多くは外堀内に設けられていたが、下級家臣の一部の屋敷は外堀外東部や外堀外南西部にも設けられていた。

町屋は外堀南側を迂回させられた西国街道を軸に発展し、その南側には湊が設けられている。寺は河口部に近い城下町南西部に集中して設けられ寺町を形成している。

今回の調査地は外堀内に設けられた武家屋敷のうち東南隅に近い一角にあたり、第2図右上の家並み付近にあるであろう。



第2図 姫路口門付近  
〔播磨名所巡覧図会〕

## 第2節 明石城の沿革

初めて明石川河口部に政治的拠点が設けられたのは、天正14年（1586）頃に明石の地を与えられた高山右近が河口に近い明石川右岸に船上城を築いた時である。翌年、高山右近はキリストン弾圧のため追放され、豊臣家の直轄領になったようである。慶長5年（1600）には池田輝政に播磨一国が与えられ、船上城には家老や一門の池田利政、池田由之、池田輝高が入っている。

元和3年（1617）に小笠原忠政が信濃松本より転封（石高10万石）となった。それに伴い、元和4年（1618）より天下普請によって明石城が建設されることとなり、元和6年（1620）に完成した。以後、戸田松平家（1633～1639）、大久保家（1639～1649）、藤井松平家（1649～1679）、本多家（1679～1682）と比較的短期間で城主（石高6・7万石）を替える。天和2年（1682）、越前松平家が越前大野より転封（石高6万石）になり、以後明治4年（1871）の廃藩置県にいたるまで続く。

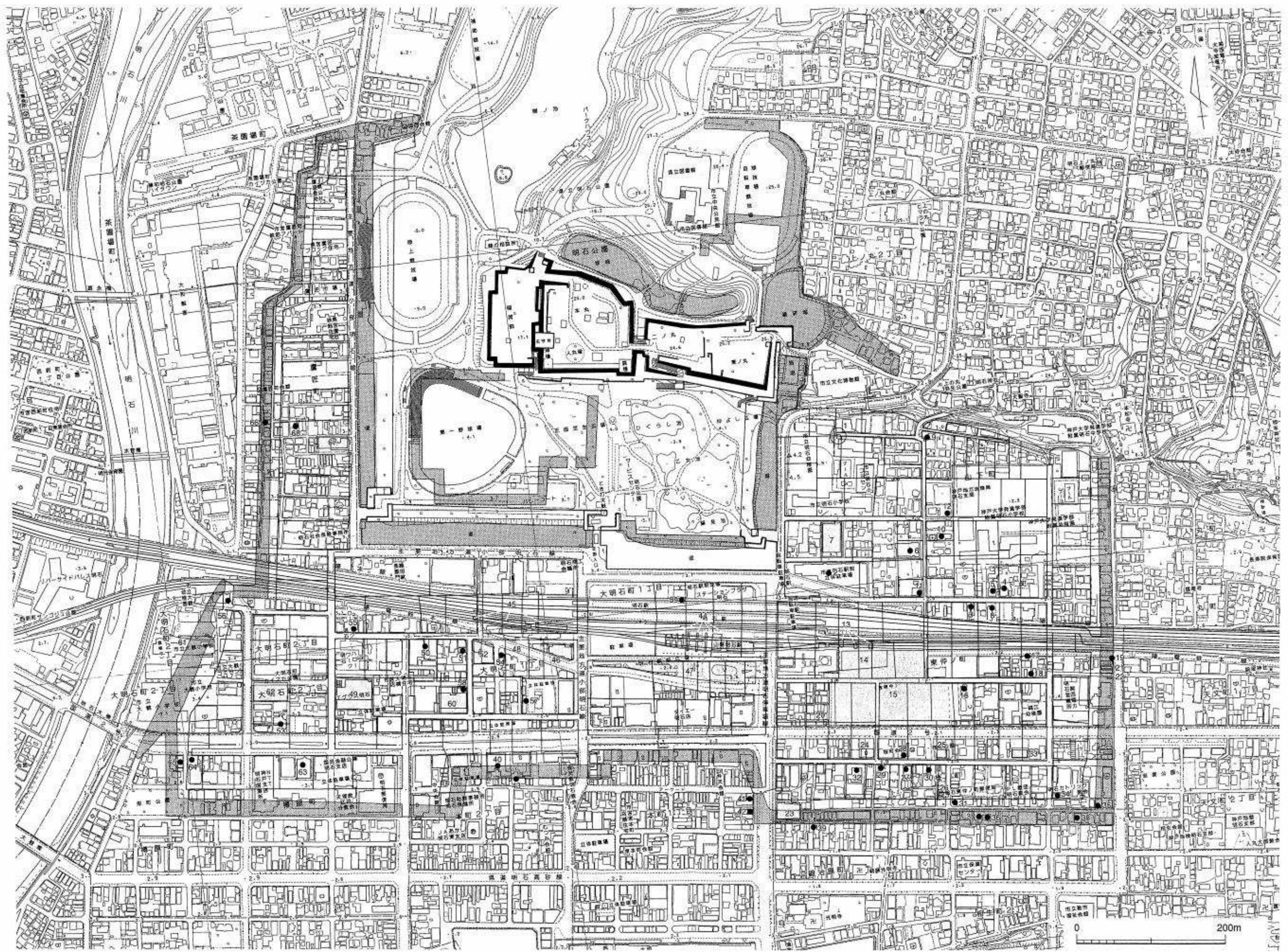
武家屋敷地も城郭部と共に元和4年（1618）からの築城時に整備されたと考えられ、正保期（1645～1654）以後に描かれた絵図によると、武家屋敷地のプランについてはそれほど大きな改変を加えられていないことが推察される。

## 第3節 明石城武家屋敷跡の調査〔第3図〕

明石城及びその武家屋敷の調査については、まず明石城本体の調査から始まった。兵庫県教育委員会は、昭和52～54年度に県立明石公園の施設整備に伴い全面調査を行い<sup>(1)</sup>、主郭部の櫓台や石垣についての調査が行われた。その後も小規模な調査を行ってきた<sup>(2)</sup>。その後、平成7年1月17日の兵庫県南部地震によって明石城についても石垣の崩壊や櫓の破損などの大きな被害を受けた。そして、その修復に伴って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では平成7・8年度に昭和52～54年度に次ぐ比較的大規模な調査を行った<sup>(3)</sup>。

武家屋敷の調査については山陽電鉄連続立体交差事業に伴って昭和60年度より明石市教育委員会が確認調査を行ったことに始まった。それを受け兵庫県教育委員会は昭和61～63年度に全面調査を行った。以後、武家屋敷の調査は明石市教育委員会によって数多く行われ、明石駅前広場整備事業（約4000m<sup>2</sup>）や東仲ノ町地区市街地再開発事業（約17000m<sup>2</sup>）に伴う調査のような大規模な調査も行われている<sup>(4)</sup>。

- (1) 兵庫県教育委員会『明石城跡』1984年
- (2) 兵庫県教育委員会『明石城跡Ⅱ』1986年
- (3) 石垣の解体修理に伴う調査については  
　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『明石城跡Ⅲ』2000年  
　　櫓の解体修理に伴う調査については  
　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成8年度年報』2000年  
　　またそれについて、土木・建築学的見地から以下の報告書が刊行されている。  
　　財文化財建造物保存技術協会『明石公園石垣災害復旧工事報告書』2000年  
　　財文化財建造物保存技術協会『重要文化財明石城巽櫓・坤櫓災害復旧工事報告書』2000年
- (4) 武家屋敷の調査に関する文献は第2表文献を参照



第3図 武家屋敷調査位置図

第2表 武家屋敷調査一覧

番号	地点名	路号	所在地	調査主体	調査年度	歴数地番号	文献
1	山下町地区	YM-1	山下町807-1	明石市教育委員会	昭和62年度	1-11-12-15-16	3
2	山下町地区	YM-3	山下町11	明石市教育委員会	平成元年度	3-6	3
3	山下町地区第7次	YM-7	山下町1087-5	明石市教育委員会	平成7年度	6-8	5
4	山下町地区第8次	YM-8	山下町6-9	明石市教育委員会	平成7年度	4-3	5
5	山下町地区第9次	YM-9	山下町910-2	明石市教育委員会	平成7年度	4-4	5
6	山下町地区第10次	YM-10	山下町941-1	明石市教育委員会	平成8年度	3-2	6
7	山下町地区第11次	YM-11	山下町956-3	明石市教育委員会	平成8年度	3-8	6
8	山下町地区第12次	YM-12	山下町1113-2	明石市教育委員会	平成8年度	6-9	6
9	山下町地区第13次	YM-13	山下町857-1	明石市教育委員会	平成9年度	2-7	7
10	山下町地区第14次	YM-14	山下町930-1ほか	明石市教育委員会	平成9年度	4-9	7
11	山下町地区第15次	YM-15	山下町943-4	明石市教育委員会	平成11年度	3-4	9
12	山下町地区第16次	YM-16	山下町860-2	明石市教育委員会	平成11年度	2-6	9
13	東仲ノ町地区		東仲ノ町	兵庫県教育委員会	昭和61年度	9-3・4・5・6・8・ 10・11	1
14	東仲ノ町地区	HN-1	東仲ノ町980-1	明石市教育委員会	平成4年度	9-3・4・5	3
15	東仲ノ町地区第4次	HN-4	東仲ノ町	明石市教育委員会	平成8・9年度	7-6・9・10・11・9- 2・3・10-1・3・8	3+8・9
16	東仲ノ町地区第5次	HN-5	東仲ノ町1085-8	明石市教育委員会	平成8年度	10-12	6
17	東仲ノ町地区第6次	HN-6	東仲ノ町1105-22	明石市教育委員会	平成8年度	6-2	6
18	東仲ノ町地区第7次	HN-7	東仲ノ町1105-4	明石市教育委員会	平成9年度	6-2	7
19	東仲ノ町地区第8次	HN-8	東仲ノ町1-2	明石市教育委員会	平成9年度	外堀	7
20	東仲ノ町地区第9次	HN-9	東仲ノ町1-18	明石市教育委員会	平成10年度	10-4	8
21	東仲ノ町地区第10次	HN-10	東仲ノ町1-3	明石市教育委員会	平成10年度	外堀	8
22	東仲ノ町地区第11次	HN-11	東仲ノ町1-4	明石市教育委員会	平成11年度	外堀	9
23	桜町地区武家屋敷跡第15地点	SAK-1	桜町1189-2、15	明石市教育委員会	平成3年度	外堀	4
24	桜町地区武家屋敷跡第16地点	SAK-2	桜町1041-5	明石市教育委員会	平成3年度	10-2	4
25	桜町地区武家屋敷跡第17地点	SAK-3	桜町1059-2	明石市教育委員会	平成3年度	7-6	4
26	桜町地区第5次	SAK-5	桜町1160-8	明石市教育委員会	平成7年度	8-12	5
27	桜町地区第6次	SAK-6	桜町1168-2	明石市教育委員会	平成7年度	8-14	5
28	桜町地区第7次	SAK-7	桜町1052-16	明石市教育委員会	平成7年度	7-8	5
29	桜町地区第8次	SAK-8	桜町1172-6	明石市教育委員会	平成8年度	8-15	6
30	桜町地区第10次	SAK-10	桜町1164-13	明石市教育委員会	平成8年度	8-13	6
31	桜町地区第11次	SAK-11	桜町3-14	明石市教育委員会	平成9年度	土堀	7
32	桜町地区第12次	SAK-12	桜町1177	明石市教育委員会	平成9年度	8-16	7
33	桜町地区第13次	SAK-13	桜町1070-8	明石市教育委員会	平成10年度	7-2・3	8
34	桜町地区第14次	SAK-14	桜町1-9	明石市教育委員会	平成11年度	8-7	9
35	桜町地区第15次	SAK-15	桜町1-5	明石市教育委員会	平成11年度	外堀	9
36	相生町第1次	AI-1	相生町2-2-28	明石市教育委員会	平成7年度	外堀	5
37	相生町第2次	AI-2	相生町2-2-26ほか	明石市教育委員会	平成7年度	外堀	5
38	相生町地区第3次	AI-3	相生町2-1-17	明石市教育委員会	平成7年度	外堀	5
39	銀治屋町地区第1次	KJ-1	銀治屋町20-3	明石市教育委員会	平成8年度	外堀	6
40	本町地区武家屋敷跡第18地点	HO-4	本町2-1-16	明石市教育委員会	平成3年度	外堀	4
41	本町地区第7次	HO-7	本町1-6-1、4、22	明石市教育委員会	平成7年度	外堀	5
42	本町地区第8次	HO-8	本町1-6-5	明石市教育委員会	平成8年度	外堀	6
43	本町地区第9次	HO-9	本町2-1-13、14	明石市教育委員会	平成8年度	外堀	6
44	中之町地区		大明石町	兵庫県教育委員会	昭和62・63年度	11-2・3・4・5	1
45	西中ノ町地区		大明石町	兵庫県教育委員会	昭和61年度	13-2・3・4・5・16- 2	1
46	大明石町地区武家屋敷跡第19地点	OA-6	大明石町1-1284-4ほか	明石市教育委員会	平成3年度	14-1-7	4
47	大明石町地区第7次地点	OA-7	大明石町	明石市教育委員会	平成3・4年度	12-1・2・9・10・1 1-12・13	2
48	大明石町地区	OA-8	大明石町1-1284-1	明石市教育委員会	平成4年度	13-2・3・4・5	3
49	大明石町地区第12次	OA-12	大明石町2-3-31	明石市教育委員会	平成7年度	17-8・9	5
50	大明石町地区第14次	OA-14	大明石町1-9-24	明石市教育委員会	平成7年度	17-13	5
51	大明石町地区第15次	OA-15	大明石町1-5-2	明石市教育委員会	平成7年度	17-1	5
52	大明石町地区第16次	OA-16	大明石町1-4-1、6	明石市教育委員会	平成7年度	14-5	5
53	大明石町地区第17次	OA-17	大明石町2-21、22	明石市教育委員会	平成7年度	19-7・8	5
54	大明石町地区第18次	OA-18	大明石町1-1-15	明石市教育委員会	平成7年度	14-5	5
55	大明石町地区第19次	OA-19	大明石町2-1-14	明石市教育委員会	平成8年度	16-5	6
56	大明石町地区第20次	OA-20	大明石町2-7-6	明石市教育委員会	平成8年度	外堀	6
57	大明石町地区第21次	OA-21	大明石町1-1-10	明石市教育委員会	平成8年度	14-2	6
58	大明石町地区第22次	OA-22	大明石町1-7-1	明石市教育委員会	平成9年度	17-2	7
59	大明石町地区第24次	OA-24	大明石町1-1248-1	明石市教育委員会	平成9年度	11-8	7
60	大明石町地区第27次	OA-27	大明石町1-7-4・7	明石市教育委員会	平成10年度	17-2	8
61	大明石町地区第28次	OA-28	大明石町2	明石市教育委員会	平成10・11年度	外堀	8・9
62	大明石町地区第29次	OA-29	大明石町	兵庫県教育委員会	平成12・13年度	19-9	本書
63	柳屋町地区	TM-3	柳屋町8-5	明石市教育委員会	平成5年度	18-3	3
64	柳屋町地区第5次	TM-5	柳屋町9-5~8	明石市教育委員会	平成8年度	18-6	6
65	柳屋町地区第6次	TM-6	柳屋町2-20-1	明石市教育委員会	平成9年度	外堀	7
66	廣庭町地区第2次	TJ-2	廣庭町7-22	明石市教育委員会	平成7年度	外堀	5
67	廣庭町地区第3次	TJ-3	廣庭町1543、1547-1ほか	明石市教育委員会	平成7年度	21-10	5
68	廣庭町地区第4次	TJ-4	廣庭町8-11	明石市教育委員会	平成8年度	21-10	6

1. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所「明石城武家屋敷跡Ⅰ」1992年  
 2. 明石市教育委員会「明石城武家屋敷跡Ⅱ」1994年  
 3. 明石市教育委員会「明石城武家屋敷跡Ⅲ」2000年  
 4. 明石市教育委員会「明石市文化財年報 平成3年度」1993年  
 5. 明石市教育委員会「明石市文化財年報 平成7年度」1997年
6. 明石市教育委員会「明石市文化財年報 平成8年度」1998年  
 7. 明石市教育委員会「明石市文化財年報 平成9年度」1999年  
 8. 明石市教育委員会「明石市文化財年報 平成10年度」2000年  
 9. 明石市教育委員会「明石市文化財年報 平成11年度」2001年

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

#### 1. 層序 [図版6]

調査地は明石川現河道と明石駅周辺を流れた旧河道との間に形成された扇状地状の微高地上に位置している。近世以降の遺跡の基盤となる層は明石川の氾濫による細砂～極細砂層を主とし、部分的には中世の遺物を含む洪水砂層（67層）などが認められる。基盤層レベルでは北西方向が高く、南東方向が低い緩やかな傾斜を呈している。第1次調査区南壁で標高2.5m、調査区内で最も高い部分で標高2.8mである。

江戸初期の遺構面は基盤層の上に部分的に厚さ約20cm堆積あるいは盛土された層（66・68層）の上に設けられ、西部がやや高くなっている。その後、西部の低い部分を中心に厚さ約10～20cm程度の盛土（50・63層など）がなされ、この面が江戸時代の主要な遺構面となっている。明治初期にも盛土（40層）がなされ基盤層より約40cm程度高くなっている。その後も大きく盛土（1層）がなされて基盤層より1m程度高くなり、現代に至っている。

遺構の検出は江戸時代の主要な遺構面である63層上で一旦おこなったが、あまり明瞭に遺構が検出されなかつたため、結果的には基盤層まで下げて検出をおこなった。

#### 2. 遺構の概要 [図版3～5]

調査区を屋敷内の区画溝と考えられるSD005を境にして東西に分け、さらにそれぞれを遺構の疎密を目安として南北に分け、西北部をI区、西南部をII区、東北部をIII区、東南部をIV区と呼ぶこととする。

調査区は武家屋敷の1区画の大部分に相当すると考えられる。区画の周囲は溝で画されていると考えられる。SD203・205は区画の南辺を画する溝と考えられる。SD203は後に埋められ柵列（SA201）に変わると考えられる。それ以外はいずれもわずかに調査区外と推定される。調査区東端の南北方向の溝SD002は屋敷の東端を区画する溝の可能性もあるが、絵図から推定されている区画の位置とは異なる。武家屋敷の内部は武家屋敷の区画とは方位を異にする南北方向の溝SD005で東西に分けられている。

区画施設内の遺構は、明治期以降の搅乱が多く存在するため、調査区全域に広がっているように見えるが、実際にはかなり疎密が認められる。

I区では西北部で便槽と推定される円形土坑（SK005・019）や数多くの廃棄土坑が検出されている。東北部ではこの区画の主要な取水源である井戸（SE005）が検出されている。南部は最も高く安定した地盤であるが、深く掘り込まれた遺構はほとんどない。明瞭な遺構はSA201のみである。また、わずかに残存した武家屋敷以前のものと考えられる鋤溝（SD013）が検出されている。

II区では西南隅に池と考えられる大型土坑（SK030・037）が検出され、その東側では浅い土坑が多く検出されている。

III区は遺構が極めて少ない。西部で長方形の大型土坑（SK107）や小規模な廃棄土坑（SK08

3)、東部では鋤溝（SD008～010）がわずかに残存している。

IV区は西部では大型の土坑（SK070・087など）が密集しており、東南隅では大型の廃棄土坑（SK091・SK221）が検出されている。また、西部の土坑群に隣接して井戸（SE006）が設けられている。

## 第2節 遺構と遺物

以下に各地区毎に遺構とその遺構から出土した遺物について述べる。遺物の記述にあたっては下記の文献を参考にした。

肥前陶磁：大橋康二『肥前陶磁』1989年

九州近世陶磁研究会『九州陶磁の編年』2000年

丹波陶器擂鉢：大平茂「丹波焼江戸期擂鉢」『関西近世考古学研究』IX号 2001年

明石陶器擂鉢：稻原昭嘉「明石擂鉢の編年について」関西近世考古学研究会『近世の実年代資料』

2000年

土師器：村上泰樹「土器類」『明石城武家屋敷跡』1992年

井上智代「明石城武家屋敷跡の土師皿」『歴史と神戸』37巻5号 1998年

### 1. 区画施設

#### SD203 [図版8・21、写真図版5]

II区南端で検出された。屋敷地の南側を画する溝と考えられる。調査区外西側から延び、II区東端で北側に折れてSD005に接続する。SA201・SK227・SK031などに切られる。幅は30～50cm程度、深さも5cm程度のところが多く、最も深い部分が15cmで、全体的に浅い。

埋土からは肥前陶器碗（1）、備前陶器甕（2）、瓦質土器火鉢（3）が出土している。1の肥前陶器碗は刷毛目文のもので、18世紀前半頃のものと考えられる。2の備前陶器甕は水屋甕である。

#### SD205 [図版9・21、写真図版5・15]

III区南端で検出された。屋敷地の南側を画する溝と考えられる。西端はSD203が北側に折れてSD005に接続する部分に接して始まる。西端から5mはSD005と方位を同一にするように北側に振り、以東の部分は調査区に沿って東側調査区外へ延びている。調査区の沿った部分の南肩は調査区外である。幅は70～100cm程度、深さは25cm程度のところが多く、SD203と比べて深く断面逆台形のしっかりした溝である。

埋土からは肥前陶器皿（7～9）、備前陶器燭台（5）・擂鉢（6）、瓦質土器灯火具（10）が出土している。胎土目痕をもつ肥前陶器皿など17世紀前半のものが多く出土している。

#### SA201 [図版8、写真図版5]

II区南端で検出された。屋敷地の南側を画する柵列と考えられる。SD203を切って、柱穴を5ヶ所（SK225・229・230・245・233・246）確認でき、本来はSK233とSK246の間の柱穴は攪乱により破壊されていると考えられる。方位はSD203よりも東側をわずかに南側へ振っている。柱間は約1.3mで、柱穴内には石材（SK225・233・245）や瓦（SK229）を利用して根石が据えられている。

柱穴内からの出土遺物は少なく、年代の判別できるものはない。SK225から土錐、SK229か

ら肥前磁器片・不明鉄製品、SK230から土師器片・陶磁器片が出土している。

#### SD005 [図版8・21、写真図版15]

I・II区とIII・IV区の間で検出された。SD203が北へ折れ曲がってSD005に接続し、北端はSE005の手前で途切れている。方位は屋敷区画の方位とは異なり北側がやや東へ(N15°E)振っている。幅は広いところで1.0m程度、深さも北部の最も深い部分は25cmで、南端部の浅いところは10cm程度である。

埋土からの遺物は少なく、肥前磁器皿(11)、土師器蜻壺、平瓦が出土している。11は18世紀後半頃のものである。

#### SD202 [図版9、写真図版5]

III区東端で検出された。SD005とほぼ同一の方位をもつ南北方向の溝である。北端は調査区外へ延び、南側はSK221で切られているため区画溝SD205との関係はよくわからない。幅50cm、深さ25cm前後で、断面はV字状である。

遺物は出土していない。

## 2. I区

#### SK001 [図版10・21、写真図版15]

北側の幅2.0mの不整形土坑と南側のコンクリート基礎に切られる土坑に分かれる。検出面からの深さは北側の土坑は40cm、南側の土坑は50cmである。北側の土坑はSK007・020に切られる。

埋土から肥前磁器碗(12)、肥前陶器碗(13)、瀬戸美濃陶器皿、土師器皿、土師器焰烙(14)、軒桟瓦(15)が出土している。12はくらわんか手の肥前磁器碗で17世紀末～18世紀前半のものである。13は底部内に「清水」の刻印をもつ肥前陶器碗で17世紀後半頃のものである。

#### SK006 [図版10・22、写真図版15]

東側以外は明瞭な形を検出することはできず、土坑と言うよりは20cm程度掘り下げて整地をしたものと思われる。

埋土からは肥前磁器皿(20)・碗(21)、明石陶器擂鉢、丹波陶器德利、施釉陶器蓋(22)、土師器蜻壺(23)・灯明皿(柿釉)、軒桟瓦(24)、丸瓦(25)が出土している。20の肥前磁器皿は文様が鶴唐草、銘款が渦福である。21の肥前磁器碗とともにIV期前半のものである。ただし、この遺構には柿釉製品が含まれていることから18世紀末以降である。

#### SK007・020 [図版10・21、写真図版6]

少し形は乱れているが、円形の土坑である。SK020をSK007が切っている。SK007は直径1.5m、深さ38cm、SK020は直径1.3m、深さ43cmである。SK020の埋土は灰色のブロック土を含む土(6層)で埋め戻されている。

主としてSK007の埋土から肥前陶器碗(16)、肥前磁器碗(印判手)、丹波陶器鉢(17)、土師器皿・焰烙(18)、須恵器片、青磁碗、白磁碗、軒丸瓦が出土している。16の肥前陶器碗は刷毛目文である。18世紀前半頃のものである。土師器皿は手づくねのものと糸切りのものが出土している。

#### SK023 [図版10・21]

I区西北部で検出された不整形の土坑である。SK006、SE001に切られている。SK001との切れ合はよく分からない。検出面よりの深さは40cm程度である。

埋土から丹波陶器擂鉢（19）が出土している。大平F類のもので、18世紀中頃のものである。

#### SK002〔図版10、写真図版6〕

I区東北部で検出された土坑群である。SK010、SK013・014と共にまとめて検出された。SK013・014との切れ合いはよくわからない。平面形は長1.7m以上、幅70cmの長楕円形で、深さは47cmである。

埋土から丹波擂鉢、肥前磁器片、平瓦、丸瓦などが出土しているが、あまり良好な個体はない。

#### SK010〔図版10・23・36、写真図版6・17・30〕

I区東北部で検出された土坑群である。SK002、SK013・014と共にまとめて検出された。SK013・014を切っている。平面形は長2.35m、幅1.4mの不整形で、深さは38cmである。下層の6層から遺物は多く出土し、洪水砂（2層）の堆積までは自然堆積と考えられる。

埋土から多くの遺物が出土した。肥前磁器碗（44）・皿（45）・小杯（46）、肥前陶器碗（48・49）、京信楽陶器碗（50）、明石擂鉢（42・43）、土師器皿（55～59）、炮烙（51～54）、軒丸瓦（60）、丸瓦（61）、寛永通寶（288）が出土している。特に6層からまとめて出土した遺物は44・45・51～54・56・60である。肥前磁器は44の碗がくらわんか手、45の皿の銘款は比較的整った「大明年製」である。48の肥前陶器碗は疊付以外に褐釉が施され、49の肥前陶器碗は刷毛目文である。いずれも肥前IV期前半のものである。50の京信楽陶器碗はせんじ碗で、文様は白泥の上に鉄絵で格子、緑と赤の色絵で草を描いている。42・43の明石陶器擂鉢は稻原I-1類で、18世紀前半を中心とするものである。56～59は土師器皿で、底部は糸切りである。55は型作りの土師器皿で、内面に緑釉で文様が施されている。底部外面には「源」の刻印をもつ。

#### SK013・014〔図版10・22、写真図版6・16〕

I区東北部で検出された土坑群である。SK002、SK010と共にまとめて検出された。SK010に切られているが、SK002との切れ合い関係はわからない。土坑が密集していることにより輪郭が不明瞭であったため北側をSK013、南側をSK014として調査した。実際には不整楕円形の土坑が7基程度切れ合っているものと思われる。平面形は幅75cm程度の不整楕円形が多く、遺物の多く出土した2～9層に関わる部分は長1.8m程度、幅1.5mのSK010と類似するような土坑であったと考えられる。深さは30cm～55cmである。

主として遺物はSK013の7～9層で出土している。肥前磁器碗（26・27）・油壺（28）・小杯（29）、肥前陶器碗（30）、明石陶器擂鉢（31）、丹波陶器擂鉢（32・33）、施釉陶器壺（34）、土師器皿（37～39）・焰烙（35）・火消壺（36）、瓦質土器香炉（40）・灯火具（41）、平瓦、丸瓦（内タタキなし）が出土している。26の肥前磁器碗は外面の文様にコンニャク印判を使用するもので、IV期前半のものである。30の肥前陶器碗は刷毛目文のもので、肥前IV期前半のものである。31の明石陶器擂鉢は稻原I-1類で、18世紀前半を中心とするものである。32の丹波陶器擂鉢は大平F類で18世紀中頃のものである。37～39の土師器皿はいずれも糸切りである。

#### SK003〔図版11・24、写真図版18〕

I区西北隅で検出された土坑である。西端は調査区外である。平面形は隅丸長方形で、長1.75m以上、幅1.1m、深さ15cmである。

埋土から肥前磁器片、土師器焰烙（62）、丹波陶器擂鉢、軒丸瓦、軒平瓦（63）が出土している。62の土師器焰烙は口縁部がやや直線的に立ち上がり、外面に凹線をもつ。63の軒平瓦は中心飾りが橘花状

になったものである。19世紀以降のものと考えられる。

S K 0 0 5 [図版11・24、写真図版7・18]

I区西北部で検出された土坑である。SK012・016を切り、SK015に切られる。平面形は円形で、直径1.0m、深さ35cmである。

埋土から施釉陶器蓋(64)、土師器皿(65)・焰烙(66)、平瓦が出土している。65の土師器皿は内面を柿釉で施釉されるもので、見込みに「[ ]合」の刻印をもつ。18末～19世紀前葉のものである。

S K 0 1 2 [図版11・24、写真図版7]

I区西北部で検出された土坑である。SK005に切られる。平面形は円形で、直径85cm、深さ20cmである。

埋土から土師器皿(67)・焰烙(68)が出土している。67の土師器皿は手づくねで、18世紀前半までのものである。68の土師器炮烙は口縁部が内彎し、端部は丸味をもつ。

S K 0 1 6 [図版11・24、写真図版7]

I区西北部で検出された土坑である。北端はSK005に切られ、南端も攪乱に切られている。また、中央部もSK019に切られている。平面形は長1.5m以上、幅50cmの溝状で、深さ15cmと浅く溜まり状である。

埋土から施釉陶器水指(69)、平瓦、鉄製刀子、スラッグが出土している。

S K 0 1 9 [図版11、写真図版7]

I区西北部で検出された土坑である。SK016を切る。平面形は円形で、直径75cm、深さ30cmである。

埋土から丹波陶器擂鉢、土師器片、瓦質土器片が出土している。丹波陶器擂鉢は大平A類で、17世紀代のものである。

S K 0 1 7 [図版11・24]

I区西北部で検出された土坑である。上部に攪乱が存在し、第2次調査区の部分は検出できなかった。直径42cm、検出面からの深さは13cmである。

埋土から土師器灯明皿(70)・焰烙(71)が出土している。70の土師器灯明皿は外面に柿釉が施され、脚をもつ。71の炮烙は口縁部が上方に立ち上がる。19世紀代のものである。

S K 0 1 8 [図版11・24、写真図版7・18]

I区西北部で検出された土坑である。南部を攪乱で切られる。平面形は長1.9m、幅1.25mの梢円形で、深さは38cmである。埋土はレンズ状の堆積で自然に埋没したようである。

埋土から肥前磁器碗(72・73)、肥前陶器片、丹波陶器片、土師器人形龜(74)、瓦片が出土している。72の肥前磁器碗はくらわんか手のもので、波佐見V-1期のものである。73の肥前磁器碗は京焼風の小丸碗である。18世紀前半のものと思われる。

S K 2 1 6 [図版11、写真図版7・18]

I区西北部で検出された土坑である。西端は調査区外で、上部もかなり攪乱を受けている。平面形は円形で、直径1.2m、深さ45cmである。埋土は人為的に埋め戻されたようである。

埋土から肥前磁器碗(75)、白磁碗が出土している。75の肥前磁器碗は筒形碗で、18世紀末～19世紀初め頃のものである。白磁碗は中世のもので横田・森田分類V類のものである。

S K 0 2 6 [図版24]

I区東北部のSE005の西側で検出された土坑である。平面形は東西3.3m、南北3.0mの不整形で、明瞭な遺構ではない。深さは5cm以下が多いが、井戸の横の付近が深く20cm程度である。

埋土から肥前磁器碗(79)・皿(81)・小杯(80)、瀬戸美濃陶器小天目(82・83)、丹波陶器壺、土師器炮烙、須恵器片が出土している。79の肥前磁器碗は見込み蛇の目釉剥ぎでアルミナが塗布されていることから、波佐見V-2期のものである。81の肥前磁器皿は見込み蛇の目釉剥ぎで、底部露胎である。波佐見V-1期のものと考えられる。おおむね18世紀後半頃のものである。

#### SK040〔図版11・24〕

I区東北部で検出された土坑である。平面形は直径50cmの不整円形で、深さは13cmである。

埋土から染付磁器蓋(76)、土師器栓(77)、丸瓦が出土している。76の染付磁器蓋は19世紀前半以降のものである。77の土師器栓は上面に黄釉が施されている。

#### SK044〔図版11・24〕

I区東北部のSK26の下層で検出された土坑である。平面形は長1.12m、幅77cmの隅丸長方形で、深さは18cmである。

埋土から肥前磁器碗、青磁碗(78)、土師器片、須恵器片、平瓦が出土している。時期を判別できるほどの遺物は出土していない。青磁、須恵器、土師器などは中世の洪水砂に伴う遺物である。

#### SE005〔図版12・24・36、写真図版30〕

I区東北部で検出された。屋敷内で主要に機能した井戸と考えられる。上面での掘形の径は約3mであるが漏斗状に窄まり、検出面より1.2m下がったところからは直径2.2mで円筒状に掘り込まれている。検出面より3.8m程度掘り下げたが、井戸側および底については確認できなかった。

埋土からの出土遺物は遺構の規模に比して極めて少ない。肥前磁器碗(84)、丹波陶器擂鉢(85・86)、無釉陶器壺(87)、土師器鍋、須恵器捏鉢、白磁碗、平瓦、銅製鋤(289)が出土している。84の肥前磁器碗は印判手のもので、18世紀前半のものである。85の丹波陶器擂鉢は大平B類で17世紀前半、86の丹波陶器擂鉢は大平D1類で17世紀後半のものである。87の無釉陶器壺は上層出土のもので、19世紀以降のものと考えられる。土師器鍋、須恵器捏鉢、白磁碗は中世の洪水砂に伴うものと考えられる。

#### SK234〔図版11・25、写真図版8・18〕

I区東北隅で検出された土坑である。大小の土坑が切れ合って検出され、北側2つの土坑は調査区外まで延びている。深さはいずれも50cm程度で深い。

遺物は主として中央の土坑の埋土から出土した。肥前磁器片、丹波陶器小壺(89)・擂鉢(90)、舞子陶器皿(91)、土師器行平鍋(92)が出土している。土師器灯明皿は柿釉が施されている。90の丹波陶器擂鉢は見込み擂目が同心円状で、大平X1型式である。19世紀中頃～後葉にかけてのものである。91の舞子焼皿は桟瓦の形を模したもので、底面に「まいこ」の刻印をもつ。

#### SK067〔図版11・24〕

I区南部で検出された土坑である。平面形は径70cmの不整円形で、深さ30cmである。

埋土から丹波陶器擂鉢(88)、土師器皿、平瓦が出土している。88の丹波陶器擂鉢は大平H類で18世紀後葉の時期である。

#### SA101〔図版11、写真図版8〕

I区南部で検出された柵列である。南北に3つ並ぶ柱穴列で(SK046・SK062・SK088)である。いずれの柱穴も底に根石をもつ。南側の柱間は1.98m、北側の柱間は1.90mである。根石上面

のレベルは北から2.65m、2.53m、2.48mと下がっている。

柱穴から出土した遺物は少ない。SK046から丹波陶器片、土師器皿、平瓦、SK062から肥前陶器片が出土している。土師器皿は底部糸切りである。

#### SK013 [図版11]

I区南部で検出された溝である。南北方向に延長8.3m分検出された。幅40cm程度、深さ10cm程度の浅い溝である。埋土から遺物が出土していないため時期はよくわからないが、武家屋敷以前の鋤溝と考えられる。

### 3. II区

#### SK033 [図版12]

II区中部北端で検出された土坑である。平面形は直径1.18mの円形で、深さ55cmである。

埋土から肥前磁器壺、土師器皿、平瓦が出土している。土師器皿は柿袖が施されているもので、19世紀以降のものである。

#### SK041 [図版12・27]

II区中部北端で検出された土坑である。SK032・033に切られていることから形態は不明である。深さは10cmである。

埋土から肥前磁器碗（120）が出土している。筒型碗でIV期後半のものである。

#### SK034 [図版12・27]

II区西部北端で検出された土坑である。北東部を攪乱に切られている。平面形は東西87cm、南北26cmの長方形で、深さは20cmである。

埋土からは肥前磁器碗・鉢（117）・壺、京信楽陶器碗、明石陶器擂鉢、土師器皿・焰烙（118）が出土している。117の肥前磁器鉢は蛇の目凸形高台をもつ。肥前V期のものである。118の土師器焰烙は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部のヨコナデが底部付近にまで及んでいる。

#### SK065 [図版12、写真図版9・21]

II区東部北端で検出された土坑である。平面形は直径1.2mの円形で、深さは53cmである。

埋土から肥前磁器紅猪口（129）、須恵器片、土師器片、平瓦が出土している。129の肥前磁器紅猪口は高台が低く、体部外面に笹文が描かれるものである。19世紀以降のものと考えられる。

#### SK119 [図版12、写真図版21]

II区東部北端で検出された溝状の遺構である。北端は攪乱に切られている。断面は逆台形で、幅は28cm、深さは15cmである。

埋土から丹波陶器擂鉢（130）、土師器炮烙が出土している。130の丹波陶器擂鉢は大平E類で18世紀前半のものである。

#### SK120 [図版12、写真図版21]

II区東部で検出されたピット状の遺構である。平面形は直径22cmの円形で、深さ20cmである。

埋土から肥前磁器紅皿（131）、土師器片が出土している。131の肥前磁器紅皿は18世紀後半以降のものである。

#### SK029 [図版13・26、写真図版18]

II区西部で検出された土坑である。SK037が埋められた後に作られたものである。平面形は直径

1.43mの円形で、深さは35cmである。

埋土からは土師器灯明皿（112）、軒棧瓦（110・111）が出土している。112の土師器灯明皿は内面の突帯が低いタイプのものである。柿釉は内面～口縁部外面に施されており、18世紀末以降のものである。110の軒棧瓦は側端の屈曲部を貼り付けによって作り出している。

**S K 0 3 0 ・ 0 3 7** [図版13・25・26・36、写真図版9・19・20・30]

II区西南隅で検出された池状の遺構である。SK029・036に切られ、SD012はSK030・037に附属する溝と考えられる。SK030・037は一体のもので、弧状に彎曲する不整形の大型土坑である。規模は東西6.9m以上、南北3mである。

SK030部分の埋土からは肥前磁器皿（93）、丹波陶器擂鉢、明石陶器擂鉢、銅製煙管が、SK037部分の埋土からは肥前磁器碗（94～96）・鉢（97）・徳利（98）・猪口（99）、瀬戸美濃磁器碗（100）、京信楽陶器碗（104）・灯明皿（103）、明石陶器擂鉢（101）、丹波陶器徳利（102）、土師器皿（105）・秉燭（106）、軒丸瓦（107）、軒棧瓦（108・109）、銅製煙管（290）、鉄釘が出土している。93・94のコンニャク印判による五弁花が施される肥前磁器のように18世紀後半頃のものが多いが、95の外面にコンニャク印判で施文する肥前磁器碗のように18世紀前半のものから、100の瀬戸美濃磁器碗や96の見込みに手描きの五弁花の施される肥前磁器碗、97の底部凹形高台の肥前磁器鉢などのように19世紀に入るものまである。

**S D 0 1 2** [図版13・26]

II区西北部で検出された南北方向の溝である。南側はSK037の北端部に接続し、北側は攪乱に切られている。SK030・037に附属するものと思われる。断面はV字に近い逆台形で、幅38cm、深さ20cmである。

埋土から肥前磁器碗（113）、平瓦が出土している。113の肥前磁器碗はくらわんか手のもので、18世紀前半のものである。

**S K 0 3 6** [図版13・27、写真図版9・20]

II区西部で検出された土坑である。SK037が埋められた後に作られたものである。土坑の掘方は2段掘りで、中央に丹波焼の甕が伏せられていた。土坑の上面は長径1.3m、短径1.1mの不整形円形で、土坑下部は径50cmの円形である。深さは54cmである。甕の底部上は漆喰を塗って、直径50cm程度の槽状のものが作られていたようである。槽の中央は直径5cmの孔が開けられている。また、据えられた甕の底部も直径12.8cmの孔が開けられている。

遺構中央部から丹波陶器甕（115）、掘方埋土から瀬戸美濃陶器水甕（116）、遺構埋土から土師器皿（114）が出土している。115の丹波陶器甕は18世紀後半のものである。116の瀬戸美濃陶器水甕は19世紀以降のものである。114の土師器皿は柿釉の施されていないもので、SK030・037に伴うものであろう。

**S K 0 3 5** [図版14・27、写真図版10]

II区中部で検出された土坑である。SK054を切り、SK059に切られる。平面形は長径2.6m、短径2.1mの梢円形で、深さは25cmである。

埋土から肥前磁器碗、京信楽陶器片、丹波陶器擂鉢（119）、土師器片、不明銅製品が出土している。119の丹波陶器擂鉢は大平H類で、18世紀後葉のものである。

**S K 0 4 8** [図版14、写真図版10]

II区中部で検出された土坑である。SK059に切られる。土坑は2段掘りになっている。上面は長径1.6m、短径1.4mの不整形で、下部は一辺75cmの正方形である。深さは70cmである。

埋土からの出土遺物は非常に少なく、土師器片、平瓦が出土している。

#### SK054 [図版14・27]

II区中部で検出された土坑である。SK035を切る。平面形は長径2.3m、短径1.45mの椭円形で、深さは42cmである。

埋土から肥前磁器碗（121）・紅皿、土師器片、丸瓦が出土している。121の肥前磁器碗はくらわん手のもので、18世紀前半のものである

#### SK059 [図版14・27、写真図版20]

II区中部で検出された土坑である。SK035・SK048を切る。平面形は長1.8m、幅1.2mの長方形で、深さは12.5cmである。

埋土から肥前磁器蓋（122）・小杯（123）・紅皿（124）、瀬戸美濃陶器皿（125）、無釉陶器燭錠（126・127）、土師器秉燭（128）、軒丸瓦、丸瓦（内タタキ）、鉄釘が出土している。122の肥前磁器蓋は内面見込みに環状梅文をもつもので、肥前IV期後半（18世紀後半）のものである。IV区SK091出土の肥前磁器碗（219）とセットとなる。128の土師器秉燭は柄部に「キフ矢薙丁 万九ヤ市兵衛」、底部外面には「本元」の刻印をもつ。

### 4. III区

#### SD008～010 [図版14]

III区東南部で検出された東西方向の3条の溝である。耕作時の鋤溝と考えられる。方位はN73W°～N68°Wである。SD008と010の溝間の間隔は75cmである。SD009と010の溝間の間隔は2.25～1.75mで、溝が等間隔に並んでいたとすればこの間に1・2本の溝が存在したものと考えられる。長4.5～4.0m、幅25～40cmで、深さは6cm程度である。

遺構埋土から少量の遺物が出土しているが、時期を特定できるほどのものは出土していない。

#### SK080 [図版14・27]

III区西南部で検出された土坑である。東部は攪乱により破壊されている。平面形は長37cm以上、幅42cmの不整椭円形で、深さは30cmである。

埋土から施釉陶器行平鍋（132）が出土している。

#### SK083 [図版14・27]

III区西端部で検出された土坑である。平面形は長68cm、幅50cmの椭円形で、深さは29cmである。

埋土から施釉陶器急須（133）・蓋（134）が出土している。

#### SK107 [図版10・21、写真図版10]

III区西北部で検出された土坑である。平面形は長2.78m、幅1.15mの長方形で、深さは60cmである。

埋土から土師器皿（135）、磁器片が出土している。135の土師器皿は小碗形のもので、17世紀前半のものである。

#### SK223 [図版14・27、写真図版21]

III区東端部で検出された土坑である。平面形は長80cm、幅52cmの不整椭円形で、深さは13cmである。

埋土から肥前色絵磁器小杯（136）が出土している。136の肥前色絵磁器小杯は器壁が薄く、内面には

杯を持った女性が色絵で描かれている。19世紀以降のものである。

## 5. IV区

### SK070・090 [図版15・28・29、写真図版11・21・22]

IV区西南隅で検出された大型土坑である。不整形の土坑が複数掘り込まれている。最も深く大きい部分をSK070、その北側に連なる浅い部分をSK090として調査をおこなった。個々の切り合いはよく分からぬが、埋没の過程ではSK090部分が最後に埋まつたと考えられる。SK070部分は長4.4m、幅2.5mの横円形で、深さは深い所で1.1m程度である。SK090部分は不整形でSK070の北側へ1.7m程度延び、深さは50cm程度である。

SK070部分の埋土から肥前陶器碗(143)・皿(144~146)、丹波陶器擂鉢(147~149)、土師器皿(151~176)・三足付鉢(177)・焙烙(150)、丸瓦(178)、SK090部分の埋土から丹波陶器擂鉢、土師器皿(179~184)、瓦質土器火鉢(185)、平瓦が出土した。143の肥前陶器碗は肥前I~2期、144・145の肥前陶器皿は折縁皿で、肥前II期のものである。144は砂目痕をもつ。147~149の丹波陶器擂鉢は大平A類である。土師器皿はSK070では回転糸切りで小碗形のもの(156~176)が大半を占め、回転糸切りで杯形のもの(155)や手づくね成形のもの(151~154)がごく少量ある。SK090部分では回転糸切りで杯形のもの(182~184)がやや多く出土している。

### SK245 [図版15、写真図版11]

IV区西南隅で検出された土坑である。SD205に切られ、SK070とは切れ合っているが前後関係は分からぬ。平面形は長2.77m、幅1m程度の隅丸長方形で、深さは40cmである。

埋土から遺物は出土していないが、SK070とほぼ同時期と考えられる。

### SD007 [図版15・30、写真図版11]

IV区南部で検出された東西方向の溝である。SK087の南側には接して位置する。西端はSK087と並びを同じくし、東側はSK221に切られているため、区画溝SD205・202などとの関係は分からぬ。SK121・240を切る。方位はN73°Wで、幅90~40cm、深さ32~22cmである。

埋土から肥前磁器碗(212)、土師器皿(213・214)、熨斗瓦が出土している。212の肥前磁器碗は筒形碗で、見込みに環状の松竹梅文が描かれている。肥前IV期後半のものである。

### SK087 [図版15・29・30、写真図版11・23・24]

IV区西部で検出された大型土坑である。SD007のほぼ北側に接し、方位も同じくしている。平面形は長6.8m、幅1.7mの長方形で、深さは40cmである。

埋土から肥前磁器碗(186・187)・皿(188・191)・蓋(189)・仏飯具(190)、京信楽陶器碗(192~195)、明石陶器擂鉢(196・197)、備前陶器花入(198)、丹波陶器甕(199)、施釉陶器土瓶(202)・蓋(200)・燭台(205)、無釉陶器蓋(201)・皿(203・204)、施釉陶器、土師器皿(206・207)・蛸壺(209)・三足付鉢(208)・蓋(210)・人形、軒丸瓦(211)、平瓦が出土している。187の肥前磁器碗は189の蓋とセットである。肥前IV期後半(18世紀後半)のものである。明石陶器擂鉢はI-1類である。201・203・204の無釉陶器や205の施釉陶器燭台は赤褐色の胎土が特徴的である。206の土師器皿は陶器型の整った形である。207の土師器皿は底部内面まで回転ナデが施されている。201の土師器蓋は柿釉が施されている。211の軒丸瓦は剣酢漿紋のものであり、藤井松平家の時期(1649~1679年)のものである。

### SK073 [図版16・27、写真図版21]

IV区西北部で検出された土坑である。SK109を切っている。平面形は長2.18m、幅1.05mの長方形で、深さは35cmである。

埋土から肥前磁器碗（142）、丹波陶器擂鉢、明石陶器擂鉢、瀬戸美濃陶器水甕、土師器灯明皿、軒丸瓦、棟瓦が出土しているが、良好な個体は少ない。142の肥前磁器碗は筒形碗で、18世紀後葉～19世紀初頭のものである。土師器灯明皿は柿釉が施されていることから19世紀以降のものである。

#### SK074 [図版16]

IV区西北部で検出されたピット状の遺構である。平面形は直径30cmの円形で、深さは20cmである。

埋土から丹波陶器擂鉢、平瓦が出土している。丹波陶器擂鉢は大平A類で17世紀前半のものである。

#### SK086 [図版16]

IV区西北部で検出された土坑である。SK108と切れ合があるが、前後関係は分からぬ。平面形は直径50cmの円形で、深さは24cmである。

埋土から平瓦、丸瓦が出土している。丸瓦の凹面には内タタキ痕をもつ。

#### SK108 [図版16]

IV区西北部で検出された土坑である。SK086・109と切れ合があるが、前後関係は分からぬ。平面形は切れ合による破壊部分が多いため判然としないが、長方形と考えられる。長1.93m、幅1.08mで、深さは35cmである。

埋土から土師器人形、平瓦が出土している。

#### SK109 [図版16・27、写真図版21]

IV区西北部で検出された土坑である。SK073に切られ、SK108と切れ合があるが、前後関係は分からぬ。平面形は長1.75m、幅1.25mの長方形で、深さは60cmである。

埋土から肥前磁器碗、土師器皿、軒平瓦（140）、平瓦、丸瓦、貝（141）が出土している。土師器皿は柿釉が施されていることから19世紀以降のものである。

#### SK241 [図版16・31]

IV区西南部で検出された土坑である。平面形は長2.2m、幅1mの不整橢円形で、深さは22cmである。

埋土から三田青磁香炉（215）、明石陶器擂鉢（216）、土師器皿（217）が出土している。216の明石陶器擂鉢は口縁部が断面3角形を呈するもので、19世紀代のものである。

#### SK244 [図版16・31]

IV区西南部で検出された土坑である。平面形は長1.3m、幅48cmの橢円形で、深さは15cmである。

埋土から土師器皿（218）が出土している。小碗形のもので、17世紀前半のものである。

#### SE006 [図版16・27、写真図版12・21]

IV区中部北端で検出された井戸である。平面形は直径1.6mの円形で、深さは2.45mである。本来は瓦組の井戸であったと考えられるが井戸瓦はすべて抜き取られていた。底の桶も2条の籠の痕跡を残すのみであった。

埋土からはガラス紅皿（137）、丸瓦（138）、井戸瓦（139）が出土している。138の丸瓦は凹面に内タタキ痕を残すものである。139の井戸瓦はヘラ状の工具で凸面にキザミ目を施している。

#### SK091 [図版17・31、写真図版25]

IV区東部で検出された大型の廃棄土坑である。遺構南端部は調査区境界部のため十分に検出することができなかった。SE004に切られている。平面形は長3.75m、幅約3mのいびつな長方形で、深さ

は25cmである。

埋土から肥前磁器鉢（219）、瀬戸美濃磁器碗（221）、丹波陶器片、土師器皿（223・224）・焰烙（225）、ガラスボトル（227）、軒丸瓦（226）、棟瓦が出土している。219の肥前磁器鉢は、内面見込みに環状梅文をもつもので、肥前IV期後半（18世紀後半）のものである。II区SK059出土の122の肥前磁器蓋とセットとなる。221の瀬戸美濃磁器碗は端反碗である。223・224の土師器皿は柿釉が施されている。19世紀以降のものである。227のガラスボトルは色調が濃緑色で、底部中央が球形にせり上がっている。

#### S K 2 2 1 [図版17・31~33、写真図版12・25~27]

IV区東端部で検出された大型の廃棄土坑である。SE201に切られ、SD007・202・205を切っている。平面形は東西4.08m、南北4.9mの逆L字形で、深さ68cmである。

埋土から肥前磁器碗（228・229・230）・皿（233・234）・小杯（236）・香炉（237）・燭台（238）、瀬戸美濃磁器碗（231）、染付磁器碗（232）・皿（235）・蓋（239）、色絵磁器蓋（240）、三田青磁碗（241）、明石陶器擂鉢（242）、丹波陶器徳利（243）、舞子陶器碗（247）、施釉陶器小杯（248・249）・皿（251）・壺（246・253）・土瓶（245・246）、白磁小杯（250）、瀬戸美濃陶器脚部（252）、土師器皿（254）・炮烙（255）・焜炉（256・258）・卸皿（257）、鉄釘、スラッグが出土している。肥前磁器は18世紀中葉以降19世紀のものがある。232・235の染付磁器碗・皿は銅板刷り、239の染付磁器蓋は型紙刷りで明治以降のものである。242の明石陶器擂鉢は稻原I-1類である。247の舞子陶器碗は高台内に「まいこ」の刻印をもつ。256はいわゆる弥七焜炉の脚部で「姫路請合八弥」の刻印をもつ、19世紀後半以降のものである。

## 6. 近代

近代の遺構については調査の対象外であったが、調査時に時期の判明しなかったものについては、結果的として部分的に調査を行うこととなった。特に瓦組井戸については5基すべて調査を行った。瓦組井戸など特に顕著なものの報告する。

#### S E 0 0 1 [図版19・34、写真図版13・28]

I区西南部で検出された井戸である。瓦製の側材を10枚組み合わせて井戸側としている。井戸側の径は80cm、円形の掘形の径は1.2mである。上から7段を瓦で積み、それ以下はコンクリート土管の井戸側である。

埋土からはコンクリート殻などと共に染付磁器小杯（273）、ガラス状スラッグ、貝殻が出土している。

#### S E 0 0 2 [図版19・35、写真図版13・30]

II区西部で検出された井戸である。調査前の状況は板状の切石によって蓋がなされ、井戸内は空洞であった。瓦組の下半は崩れ落ちていた。瓦製の側材を9枚組み合わせて井戸側としている。井戸側の径は75cm、不整円形の掘形の径は1.2mである。上から6段を瓦で積み、最下段に高さ90cmの桶が据えられている。深さは検出面より2.5mである。

埋土から顕著な遺物は出土していない。

#### S E 0 0 3 [図版19・34、写真図版13・29]

II区東部で検出された井戸である。瓦製の側材を10枚組み合わせて井戸側としている。井戸側の径は75cm、円形の掘形の径は1.2mである。上から11段を瓦で積み、最下段に高さ85cmの桶が据えられている。深さは検出面より3.3mである。

埋土からはコンクリート殻などと共に染付磁器小杯（277）、陶製便器（278）、ガラス瓶（279）が出

土している。277の染付磁器小杯は外面に高砂の歌詞、見込みには色絵の切符形の枠のなかに「1928  
新車 ごれいかい 神車」とプリントされている。1928が年号を示すものだとすれば、1928年の山陽電  
鉄の神戸ー姫路間開通を記念して配布されたものと考えることができる。

#### S E 0 0 4 [図版19・34、写真図版13・29]

IV区東部で検出された井戸である。瓦製の側材を10枚組み合わせて井戸側としている。井戸側の径は  
75cmである。掘形は上から1.6mまでが1辺1.4mの方形で、それ以下は径1.05mの円形である。上から  
10段を瓦で積み、最下段に高さ65cmの桶が据えられている。深さは検出面より3.0mである。

埋土からはコンクリート殻などと共に青磁皿(282)、土師器蛸壺(283)などが出土している。

#### S E 2 0 1 [図版20・35、写真図版14・30]

IV区東端で検出された井戸である。瓦製の側材を10枚組み合わせて井戸側としている。井戸側の径は  
70cmである。S E 0 0 4と同様に掘形は上から1.3mまでが1辺1.4mの方形で、それ以下は径93cmの円  
形である。上から11段を瓦で積み、最下段に高さ67cmの桶が据えられている。深さは検出面より3.3m  
である。

埋土からはコンクリート殻が出土している。

#### S K 0 1 5 [図版20・33、写真図版14・27]

I区西北部で検出された土坑である。S K 0 0 5を切っている。掘方の平面形は直径50cmの円形で、  
深さは34cmである。掘方の中央部には伏せた丹波陶器甕が据えられている。甕の底部には径1.2cmの孔  
が開けられている。

土坑中央に据えられていた丹波陶器甕(259)のほか、埋土から丹波陶器擂鉢(260)、白磁犬形水滴(261)、  
ガラス瓶(262)が出土している。259の丹波陶器甕は18世紀後半のものであるが、埋土から262のガラ  
ス瓶が出土していることから、この遺構は近代まで使用されていたことが分かる。

#### S K 0 6 1 [写真図版28]

I区東南部で検出された土坑である。南側を建物基礎によって接されている。平面形は長1.15m、幅  
75cm以上の長方形で、深さは34cmである。

埋土からガラス瓶(264~267)、施釉陶器蓋(268)、不明瓦製品(269・270)が出土している。いず  
れも完形品である。ガラス瓶の色は264・265が青、266が透明、267が茶色である。269・270の不明瓦製  
品は杏形のもので、何らかの台と推定される。

#### S K 1 2 3 [図版20・33、写真図版15・27]

II区西南部で検出された土坑である。直径50cmの掘方に大型の鉢を据えている。深さは34cmである。  
出土した遺物は据えられていた大型の鉢(263)のほかはほとんどない。263の施釉陶器鉢は体部内面・  
口縁部端面にハケによる褐釉が施され、見込みに5ヶ所の砂目を残している。胎土は赤褐色である。

## 7. 包含層 [図版36、写真図版30]

近世以降は調査区南部の整地層から若干の遺物が出土しているが、良好な個体はほとんどなかった。  
また、近世の遺構面下の洪水砂(図版6~67層)から中世の須恵器・土師器・貿易陶磁器・瓦(291)  
などが出土しているが、ほとんど細片のみである。291は軒平瓦で、瓦当部は包み込み技法で作られて  
いる。文様は中心飾りが法相華で、その両側に唐草展開するものと考えられる。12世紀後半頃のものと  
考えられる。

第3表 遺構一覧表(1)

地区	遺構名	遺物	本文	遺構図版	遺構写真	遺物図版	遺物写真
区画	SA201 (SK225)	土鍾	9	8	5		
区画	SA201 (SK229)	肥前磁器片、不明鉄製品	9	8	5		
区画	SA201 (SK230)	土師器片、陶磁器片	9	8	5		
区画	SA201 (SK235)	土師器片	9	8	5		
区画	SD005	肥前磁器皿、土師器銷壺、平瓦	10	8			15
区画	SD202	なし	10	9	5		
区画	SD203	肥前陶器碗、備前焼、瓦質土器火鉢	9	8	5	21	
区画	SD205	肥前陶器皿、備前焼台、備前播鉢、丹波片、瓦質土器火具	9	9	5	21	15
区画	SK071	土師器皿					
区画	SK227	土師器銷壺、陶磁器片、鉄釘		8		21	
I	P201	肥前磁器片 (18C)					
I	SA001 (SK046)	丹波焼、土師器皿 (糸切り)、平瓦	13	11	8		
I	SA001 (SK062)	肥前陶器片	13	11	8		
I	SA001 (SK088)	なし	13	11	8		
I	SD003	肥前磁器片、京信樂片、土師器片、平瓦					
I	SD013	なし	14	12			
I	SE005	肥前磁器碗、丹波播鉢、無釉陶器壺、土師器鍋、須恵器鉢、白磁碗、平瓦、銅製鉗	13	12	8	24	
I	SK001	肥前陶器碗、肥前磁器碗、瀬戸美濃皿、土師器皿、土師器炮烙、軒棟瓦	10	10		21	15
I	SK002	丹波播鉢、染付磁器 (肥前系)、平瓦、丸瓦 (内タキ)	11	10			
I	SK003	肥前磁器、土師器炮烙、丹波播鉢、軒丸瓦、軒平瓦	11	11		24	
I	SK004	丹波片、施釉陶器行平鍋、軒丸瓦、平瓦、燒瓦					
I	SK005	施釉陶器蓋、土師器皿 (柿袖)・炮烙、平瓦	12	11		24	18
I	SK006	肥前磁器皿・碗、明石播鉢、丹波徳利、施釉陶器蓋、土師器銷壺・灯明台 (柿袖)、軒棟瓦、丸瓦	10	10		22	15
I	SK007	肥前陶器碗、肥前磁器 (印判)、丹波播鉢・鉢、土師器皿 (手づくね、糸切り) 土師器炮烙、須恵器片、青磁碗、白磁碗、軒丸瓦 (内タキ)	10	10	6	21	
I	SK009	なし					
I	SK010	肥前磁器碗・皿・小杯、肥前陶器碗、京焼碗、明石播鉢、土師器皿・炮烙、軒丸瓦、丸瓦、寛永通寶	11	10	6	23	16・17
I	SK011	軒丸瓦 (内タキ)、土師器片					
I	SK012	土師器皿・炮烙	12	11		24	
I	SK013, 014	肥前磁器碗・油壺・小杯、肥前陶器皿、明石播鉢・丹波播鉢、施釉陶器壺・土師器皿・炮烙・火消壺、瓦質土器香炉・火具・平瓦、丸瓦 (内タキなし)	11	10		22	16
I	SK016	施釉陶器水指・平瓦、鉄製刀子、スラッシュ	12	11		24	
I	SK017	土師器炮烙・灯明皿 (柿袖)	12	11		24	
I	SK018	肥前磁器碗・肥前陶器片、丹波片、土師器人形龜、瓦	12	11	7	24	18
I	SK019	丹波播鉢 (17C)、土師器片・瓦質土器片	12	11	7		
I	SK020	なし	10	10	6		
I	SK021	青磁片、土師器片					
I	SK023	丹波播鉢 (17c後半)	10	10		21	
I	SK026	肥前磁器碗・皿・小杯、瀬戸美濃小天目、丹波壺、土師器炮烙、須恵器片	12			24	
I	SK040	染付磁器蓋、土師器栓・丸瓦 (内タキ)	13	11		24	
I	SK044	肥前磁器碗・青磁碗、土師器片・須恵器片・平瓦	13	11		24	
I	SK049	なし					
I	SK051	土師器鍋 (中世)					
I	SK053	丹波焼、土師器鍋 (中世)					
I	SK067	丹波播鉢、土師器皿・平瓦	13	11		24	
I	SK068	須恵器碗 (中世)					
I	SK203	なし					

第4表 遺構一覧表(2)

地区	遺構名	遺物	本文	遺構図版	遺構写真	遺物図版	遺物写真
I	SK205	なし					
I	SK216	肥前磁器碗、白磁碗(横田・森田V類)	12	11	7		18
I	SK218	鉄釘					
I	SK234	肥前磁器片、丹波播鉢・小壺、舞子皿、土師器行平鍋、灯明皿(柿袖)	13	11	8	25	18
II	SD001	丹波播鉢					
II	SD002	須恵器壺					
II	SD004	丹波壺・壺、須恵器壺、土師器片、平瓦					
II	SD012	肥前陶磁碗、平瓦	15	13		26	
II	SK027	肥前磁器片、棗瓦					
II	SK028	土師器炮烙					
II	SK029	土師器皿(柿袖)、軒棗瓦	14	13		26	18
II	SK030	肥前磁器皿、丹波播鉢(18C後半)、明石播鉢(18C後半)、銅製煙管	15	13	9	25	18
II	SK032	土師器壺蓋、丸瓦(内タタキ)、平瓦、剪斗瓦					
II	SK033	肥前磁器壺、土師器皿(柿袖)、平瓦	14	12			
II	SK034	肥前磁器碗・鉢・壺、京焼碗、明石播鉢、土師器皿・炮烙	14	12		27	
II	SK035	肥前磁器碗、京焼片、丹波播鉢、土師器片、不明銅製品	15	14	10	27	
II	SK036	丹波壺、瀬戸美濃水壺、土師器皿	15	13	9	26	20
II	SK037	肥前磁器碗・鉢・徳利・猪口、京信楽碗・灯明皿、瀬戸磁器碗、明石播鉢、丹波徳利、銅製煙管、土師器皿・秉燭、軒丸瓦、軒棗瓦、鉄釘	15	13	9	25・26	19・20
II	SK038	肥前磁器片、土師器片					
II	SK039	須恵器片、土師器羽釜、青磁片					
II	SK041	肥前磁器碗	14	12		27	
II	SK042	肥前磁器片、須恵器碗、土師器片、丸瓦					
II	SK047	土師器片、平瓦					
II	SK048	土師器片、平瓦	15	14	10		
II	SK050	肥前磁器(18C後半)、土師器皿(糸切り)・炮烙					
II	SK054	肥前磁器碗・紅皿、土師器片、丸瓦	16	14		27	
II	SK055	肥前磁器(18C後半~19C)					
II	SK056	陶器片					
II	SK057	須恵器片、土師器片					
II	SK059	肥前磁器蓋・小杯・紅皿、瀬戸美濃皿、無釉陶器燐錫・土師器秉燭・軒丸瓦・丸瓦(内タタキ)、鉄釘	16	14		27	20
II	SK064	須恵器片、土師器片					
II	SK065	肥前磁器紅猪口・須恵器片、土師器片、平瓦	14	12	9		21
II	SK119	丹波播鉢(18C後半)、土師器炮烙	14	12			21
II	SK120	肥前磁器紅皿(18C後半)、土師器片	14	12			21
II	SK122	なし					
II	SK228	肥前磁器碗(くらわんか手)					
II	SK231	陶器片					
II	SK232	陶器片					
II	SK233	陶器片、土師器片					
II	SK235	土師器片					
II	SK237	土師器炮烙					
II	SK238	肥前磁器片					
II	SK239	なし					
II	SK243	肥前磁器片					
III	SD008	肥前磁器壺、土師器炮烙	16	14			
III	SD009	陶器片、磁器片、土師器片	16	14			
III	SD010	土師器炮烙	16	14			
III	SK069	肥前磁器(網目文)、青磁(中世)					
III	SK078	平瓦					
III	SK079	陶器片					
III	SK080	施釉陶器行平鍋	16	14		27	
III	SK083	施釉陶器急須・蓋	16	14		27	
III	SK093	土師器片、青磁片					
III	SK095	陶器片					
III	SK098	陶器片、土師器片					

第5表 遺構一覧表(3)

地区	遺構名	遺物	本文	遺構図版	遺構写真	遺物図版	遺物写真
III	SK100	丸瓦(内タタキ)、平瓦					
III	SK103	なし					
III	SK107	土師器皿、磁器片	16	14	10	27	
III	SK111	陶器片、瓦片					
III	SK112	土師器片					
III	SK117	須恵器捏鉢					
III	SK118	陶器片、土師器片					
III	SK220	陶磁器片					
III	SK223	肥前色絵小杯	16	14		27	21
IV	SD007	肥前磁器碗、土師器皿、熨斗瓦	17	15	11	30	
IV	SE006	ガラス紅皿、丸瓦、井戸瓦	18	16	12	27	21
IV	SK070	肥前陶器碗・皿・丹波擂鉢、土師器皿・三足付鉢・炮烙・丸瓦	17	15	11	28・29	21・22
IV	SK073	肥前磁器碗、丹波擂鉢、明石擂鉢、瀬戸美濃水壺、土師器灯明皿(柿釉)、軒丸瓦、棟瓦	17	16			21
IV	SK074	丹波擂鉢(17C初)、平瓦	18	16			
IV	SK086	平瓦、丸瓦(内タタキ)	18	16			
IV	SK087	肥前磁器碗・皿・蓋・仏飯具、京焼碗、明石擂鉢、備前花入、丹波壺、施釉陶器土瓶・蓋・皿・燭台、土師器皿・胡蝶・三足付鉢・蓋(柿釉)・人形・軒丸瓦、平瓦	17	15	11	29・30	23・24
IV	SK090	丹波擂鉢、土師器皿、瓦質土器火鉢、平瓦	17	11		29	22
IV	SK091	肥前磁器鉢、瀬戸磁器碗、丹波片、土師器皿(柿釉)・炮烙、ガラスポットル、軒丸瓦、棟瓦	18	17		31	25
IV	SK108	土師器人形、平瓦	18	16			
IV	SK109	肥前碗(SK91と同じ)、土師器皿(柿釉)・軒平瓦、平瓦、丸瓦	18	16		27	21
IV	SK121	肥前磁器片、土師器片、棟瓦		15			
IV	SK221	肥前磁器碗・皿・小杯・香炉・燭台鉄釘・染付磁器碗・皿・蓋・色絵磁器蓋・三田碗・明石擂鉢・丹波徳利・舞子碗・施釉陶器皿・小杯・壺・蓋・土師器皿(柿釉)・炮烙・煙炉・卸皿・スラッグ	19	17	12	31~33	25~27
IV	SK241	青磁香炉、明石擂鉢、土師器皿	18	16		31	
IV	SK244	土師器皿	18	16		31	
IV	SK245	なし	17	15	11		

第6表 遺物一覧表(1)

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径	器高	底径	その他の法量	調整右より備考
1	施釉陶器(昭前)	碗	区画	SD203			4.4		裏付のみ露胎。胎は銅線胎・白泥
2	施釉陶器(昭前)	碗	区画	SD203					内外面とも凹凸ナデ
3	瓦質土器	火鉢	区画	SD203	(34.7)	13.25	(23.6)		口縁部はヨコナデ、体部・底部内面はナデ、底部外面は粗目
4	土師器	壺蓋	II	SK227			10.2		内面～体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
5	施釉陶器(昭前)	燭台	区画	SD205			11.2		底部は口縁部内面～口縁部外面に施釉、首部は外面に施釉、胎はオリーブ胎
6	施釉陶器	擂鉢	区画	SD205	(19.4)	7.8	7.1		口縁部内面～体部外面は回転ナデ、体部外面下端はヘラケズリ、底部外面は不調整、擇目は3本の櫛目
7	施釉陶器(昭前)	皿	区画	SD205	11.0	3.2	3.3		体部外面下半～底部外面は露胎、胎は灰胎、文様は周輪、見込みは白泥は4ヶ所
8	施釉陶器(昭前)	皿	区画	SD205			4.1		体部外面下半～底部外面は露胎、胎は灰胎、文様は周輪、見込みは白泥あり
9	施釉陶器	碗	区画	SD205	12.05	3.9	4.25		体部外面下半～底部外面は露胎、胎は灰胎、見込みの白泥は3ヶ所
10	瓦質土器	灯火具	区画	SD205					筒部外面はヘラケズリ、底部内面はスス付胎
11	染付磁器(昭前)	皿	区画	SD005	(13.4)	3.3	8.1		裏付のみ露胎、更約と類似
12	施釉陶器(昭前)	碗	I	SK001			4.9		裏付のみ露胎、くらわんか手
13	施釉陶器(京焼系)	碗	I	SK001			5.05		底部外面は露胎、底部外面中央に「清水」の刻印
14	土師器	壺蓋	I	SK001	(24.2)				口縁部はヨコナデ、底部外面下端に穿孔あり
15	瓦	軒平瓦	I	SK001				厚1.6 瓦当厚3.5	瓦面は縱方向ミガキ、裏面～平瓦部凸面は横方向ナデ、平瓦部凸面は縱方向ナデ
16	施釉陶器(昭前)	碗	I	SK007	8.7	6.1	4.0		裏付のみ露胎、眉毛目文
17	施釉陶器(丹波)	鉢	I	SK007	(19.1)	4.25	(13.7)		内外面とも回転ナデ、底部外面は不調整・指頭圧痕あり
18	土師器	壺蓋	I	SK007	(29.4)				口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、底部外面は軽く板ナデ、底部内面はナデ
19	施釉陶器(丹波)	擂鉢	I	SK023					内外面とも回転ナデ、擇目は6本の櫛目
20	染付磁器	皿	I	SK006	13.85	3.5	7.9		裏付は露胎
21	染付磁器	碗	I	SK006			4.1		裏付は露胎
22	施釉陶器	皿	I	SK006	7.7	3.25			外面は施釉
23	土師器	壺蓋	I	SK006	11.6		10.5		内外面とも回転ナデ、底部外面は回転糸切り後ナデ
24	瓦	軒棟瓦	I	SK006				厚1.6 瓦当厚3.5	筋凸面とも横方向ナデ
25	瓦	丸瓦	I	SK006	長23.35 幅12.15		厚1.3		玉縁部外側～丸瓦部狭窄部は回転ナデ、丸瓦部広幅部外側は横方向ナデ、丸瓦部は横方向ナデ後縫方向ミガキ、内面はゴザ模様
26	染付磁器	碗	I	SK013-014	9.5	5.6	3.8		裏付のみ露胎、印判手
27	染付磁器	碗	I	SK013-014			4		裏付のみ露胎、印判手
28	染付磁器	瓶	I	SK013-014			4.4	腹径8.4	裏付のみ露胎
29	白磁	小杯	I	SK013-014	6.6	4.7	3.4		裏付のみ露胎
30	施釉陶器(昭前)	碗	I	SK013-014			3.4		内外面とも刷毛目文
31	施釉陶器	擂鉢	I	SK014	29.5				内外面とも回転ナデ、擇目は13本の櫛目
32	施釉陶器(丹波)	擂鉢	I	SK013-014	(29.6)				内外面とも回転ナデ、擇目は8本の櫛目
33	施釉陶器(丹波)	擂鉢	I	SK013-014					体部外面は回転ナデ、底部外面は不調整、擇目は8本の櫛目
34	施釉陶器	壺	I	SK013-014			7.5		外面全面施釉、網胎
35	土師器	壺蓋	I	SK013-014	(26.5)				口縁部はヨコナデ、底部外面は離砂付着、底部内面はナデ
36	土師器	火消壺	I	SK013-014	28.6				内外面とも回転ナデ
37	土師器	皿	I	SK013-014	11.5	1.8	5.7		内面～体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り
38	土師器	皿	I	SK013-014	10.2	1.8	5.2		内面～体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り、外面に複付蓋
39	土師器	皿	I	SK013-014	6.75	1.35	5.5		底部内面はナデ、口縁部はヨコナデ、底部外面はナデ
40	瓦質土器	香炉	I	SK013-014	9.7	6.75	9.5		底部内面～体部内面は粗いナデ、口縁部はヨコナデ、体部外面は縫合方向ミガキ、底部外面はナデ
41	瓦質土器	灯火具	I	SK013-014			17.3		外側は板ナデ、内面はヨコナデ
42	無釉陶器	擂鉢	I	SK010	20.7	8.6	9.8		口縁部は回転ナデ、体部外面は回転ヘラケズリ、底部外面は不調製・離砂压痕あり、擇目は11本の櫛目
43	無釉陶器	擂鉢	I	SK010	(34.0)				口縁部は回転ナデ、体部外面は回転ヘラケズリ、擇目は12本の櫛目
44	染付磁器(昭前系)	碗	I	SK010	10.8	8.0	5.25		裏付のみ露胎
45	染付磁器(昭前系)	皿	I	SK010	11.2	3.1	6.0		裏付のみ露胎
46	染付磁器(昭前系)	小皿	I	SK010	6.2	2.25	3.0		裏付のみ露胎
47	施釉陶器(昭前)	碗	I	SK010					内外面とも刷毛目文
48	施釉陶器(京焼系?)	碗	I	SK010	9.65	6.3	5.3		裏付のみ露胎
49	施釉陶器(昭前)	皿or鉢	I	SK010					内面～口縁部外面は施釉(自)、緑胎・褐胎で施文
50	施釉陶器(京焼系)	碗	I	SK010	10.8	5.55	4.0		底部外面は露胎、白泥の上に鉄絵の格子文、朱・緑の色絵、見込みに白板あり
51	土師器	壺蓋	I	SK010	29.7	7.4			口縁部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリ、底部内面はコケが付着
52	土師器	壺蓋	I	SK010	30.9				口縁部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリ、底部内面はコケが付着
53	土師器	壺蓋	I	SK010	29.45	7.4			口縁部はヨコナデ、底部外面は離砂付着、底部内面はナデ
54	土師器	壺蓋	I	SK010	27.9	7.0			口縁部はヨコナデ、底部外面は離砂付着、底部内面はナデ
55	土師器	皿	I	SK010	7.25	1.4	4.4		製作り、内面はナデ・施釉(黄・緑)。高台内にスタンプ「源」
56	土師器	皿	I	SK010	10.45	1.95	5.8		内面～体部外面は回転ナデ、底部外面は回転糸切り

第7表 遺物一覧表(2)

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径	蓋高	底径	その他の法量	調査名および備考
57	土師器	皿	I	SK010	10.1	1.8	5.8		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
58	土師器	皿	I	SK010	7.9	1.45	4.8		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
59	土師器	皿	I	SK010	7.4	1.35	4.45		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
60	瓦	軒丸瓦	I	SK010				厚1.65	丸瓦部凸面はタテナデ、丸瓦部凹面はコビキB底。内タタキ底
61	瓦	丸瓦	I	SK010		幅12.15	厚1.45		筒體外面は縱方向ミガキ、筒壁内面はコビキB底、省目わざか、玉縁蓋外側は回転ナデ
62	土師器	焼鉢	I	SK003	26.5				口縁部はヨコナデ、底盤外面は粗妙竹刷、底部内面はナデ
63	瓦	新平瓦	I	SK003				厚1.45	瓦当厚3.9
64	施釉陶器	蓋	I	SK005	(14.7)				外面に「宮」
65	土師器	小皿	I	SK005			4.0		内面～体部外側は回転ナデ、底盤外側は回転余切り、内面は特徴、見込みに刻印「合」
66	土師器	焼鉢	I	SK005	26.5				口縁部はヨコナデ、底盤外面は粗妙竹刷、底部内面はナデ
67	土師器	小皿	I	SK012	(9.4)	1.45			口縁部内面はヨコナデ、その他は摩滅、口縁部にスス付着
68	土師器	焼鉢	I	SK012	(25.6)				口縁部はヨコナデ、底盤外側はナデ
69	青磁	水槽	I	SK016	8.75	11.55	7.5		底盤外側は鏡胎、体部外側に桜木文あり
70	土師器	灯明台	I	SK017	6.2				外面は回転ナデ、特徴
71	土師器	焼鉢	I	SK017	(31.7)				口縁部はヨコナデ、底盤外側は軽く板ナデ、底盤内面はナデ
72	乗付磁器(深煎)	瓶	I	SK018	10.9	7.7	5.0		蓋付は霧胎、くらわんか手
73	乗付磁器(瀬戸?)	瓶	I	SK018	(9.45)	5.6	(3.75)		蓋付のみ霧胎
74	土製品	龜	I	SK018	長5.7	幅4.1	高2.3		製作り、頭部に穿孔あり、・キラコ付着
75	乗付磁器(深煎)	瓶	I	SK216	(6.5)				
76	乗付磁器	蓋	I	SK040	11.4	3.25		つまみ径4.6	つまみ端部のみ露胎
77	土師器	鉢	I	SK040	4.3	1.8	3.4		上面のみ施釉(黄釉)
78	青磁	瓶	I	SK044			5.55		蓋内には霧胎、見込みにスタンプ文
79	乗付磁器	瓶	I	SK026	10.7	4.75	4.1		蓋付は霧胎
80	白磁	小杯	I	SK026	6.7	3.7	2.3		蓋付～高台内には霧胎
81	乗付磁器(深煎)	皿	I	SK026	(14.2)	3.4	(4.1)		体部外面下位～底盤外側は霧胎、釉は白濁、波紋見
82	施釉陶器(瀬戸・美濃)	天日	I	SK026	8.0	4.0	3.8		体部外側下位～底盤外側は霧胎
83	施釉陶器(瀬戸・美濃)	天日	I	SK026	7.6	3.8	4.2		体部外側下位～底盤外側は霧胎
84	乗付磁器	瓶	I	SE005			(3.7)		全面施釉、押印文
85	無釉陶器(丹波)	焼鉢	I	SE005			8.1		内外面とも回転ナデ、標目は5本の梅目
86	無釉陶器(丹波)	焼鉢	I	SE005					内外面とも回転ナデ、標目は5本の梅目
87	無釉陶器	瓶	I	SE005	44.3				内外面とも回転ナデ
88	無釉陶器(丹波)	焼鉢	I	SK007	(32.0)				内外面とも回転ナデ、標目は7本の梅目、大平F類
89	施釉陶器(丹波)	壺	I	SK234	8.05	8.5	8.2		底盤外側は霧胎、見込みに4ヶ所の目痕、底盤外側に砂目、標目は12本の梅目
90	施釉陶器	壺鉢	I	SK234	23.9	9.2	13.3		内面～高台外側は霧胎、見込みに4ヶ所の目痕、底盤外側に砂目、標目は12本の梅目
91	施釉陶器(舞子)	横丸形皿	I	SK234	長16.6	幅15.7	高3.7		壓押しし、表面はヘラケズリ、裏面一面底部外側は施釉(灰釉)、裏面に「まいこ」刻印あり
92	土師器	円平鉢	I	SK234	13.4	6.4	5.0		内面は回転ナデ、外側は回転ヘラケズリ、把手は壓押しし、受部内面・体部外側下半～底盤外側は霧胎、釉は黄釉
93	乗付磁器	皿	II	SK030	12.9	3.2	7.4		蓋付のみ露胎
94	乗付磁器(深煎)	瓶	II	SK037	11.1	6.1	4.7		蓋付は霧胎、くらわんか手
95	乗付磁器(深煎)	瓶	II	SK037	10.1	5.5	3.95		蓋付は霧胎、花文はコンニャク脚利
96	乗付磁器(深煎)	瓶	II	SK037	7.35	6.0	3.8		蓋付は霧胎、高脚
97	乗付磁器	瓶	II	SK037	15.6	8.5	8.6		S.K.2.9と接合、粒の目四形臺台
98	乗付磁器(深煎)	德利	II	SK037	3.3				口縁部内面～外側は霧胎
99	白磁	猪口	II	SK037	8.5	6.5	5.4		蓋付のみ露胎
100	乗付磁器(瀬戸)	瓶	II	SK037	13.0	6.5	4.9		蓋付は霧胎
101	無釉陶器	壺鉢	II	SK037	(20.0)	8.6	9.6		口縁部は回転ナデ、体部外側は回転ヘラケズリ、底盤外側は不調整、標目は11本の梅目
102	施釉陶器(丹波)	德利	II	SK037	2.1			厚度8.7	内外面とも回転ナデ、体部上位はカキ目
103	施釉陶器(京・信楽系)	灯明皿	II	SK037	10.8	2.4	4.1		内面～口縁部外側は施釉
104	施釉陶器(京・信楽系)	瓶	II	SK037	8.6	6.8	3.7		蓋合は霧0
105	土師器	小皿	II	SK037	8.3	1.6	4.4		外側は摩滅、底盤は回転余切り
106	土師器	焼鉢	II	SK037	長9.4	幅7.85			製作り
107	瓦	軒丸瓦	II	SK037	表25.0	幅12.4	厚1.3	瓦当厚3.6	S.K.2.9と接合、丸瓦部凹面はコビキB、瓦当面に磨砂
108	瓦	新桟瓦	II	SK037				厚1.5	瓦当厚4.05
109	瓦	軒模瓦	II	SK037				厚1.65	瓦当厚3.6
110	瓦	新桟瓦	II	SK029		幅25.9	厚1.8	瓦当厚3.4	半瓦部は凸凹面ともタテ方向ナデ、凸面に磨砂
111	瓦	新桟瓦	II	SK029				厚1.5	瓦当厚3.7
112	土師器	灯明台	II	SK029	7.0	1.25	3.7		内面～体部外側は回転ナデ、底盤外側は静止余切り
113	乗付磁器	蓋	II	SD012	10.2	6.45	4.7		蓋付のみ露胎、妙目
114	土師器	小皿	II	SK036	9.6	1.9	5.7		
115	無釉陶器	甕	II	SK036	26.3	33.8	17.1		内面は磨滅、口縁部外側～体部外側は鉄泥塗布後保形渡し掛け
116	施釉陶器(瀬戸美濃)	水槽	II	SK036					釉は透明、綾、黄
117	乗付磁器(深煎)	鉢	II	SK034	20.8	7.7	9.9		「長春翁江」

第8表 遺物一覧表(3)

報告番号	器種	器形	地区	通情名	口径	高さ	底径	その他の法量	調査および備考
118	土器	筒	II	SK034	(34.8)				口縁部内面～体部外面はヨコナデ、底部外側は軽く棱ナデ、底部内面はナデ
119	無釉陶器(丹波)	擂鉢	II	SK035	(24.4)				内外面とも回転ナデ、縁目は8条以上の織目
120	染付磁器(瀬戸)	碗	II	SK041	7.7				
121	染付磁器(瀬戸)	碗	II	SK054	11.4	8.0	4.8		墨付のみ露胎、くらわんか手
122	染付磁器(瀬戸)	蓋	II	SK059	9.7	2.7			つまみ露胎のみ露胎
123	白磁(瀬戸)	小杯	II	SK059	6.95	5.65	3.3		墨付のみ露胎
124	白磁(瀬戸)	紅葉	II	SK059	4.6	1.5	1.15		外面は露胎
125	施釉陶器(瀬戸美濃)	小豆(ひだ豆)	II	SK059	7.6	2.2	3.1		墨付のみ露胎、釉は灰釉、19C前半
126	施釉陶器	帶輪蓋	II	SK059	12.1	2.35			縁底部内面は露胎
127	施釉陶器	帶輪	II	SK059	14.0	13.5	6.85		受部内面・体部外側下位～底部外側は露胎、釉は粗粒
128	土器	壺	II	SK059			9.65		全面施釉、柄部に刻印「キフ矢萬丁万久々市名工門」、底部内面に刻印「本元」
129	染付磁器(瀬戸)	紅葉口	II	SK065			2.8		墨付のみ露胎、文様は梵文
130	無釉陶器(丹波)	擂鉢	II	SK119					縁目は7本以上の織目、大平E類
131	染付磁器(瀬戸)	紅葉	II	SK120			1.3		体部外側下位～底部外側は露胎
132	施釉陶器	平行鍋	II	SK080	16.5	10.5	7.1		体部下半～底部外側、受部内面は露胎、釉は灰釉
133	無釉陶器	壺	II	SK083	8.7	11.05	7.5		内部～口縁部外側は露胎、釉は褐色
134	施釉陶器	蓋	II	SK083	9.15	2.25			縁底部～頂部内面は露胎、釉は褐色
135	土器	豆	II	SK107	10.0	3.3	6.1		内面～体部外側は露胎ナデ、底部外側は回転糸切り
136	色絵磁器	小杯	II	SK223	6.0	2.8	2.7		墨付のみ露胎、文様は金・赤・緑・青・黒
137	ガラス	紅皿	IV	SE006	2.65	1.5	1.8		製作り？
138	瓦	丸瓦	IV	SE006	長21.35	幅11.6	厚1.25		白面はタテミガキ、芯面は内タキ底
139	瓦	井戸衝	IV	SE006			厚3.05		芯面にキズミ、芯面はヨコナデ、表面はタテナダ
140	瓦	軒平瓦	IV	SK109			厚1.8	瓦当厚3.4	平瓦部凹面は横方向ナデ、平瓦部凸面は縱方向ナデ、瓦当面は摩粉付着
141	自然遺物	貝	IV	SK109					
142	染付磁器	碗	IV	SK073	7.0	6.15	4.0		墨付のみ露胎
143	施釉陶器(肥前)	碗	IV	SK070	11.1	6.85	4.2		体部外側下位～底部外側は露胎、釉は長石分の多い灰釉、肥前I～II期
144	施釉陶器(肥前)	皿	IV	SK070	13.6	4.3	4.75		高台下位のみ露胎、釉は灰釉、肥前II期
145	施釉陶器(肥前)	皿	IV	SK070	13.1	3.2	3.95		体部外側下位～底部外側は露胎、釉は長石分の多い灰釉、又文様は斜稜、肥前II期
146	施釉陶器(肥前)	皿	IV	SK070			4.2		体部外側下位～底部外側は露胎、釉は割銀釉、文様は斜稜
147	無釉陶器(丹波)	擂鉢	IV	SK070	34.2	14.1	14.4		口縁部は回転ナデ、体部外側はナデ・指彫痕、底部外側下端はハラケズリ、底部外側は不調製、縁目は5本の織目
148	無釉陶器(丹波)	擂鉢	IV	SK070	(38.25)				口縁部は回転ナデ、体部外側はナデ・指彫痕、縁目は5本の織目
149	無釉陶器(丹波)	擂鉢	IV	SK070					口縁部内面～体部外側上位は回転ナデ、体部外側中位はナデ、縁目は4本の織目
150	土器	網	IV	SK070	24.3	8.25			体部内面～口縁部外側はヨコナデ、体部外側は平行タタキ、底部内面はナデ、底部外側は板ナデ
151	土器	皿	IV	SK070	(10.4)	1.9			底部内面はナデ、体部内面はヨコナデ、口縁部内面はナデ、口縁部外側はヨコナデ、外面はナデ、製作りか?
152	土器	皿	IV	SK070	6.4	1.8			内面～口縁部外側はヨコナデ、底部外側はナデ
153	土器	皿	IV	SK070	7.0	1.8			内面～口縁部外側はヨコナデ、体部外側～底部外側はナデ
154	土器	皿	IV	SK070	6.4	1.5			内面～口縁部外側はヨコナデ、体部外側～底部外側はナデ
155	土器	皿	IV	SK070	11.7	2.4	6.9		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り、板状圧痕あり、井上C1型
156	土器	皿	IV	SK070	8.2	2.4	6.4		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
157	土器	皿	IV	SK070	8.2	3.0	5.5		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
158	土器	皿	IV	SK070	8.3	2.7	5.0		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
159	土器	皿	IV	SK070	8.8	3.0	5.3		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
160	土器	皿	IV	SK070	8.6	3.1	5.15		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
161	土器	皿	IV	SK070	8.1	2.8	5.2		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
162	土器	皿	IV	SK070	8.3	2.5	5.8		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
163	土器	皿	IV	SK070	8.4	3.0	5.6		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
164	土器	皿	IV	SK070	8.2	2.9	5.4		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
165	土器	皿	IV	SK070	8.6	3.2	5.5		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
166	土器	皿	IV	SK070	8.4	3.0	5.0		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
167	土器	皿	IV	SK070	8.0	2.9	5.9		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側に仕上げナデ、底部外側は回転糸切り
168	土器	皿	IV	SK070	8.6	3.25	5.1		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側に仕上げナデ、底部外側は回転糸切り
169	土器	皿	IV	SK070	8.1	3.0	5.4		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
170	土器	皿	IV	SK070	8.1	3.1	5.9		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
171	土器	皿	IV	SK070	8.2	3.2	5.6		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
172	土器	皿	IV	SK070	8.2	2.8	5.4		内面～体部外側は回転ナデ、体部外側に仕上げナデ、底部外側は回転糸切り
173	土器	皿	IV	SK070	9.0	2.9	5.3		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
174	土器	皿	IV	SK070	8.4	3.2	5.3		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
175	土器	皿	IV	SK070	8.6	2.9	4.9		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り
176	土器	皿	IV	SK070	8.5	3.2	5.9		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転糸切り

第9表 遺物一覧表(4)

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径	器高	底径	その他の測量	解説および備考
177	土師器	三足付鉢	N	SK070	13.6	5.7	7.2		内面～体部外側中位は回転ナデ、体部外側下位は手持ちヘラケズリ、底部外側は回転余切り
178	瓦	丸瓦	N	SK070	長27.5	幅12.6	厚1.15		丸瓦部凸面は竪方向のナデ、丸瓦部凹面はコビキ日焼・右目不鮮明
179	土師器	皿	N	SK090	7.9	2.8	5.1		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
180	土師器	皿	N	SK090	8.5	3.0	5.5		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
181	土師器	皿	N	SK090	8.5	2.5	4.3		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
182	土師器	皿	N	SK090	11.2	2.0	6.2		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
183	土師器	皿	N	SK090	11.0	2.3	6.2		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り・仕上あり
184	土師器	皿	N	SK090	10.1	2.2	6.2		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り、口縁部にスス付着
185	瓦質土器	火鉢	N	SK090	30.8	13.9	26.6		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
186	染付磁器	碗	N	SK087	10.15	5.2	3.9		蓋付のみ露胎、外側は青磁釉、見込みの印押は実193・194と齊様
187	染付磁器	碗	N	SK087	11.2	5.1	4.2		蓋付のみ露胎
188	染付磁器	皿	N	SK087	13.0	3.35	7.7		蓋付は露胎、鉢は渦巻
189	染付磁器	皿	N	SK087	9.75	3.0		つまみ袋3.8	つまみ袋部のみ露胎
190	染付磁器	仏龕器	N	SK087			3.9		蓋部外側は露胎
191	白磁	皿	N	SK087	(12.0)	3.4	6.2		蓋付のみ露胎
192	青釉陶器(京焼系)	碗	N	SK087	12.15	4.4	4.35		底部外側は露胎、支脚は色絵
193	施釉陶器(京焼系)	碗	N	SK087	12.0	4.75	3.35		底部外側は露胎、又様は色絵
194	施釉陶器(京焼系)	碗	N	SK087	9.2	5.8	5.8		底部外側は露胎、灰釉・鉄絵・青絵・施成後色絵
195	施釉陶器(京焼系)	碗	N	SK087	10.5	6.6	4.3		底部外側は露胎、灰釉・灰斑・鉄絵・青絵・施成後色絵
196	無釉陶器	擂鉢	N	SK087	34.5	14.0	16.6		口縁部は回転ナデ、体部外側はヘラケズリ。底部外側は不調整、縦目は9本の瘤目
197	無釉陶器	擂鉢	N	SK087	33.0	13.2	16.4		口縁部は回転ナデ、体部外側はヘラケズリ、底部外側は不調整、縦目は10本の瘤目
198	無釉陶器(偏前)	水指	N	SK087	13.65	19.3	14.45		内面～口縁部・体部の一部は施釉、体部外側は鉄泥
199	施釉陶器	壺	N	SK087					上面正面・縁延界、下面は露胎
200	施釉陶器	蓋	N	SK087	9.2	1.9			頂部外側は回転ヘラケズリ、縁部は回転ヘラナデ、内面は回転ナデ
201	施釉陶器	蓋	N	SK087	14.25	3.95		つまみ袋2.8	頂部外側は回転ヘラケズリ、縁部は回転ヘラナデ、内面は回転ナデ
202	施釉陶器	土瓶	N	SK087	9.7	12.55	8.75	腹径18.2	口縁部～体部外側下位は施釉(鉄釉)
203	施釉陶器	皿	N	SK087	10.7	1.9	3.1		内面～口縁部・体部の一部は施釉、体部外側は鉄泥
204	施釉陶器	皿	N	SK087	10.65	1.95	3.85		内面～口縁部外側は回転ナデ、体部外側は焼成後回転ヘラケズリ。底部外側は余切り、口縁部にスス付着
205	施釉陶器	衆器	N	SK087	5.25	6.55	4.6		底部外側は回転余切り・穿孔あり、内面～体部上位は施釉(黒釉)
206	土師器	皿	N	SK087	11.0	1.85	5.5		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り、口縁部はスス付着
207	土師器	皿	N	SK087	7.6	1.5	4.5		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り、口縁部はスス付着
208	土師器	三足付鉢	N	SK087	16.4	4.5	9.7		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
209	土師器	鉢	N	SK087	10.2	16.05	9.7		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
210	土師器	皿	N	SK087	施7.9	横10.5	厚0.9		表面とつまみ上部は施釉(黄釉)、裏面はヘラケズリ施ナデ、裏面はヘラケズリ
211	瓦	新丸瓦	N	SK087				瓦当径13.65	丸瓦部凸面はタテナデ、丸瓦部凹面はゴザ状(モ7)、瓦当面に刪跡付着
212	染付磁器	碗	N	SD007	8.05	6.15	3.95		蓋付のみ露胎
213	土師器	皿	N	SD007	8.5	1.75	4.1		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
214	土師器	皿	N	SD007	8.1	1.3	3.75		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は西脇余切り
215	青磁	香炉	N	SK241			4.5		蓋付～高台内、底部内面は露胎
216	無釉陶器	擂鉢	N	SK241					内面とも露胎ナデ、縦目は8本の瘤目
217	土師器	皿	N	SK241	13.3	2.6	7.9		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
218	土師器	小皿	N	SK244	8.4	2.65	4.95		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転余切り
219	染付磁器	碗	N	SK091	11.0	6.05	4.05		蓋付のみ露胎、実114とセット
220	染付磁器	碗	N	SK091			4.4		蓋付のみ露胎
221	染付磁器	碗	N	SK091	9.8				蓋付より内面は露胎、底部内面に目底あり
222	施釉陶器(美濃)	水漬	N	SK091					内面～口縁部外側は施釉(桂釉)、底部外側は回転余切り
223	土師器	皿	N	SK091	9.9	2.3	6.0		内面～口縁部外側は施釉(桂釉)、底部外側は回転余切り
224	土師器	皿	N	SK091	6.1	1.2	2.4		内面～口縁部外側は施釉(桂釉)、底部外側は板ナデ
225	土師器	炮烙	N	SK091	(29.2)				口縁部内外側はヨコナデ、底部外側は板ナデ
226	瓦	新丸瓦	N	SK091		幅12.6	厚1.15	瓦当径13.9	丸瓦部凸面は竪方向のミガキ、丸瓦部凹面は不調整・内タキ溝あり
227	ガラス	ワインボトル	N	SK091			11.0		蓋付は露胎
228	染付磁器	碗	N	SK221	8.6	5.85	3.2		蓋付は露胎
229	染付磁器	碗	N	SK221	8.3	4.7	3.6		蓋付は露胎
230	染付磁器	碗	N	SK221	(10.7)	7.0	(4.7)		蓋付は露胎
231	染付磁器	碗	N	SK221	11.25	6.0	4.55		蓋付は露胎
232	染付磁器	碗	N	SK221	9.5	4.5	3.3		蓋付は露胎
233	染付磁器	皿	N	SK221	12.2	3.5	7.0		蓋付は露胎
234	染付磁器	皿	N	SK221	13.6	3.5	8.3		底部外側は蛇の目模様
235	染付磁器	皿	N	SK221	10.9	2.1	5.4		蓋付は露胎、柄付子

第10表 遺物一覧表（5）

報告番号	器種	器形	地区	遺構名	口径	器高	底径	その他の法量	調査者による備考
236	染付磁器	碗	W	SK 2.2.1	6.0	3.0	2.7		墨付は露胎
237	染付磁器	香炉	W	SK 2.2.1	(6.0)	5.65	(5.1)		内面・蓋付は露胎
238	染付磁器	灯明具	W	SK 2.2.1	4.5	11.06	4.7		底盤外面・体部内面・底盤内面は露胎
239	染付磁器	蓋	W	SK 2.2.1	9.4	2.45		つまみ径3.7	つまみ頂部のみ露胎、銅板手
240	色絵磁器	蓋	W	SK 2.2.1	6.0	1.8		つまみ頂部のみ露胎、赤絵	つまみ頂部のみ露胎、赤絵
241	磁器（三田）	碗	W	SK 2.2.1	13.4	5.9	5.9		型作り、高台は貼り付け。蓋付は露胎
242	施釉陶器	擂鉢	W	SK 2.2.1	28.1	10.9	14.6		口縁部外面は凹軸ナデ、体部外面はヘラケズリ、底部外面は不調整、板状圧痕あり。擂日は10本の櫛目
243	施釉陶器（丹波）	擂鉢	W	SK 2.2.1	3.4	25.8	8.2	底径14.9	内面は灰胎、口縁部外面～底部外面外周部は施釉、底盤外面はナデ
244	施釉陶器（瀬戸）	壺	W	SK 2.2.1	16.0	18.2	13.05		底部外面はヘラケズリ、口縁部縫跡～口縁部内面～底盤外面は露胎、堆は灰胎、文様は露胎
245	施釉陶器	蓋	W	SK 2.2.1	10.2	3.6		つまみ径3.65	つまみ～縁部外面は施釉（南緞）、頂部外面～縁部外面はトピカンナ
246	施釉陶器	壺（土瓶？）	W	SK 2.2.1	11.0	13.0	9.0	底径9.0	体部外面下半～底盤外面はヘラケズリ、体部外面上半はトピカンナ、口縁部内面～体部上半は施釉（美緞）、体部外面下部に接合痕
247	施釉陶器（舞子）	碗	W	SK 2.2.1	9.7	8.05	5.3		高台外面～底盤外面は露胎。模は葉状模、底部外面に「まいこ」割印あり
248	施釉陶器	碗	W	SK 2.2.1	8.7	5.5	3.5		高台外面～底盤外面は露胎。模は模様、文様ははくさいよう
249	施釉陶器	碗	W	SK 2.2.1	8.6	5.4	3.9		蓋付のみ露胎、模は模様、「秀」字は白釉
250	白磁	小碗	W	SK 2.2.1	8.0	5.2	3.6		蓋付は露胎
251	施釉陶器	豆	W	SK 2.2.1	11.2	3.1	4.1		蓋付は露胎、模には買入がある
252	施釉陶器	胸	W	SK 2.2.1				厚3.5	外輪・側面は施釉（綾緞）、正面は妙目
253	施釉陶器	壺	W	SK 2.2.1	8.3	12.7	6.7		口縁部外面～体部外面は白泥模、口縁部内面は灰胎
254	施釉陶器	小豆	W	SK 2.2.1			4.2		底部外面は回転糸切り、内面は特雅、見込みに割印「上」あり
255	土師器	焼鉢	W	SK 2.2.1	31.0				口縁部はヨコナデ、底部外面は板ナデ、難妙付蓋、底盤内面はナデ
256	施釉陶器	焼鉢	W	SK 2.2.1					内面はナデ、体部外面は施釉（地模）、底部外面は回転糸切り、蓋部外面に割印
257	土師器	おろし皿	W	SK 2.2.1	長15.25	幅9.2	高2.0		型作り、底面に市日
258	土師器	周炉	W	SK 2.2.1	24.2	25.6	26.5		内面はナデ、体部外面はケズリのちナデ、底盤外面は難妙付蓋
259	施釉陶器	甕	I	SK 0.1.5	31.2	37.8	18.5		内面は灰胎、口縁部外面～体部外面は鉄泥模塗布後褐釉、黒地洗、掛け、底部外面は露胎、不調整、底部は焼花透窓孔
260	施釉陶器（丹波）	擂鉢	I	SK 0.1.5					内外面とも回転ナデ、擂日は9本の櫛目、太平の類
261	白磁	水滴（大形）	I	SK 0.1.5					堅つくり、色板（赤）あり
262	ガラス	瓶	I	SK 0.1.5	1.0	5.7	1.0		試験管
263	施釉陶器	鉢	II	SK 1.2.3	54.5	31.0	29.0		体部外面～口縁部缺面はハケにより路模（複利）、口縁部～一部外面は回転ナデ、底部外面は不調整、底部は底盤内面に5ヶ所の砂目
264	ガラス	瓶	I	SK 0.6.1	2.1	20.2	7.6		
265	ガラス	瓶	I	SK 0.6.1	2.2	18.5	6.0		
266	ガラス	瓶	I	SK 0.6.1	2.35	15.9	5.7		
267	ガラス	瓶	I	SK 0.6.1	2.9	15.7	6.1		
268	施釉陶器	蓋	I	SK 0.6.1	6.5	2.75			かえり外面のみ露胎
269	瓦	不明	I	SK 0.6.1	長8.15	幅5.4	高4.3		
270	瓦	不明	I	SK 0.6.1	長7.6	幅5.2	高3.5		
271	瓦	井戸側	I	SE 0.0.1	長23.5	幅23.2	厚3.15		凸面にキザミ目
272	瓦	井戸側	I	SE 0.0.1	長23.05	幅23.25	厚3.6		凸面にキザミ目
273	染付磁器	碗	I	SE 0.0.1	7.1	4.5	3.1		蓋付は露胎
274	ガラス漆		I	SE 0.0.1					始状漆
275	瓦	井戸側	III	SE 0.0.3	長22.7	幅22.3	厚3.2		凸面にキザミ目
276	瓦	井戸側	III	SE 0.0.3	長22.6	幅22.2	厚3.3		凸面にキザミ目
277	染付磁器	猪口	III	SE 0.0.3	5.1	3.0	1.8		蓋付のみ露胎
278	施釉陶器	便器	III	SE 0.0.3					トレードマークあり
279	ガラス	瓶	III	SE 0.0.3	6.0	5.9	6.8		
280	瓦	井戸側	W	SE 0.0.4	長23.7	幅23.75	厚3.0		凸面にキザミ目
281	瓦	井戸側	W	SE 0.0.4	長23.85	幅23.9	厚3.9		凸面にキザミ目
282	青磁	豆	W	SE 0.0.4		2.8			高台外面～蓋付は露胎、高台内は白釉
283	土師器	鍋	W	SE 0.0.4			9.0		高台外面～蓋付は露胎、高台内は白釉
284	瓦	井戸側	III	SE 0.0.2	長27.0	幅24.6	厚3.2		凸面にキザミ目、側面に穿孔
285	瓦	井戸側	III	SE 0.0.2	長27.3	幅24.9	厚3.3		凸面にキザミ目、側面に穿孔
286	瓦	井戸側	W	SE 2.0.1	長23.75	幅23.9	厚2.8		凸面にキザミ目
287	瓦	井戸側	W	SE 2.0.1	長23.6	幅23.6	厚3.0		凸面にキザミ目
288	銅製品	対水道質							
289	銅製品	鉢							
290	銅製品	煙管							
291	瓦	軒平瓦		包含層					駆面～瓦当裏面は横方向ナデ

## 第4章 まとめ

### 第1節 遺物について

全体の遺物の出土量はほぼ1つの屋敷地を丸ごと調査した割には281入りコンテナにして51箱とさほど多いものではない。また、出土遺物の時期的様相についてもこれまでに示された状況とそれほど変わるものでもない<sup>(1)</sup>。したがって、ここでは以下に稻原氏の提示した時期区分に従いその概要を述べるにとどめる。

I期（1617～1650年代） SK070・090でまとまった資料が出土している。その他、区画溝SD203・205からも若干の遺物が出土している。陶磁器では肥前II期の陶器碗・皿（143～146）、大平A類の丹波陶器擂鉢（147～149）が出土している。土師器は皿が大量に出土している。回転糸切りで小碗形のもの（156～176）が大半を占め、回転糸切りで杯形のもの（155）や手づくね成形のもの（151～154）がごく少量ある。焰烙（150）は外面にタタキを残すタイプのものである。瓦質土器には火鉢（185・3）、灯火具（10）などがある。

II期（1650～1690年代） まとまった資料は存在せず、この時期に特定できる遺物も非常に少ない。わずかに大平D1・D2類の丹波陶器擂鉢（86・260）の破片を挙げることができるのみである。

III期（1690～1750年代） SK010やそれに切られるSK013・014でまとまった資料が出土している。陶磁器では肥前IV期前半の陶器碗（48）、磁器碗（44）・皿、京信楽せんじ碗（50）、明石陶器擂鉢（43）などが出土している。また他の遺構では刷毛目文の肥前陶器碗（16）や大平F類の丹波陶器擂鉢（32）も出土している。土師器は口径10cm程度のもの（56・57）と8cm程度のもの（58・59）が出土している。焰烙（51～54）は底部型つくりと考えられるもので、口縁部のヨコナデが体部中位よりやや下にまで及んでいる。

IV期（1750～1800年代） SK087で比較的まとまった資料が出土している。陶磁器では肥前IV期後半の染付磁器碗（186・187）や187とセットになる染付磁器蓋（189）・口縁部型打ちの白磁皿（191）などが出土している。その他、色絵の京信楽陶器碗（192～195）、無釉陶器皿（203・204）などが特徴的である。擂鉢は明石陶器擂鉢（196・197）が主体を占めるが、大平H類の丹波陶器擂鉢（88・119）も散見される。土師器皿は器壁が薄く回転速度の速いもので、柿釉の施されたものは出土していない。焜炉の蓋と思われるもの（210）には柿釉の施されたものがある。

V期（1800～1880年代） SK091などで出土しているが、良好な資料はほとんどない。また、明治以降に埋没した遺構（SK221）から出土した遺物のなかにこの時期のものが含まれている。肥前磁器はこの時期を代表する広東碗は認められず、V期に属する皿（233・234）などが出土している。瀬戸磁器碗（221・231）が見られるようになる。その他、舞子焼（91・247）や明石周辺で生産されたと考えられる施釉陶器（248・249）などが多く出土し、三田青磁（241）も出土している。擂鉢は明石陶器擂鉢（242）と丹波陶器擂鉢（90）が出土している。土師器皿は柿釉を施されたもので、刻印を有するもの（65・254）も認められる。土師器焰烙（225・255）は以前のものより口縁部のヨコナデがシャープになる。

## 第2節 遺構の変遷

今回の調査は武家屋敷地の西南部の一画（宅地番号19-9 [第5図参照]）に位置する。屋敷地南限（SD203・205、SA201）を確定することができ、東限についてもその可能性のある溝（SD202）を検出することができた。北限と西限についてはわずかに調査区外であるが、ほぼ1つの屋敷地区画の大部分を調査したということができる。また、次節で述べるように各屋敷地の居住者について絵図や記録によって判明するものが多く、今回の調査地についてもある程度その状況を知ることができる。

**0期（1617年以前）** 江戸時代以前の明瞭な遺構は存在しない。調査区西部では中世の遺物を含む洪水砂が認められる。I区南部で検出されたSD013は鋤溝と考えられる。時期は不明であるが、その後の土地利用の状況を考えれば、城下町造営直前のものと考えられる。その頃は畠として利用されていた可能性が高い。また、調査区東部（特にIII区）は遺構が非常に少なく、耕作による土壤化が全体に堆積し、わずかに鋤溝も検出されている。全時期を通じて変化に乏しい。

これらの鋤溝やその後に設けられた屋敷内の区画溝の方位は概ねN15°Wで、後の武家屋敷の区画の方位であるN8°Wよりかなり西へ振っている。この方位は明石城主郭部南辺を直線的に通過していたと推定される古代山陽道とそれを基準にして設けられた条里地割の方位に近いものである。このように江戸時代以前の土地利用の区画が武家屋敷内の土地利用にも強固にその影響を残していることを示している。

**I期（1617～1650年代）** 区画溝SD205は埋土下層からI期の肥前陶器などが出土しており、城下町造営当初から区画が設けられたことを示している。SD205に引き続く区画溝SD203や屋敷地の東西を区画するSD005についてはこの時期に存在したかどうかはわからないが、溝の存否はともかく土地利用の差は存在したものと考えられる。SD005の東側ではSK070・090やSK107などの比較的大型の土坑が検出されている。用途は不明であるがこのような大型の遺構が検出されるのは他の調査地点を含めてこの時期の特徴である。SK019は円形の土坑で、以後この位置に同じ様な土坑が設けられている。井戸（SE005）の掘削時期についてもよく分からぬが、当初から存在していた可能性もある。このように区画や施設などの点で後に続く施設配置が一応整備されたと考えられる。

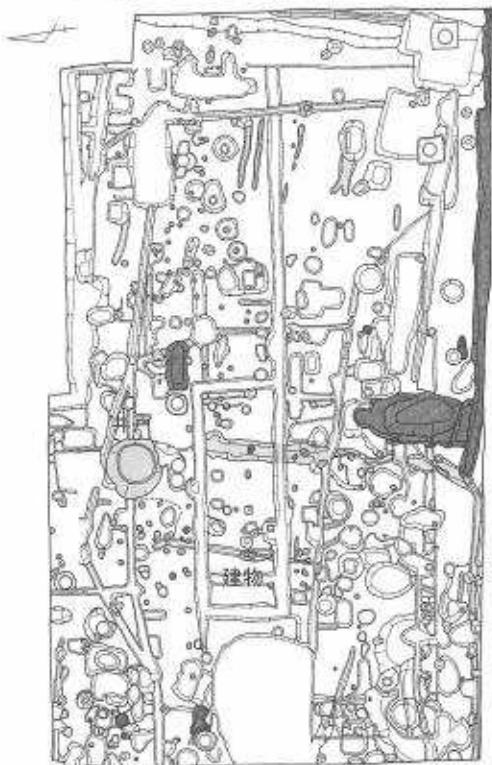
居住者については大久保時代（1639～1649）の絵図である『播州明石城図』では「武藤六太夫」という人物であることがわかる<sup>[2]</sup>。ただし、この人物がどのような人物であったかはよく分からぬ。

**II期（1650～1690年代）** この時期に特定できる遺構はほとんどない。わずかにI区西北部で不整形土坑（SK023）を検出したのみである。III期にこの地区で不整形土坑が頻繁に設けられることの先駆けとなるものである。また、この時期に特定できる遺物は極めて少ないものの、まったく居住が行われなかつたわけではなかろう。

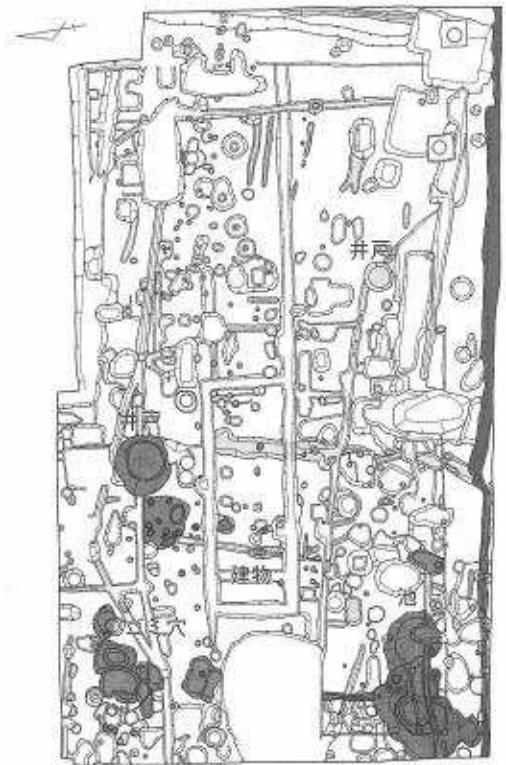
この時期については居住者を記した絵図も存在しない。

**III期（1690～1750年代）** SD203などの区画溝や井戸（SE005）については少なくともこの時期には整っていたと考えられる。I区西北部ではII期のSK023に引き続きSK010、SK013・014などのゴミ穴と考えられる不整形土坑が設けられる。また、円形土坑（SK012）

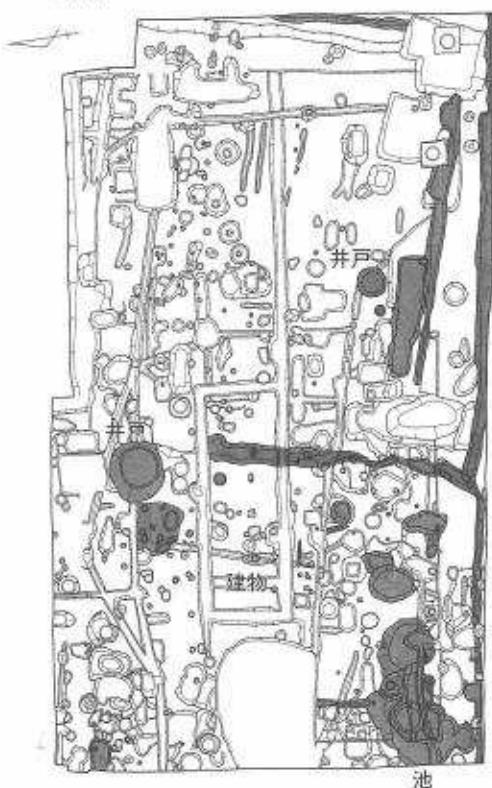
I・II期



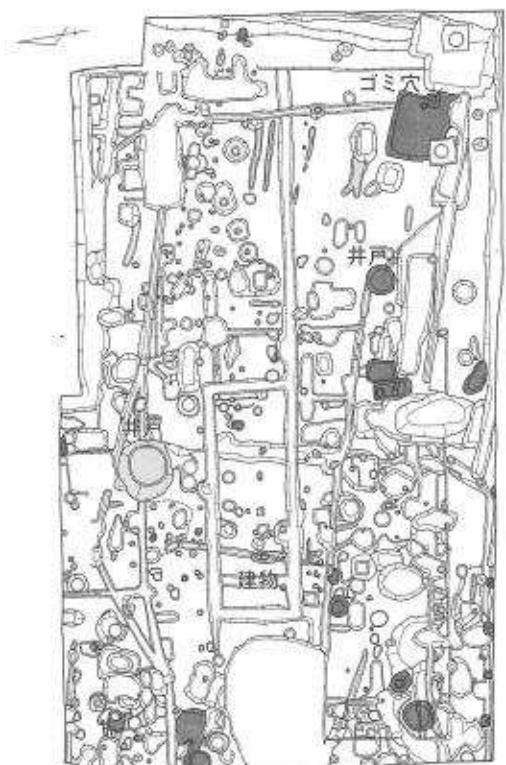
III期



IV期



V期



第4図 遺構変遷図

も引き続き設けられている。この円形土坑は桶状のものが据えられたと考えられ、便槽などの用途を想定できる。Ⅱ区西部では新たに池（SK030・037）が設けられている。敷地東部の利用はほとんど認められない。

このような状況から遺構の多く存在する西部が居住域で、遺構の存在しないⅠ区南部に建物、Ⅰ区西北部にゴミ穴や便所、Ⅰ区東北部に井戸、Ⅱ区西部に池、Ⅱ区東部に庭が配置されていたと考えられ、東部は畠などとして利用されていたと考えられる。

居住者については享保期の絵図である『明石御廊内之図』によると「加藤甚兵衛」という人物で、同じく享保16年（1731）の『御家中知行高並役附』によると役職は「御番組」、禄高は「30俵4人扶持」である。

IV期（1750～1800年代） I区西北部ではゴミ穴と考えられる不整形土坑は見られなくなる。Ⅱ期以降あまり遺構の設けられなかった東部で、長大な長方形土坑（SK087）とそれに附属するSD007が設けられる。また、瓦組井戸と考えられるSE006もこれにあわせて設けられた可能性が考えられる。

この時期については居住者を記した絵図も存在しない。

V期（1800～1880年代） この時期には敷地内の利用状況が大きく変わる。区画溝SD203が柵列SA201に変わる。池（SK030・037）は埋められ、円形土坑（SK029）や壺を据えた土坑（SK036）などが設けられる。SE005についてもこの時期中には埋められた可能性が高い。また、幕末・明治頃には敷地東南隅に大型の廃棄土坑（SK091・221）が設けられている。

この時期の居住者を示した絵図は多く、『明石城侍屋敷絵図』では居住者が「牧野□兵衛」で、禄高は「30俵3人扶持」である。それに統いて『明石家家中之図』、『文久年間明石町之図』では「立田」氏が見られる。立田氏の居住地は享保期には宅地番号20-1、その後『明石城侍屋敷絵図』（禄高80石）に見えて以降宅地番号3-10に移る。その後宅地番号19-9が加わっている状態である。文政13年（1830）の『家中本知行之分』によると立田姓の人物は「立田市太夫」、「立田藤左衛門」の2名が認められる。前者の禄高は80石であり3-10の居住者と考えられ、後者の禄高は「30俵3人扶持」で19-9（今回の調査地）の居住者と考えられる。江戸末期と考えられる『座並帳写』にも立田氏は「立田戸守」、「立田弥五八」の2名が認められ、下位に位置する後者の役職は「御馬廻」である。

VI期（1880年代以降） 登記簿によると昭和24年（1949）に明石市に売却されるまではほぼ幕末までの所有者である立田家（平蔵一萬造一純一）の所有地であった。その後、昭和26年（1951）に明石保健所が建てられ、昭和51年（1976）の本町への移転まで存続した。

この時期の遺構は基本的には調査の対象ではないため全体的な状況はよくわからない。調査を行ったものについては瓦組井戸（SE001～004・201）、埋壺SK026・廃棄土坑SK221などがこの時期にあたる。SK221が明治期である以外は個々の遺構についていづれの時期に属するのかはよくわからない。

### 第3節 武家屋敷の変遷について

明石城については10数点の絵図が知られているが、そのうちには個々の屋敷地の居住者を記したもののが数点存在する。大久保期の『播州明石城図』については既に解説図が作成されている<sup>(3)</sup>。明石城造営以降廃藩置県までの約250年のうち約7割の時期を占める越前松平家の時期（1682～1871）についても複数の絵図が存在し、それぞれを比べると屋敷地の居住者の変遷をある程度知ることができる。さらに、これらの絵図やその他の史料など比較検討することによって、個々の調査地の性格を理解するうえで重要なその居住者の地位などの情報を得ることもある程度可能となる。ここでは、越前松平家の時期の以下の5点の絵図を比較し、武家屋敷地における居住者の変遷状況を示す<sup>(4)</sup>。ただし、今回は比較的解説しやすい姓部分の比較のみを提示する。

①『明石記御席内之図』（大井高志氏蔵）〔第7図〕<sup>(5)</sup>

享保頃（1716～1735）に編纂された『明石記』に収載されたものである。居住者の姓名が記される。記載された人名には、享保16年（1731）の『御家中知行高並役附』所載の人物名と同名のものが認められる。また、『西撰大観』（1911）や『明石郷土史料』（1929）などに収載された『享保年間明石町之図』は姓のみの記載であるが、基本的に記載内容は同一である。『享保年間明石町之図』に転写時の誤りと考えられる箇所が存在する。

②『明石城侍屋敷絵図』（荻野・小笠原氏蔵）〔第8図〕<sup>(6)</sup>

居住者の姓名、禄高が記される。文政13年（1830）の『家中本知行之分』と同名のものが比較的多く認められる。

③『明石町旧全図』（神戸市立図書館蔵）〔第9図〕<sup>(7)</sup>

居住者の姓（一部は名も記す）、宅地寸法が記されるが、ブランクが多い。異筆の追記がある（図表内では“”で表記）。文久3年（1863）の年記を有する。

④『明石家中之図』（平崎旭氏蔵）〔巻首図版5・第10図〕

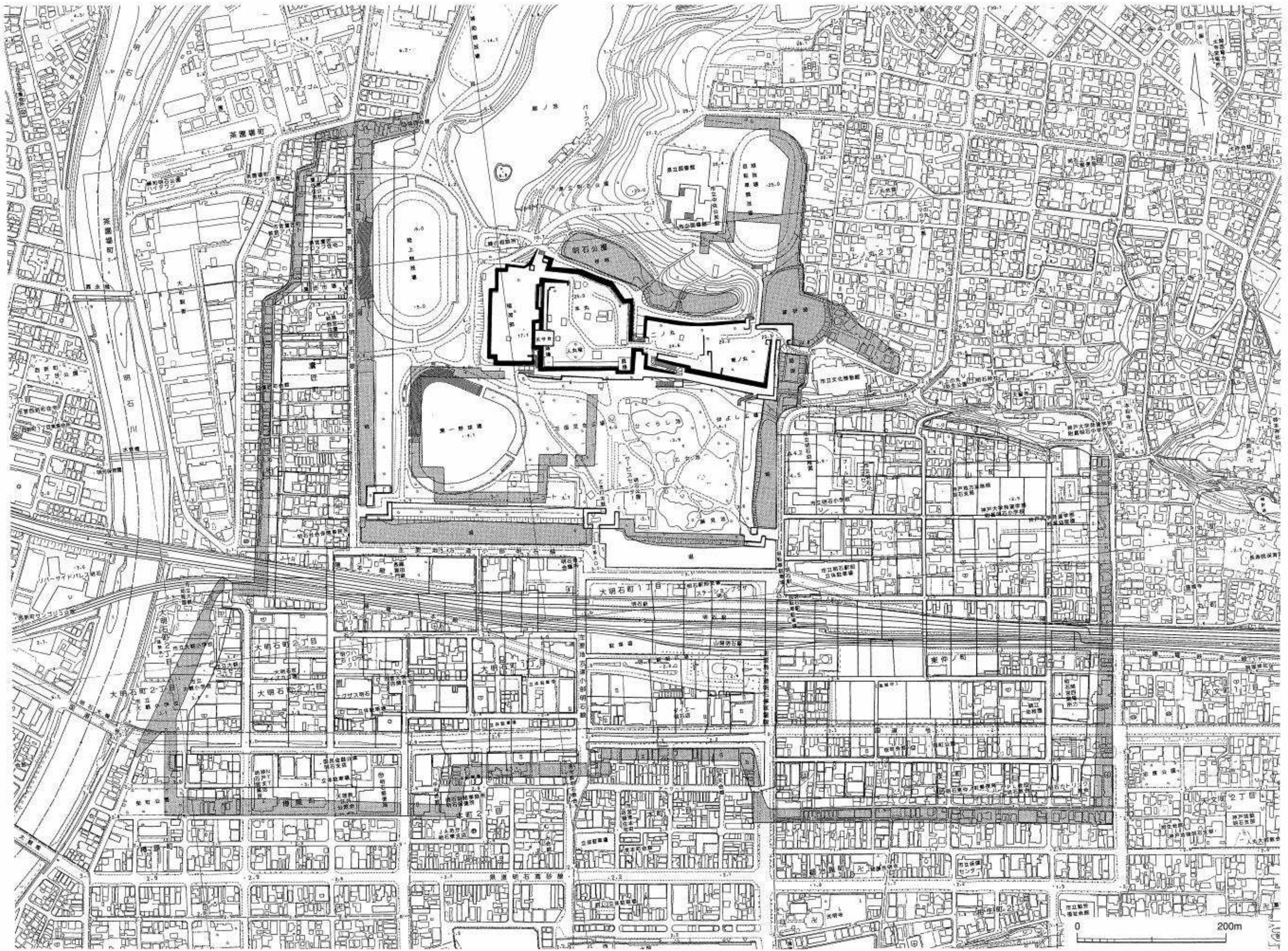
明石市西部の清水村の庄屋を務めた平崎家に伝わったものである。居住者の姓、門の位置が記され、街路に囲まれたブロック内の区画は記載されていない。

⑤『文久年間明石町之図』（『明石郷土史料』収載）〔第11図〕<sup>(8)</sup>

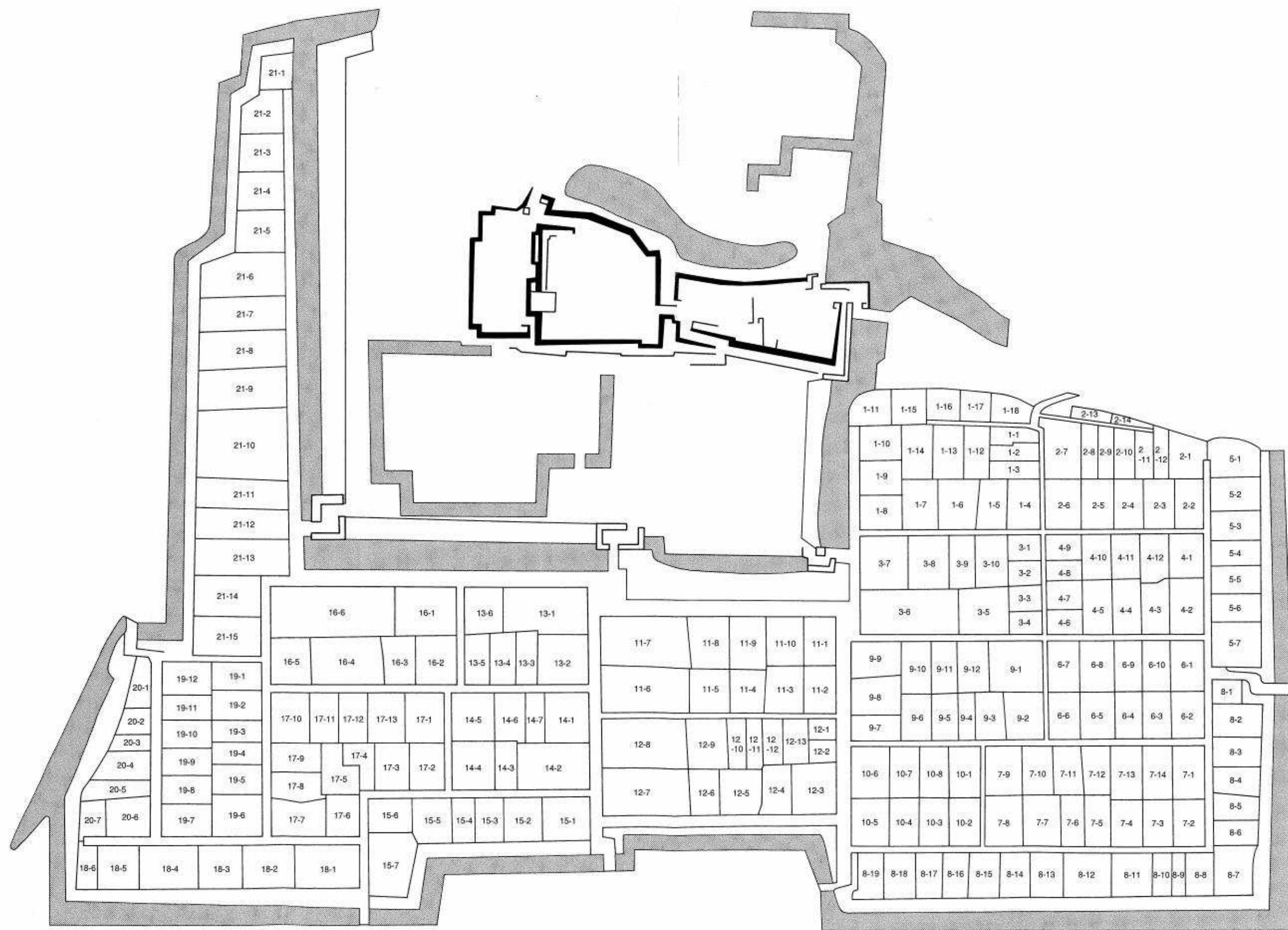
『享保年間明石町之図』と同様に『明石郷土史料』に収載されたものである。居住者の姓のみが記される。

①は享保年間（1716～1736）後のものと考えられ最も古い。②は文政13年（1830）を前後する時期のものと推定される。③は文久3年（1863）の年記をもつものの、③～⑤のなかでは②に最も近い。ただし、異筆による追記部分（③'）は⑤の記載に近い。④は③'にはほぼ同じであるが、ごくわずか③に近い。⑤は最も新しく文久年間（1861～1864）のものと考えられる。個々の年代は明らかにしがたいが、順番は①→②→③→④（→）③'→⑤となるものと考えられる。

- (1) 村上泰樹「土器類」「明石城武家屋敷跡」1992年  
　　稲原昭嘉「明石城武家屋敷における17・18世紀の器種構成」「関西近世考古学研究V」1997年
- (2) 明石城史編さん実行委員会『講座明石城史』付図 2000年
- (3) (2)と同じ
- (4) 屋敷割は幕末時の状況のものを利用した(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『明石城武家屋敷跡』第85図)。古い時期の居住者を示すにはやや無理な点がある
- (5) 明石市立文化博物館『明石城の歴史と文化』 1992年
- (6) 木村英明『史料 明石の戦国史』 1985年
- (7) 矢守一彦『日本城下町絵図集 近畿篇』 1982年
- (8) 野田猪左雄『明石郷土史料』 1929年



第5図 武家屋敷地割復元図



第6図 武家屋敷宅地番号図

第11表 武家屋敷変遷表（1）

ブロック	番号	①	②	③	④	⑤
1	1	松沢	宅地なし	宅地なし	宅地なし	開
	2	西村	松沢	記載なし	松沢	松沢
	3	今井	清水	記載なし	加納	加納
	4	堀	堀	堀	堀	
	5	今泉	今泉	今泉	今泉	今泉
	6	八木	廣瀬	市川	速水	速水
	7	野村	市川	市川	市川	市川
	8	大野	丹羽	古市	古市	古市
	9	長谷部	長谷部	記載なし	長谷部	長谷部
	10	荒井	中山	記載なし	斎藤	斎藤
	11		平田	記載なし	平田	平田
	12					村上
	13					若宮
	14	宅地なし	宅地なし	宅地なし	宅地なし	藤井
	15					大井
	16					大村
	17					兒島
	18					貸長屋
2	1	百目木	百目木	百目木	百目木	百目木
	2	若松	間宮	間宮	間宮	間宮
	3	河崎	河崎	河崎	河崎	河崎
	4	服部	横田	加藤	加藤	加藤
	5	若林	松原	松原	松原	松原
	6	大藤	三輪	三輪	三輪	三輪
	7	八木	奥平	記載なし	津田	津田
	8					大場
	9					前田
	10					戸田
	11	宅地なし	宅地なし	宅地なし	宅地なし	山口
	12					吉田
	13					鈴木
	14					加藤
3	1	桑山	桑山	桑山	桑山	桑山
	2				谷口	小林
	3	松川	井上	御姫様御住居	広瀬	池田
	4	三輪	清水			荒井
	5	上長屋	大口屋	講武所	屋敷	お姫様御殿
	6	御厩	下御口屋		講武所	講武所諸藝道場
	7	竹内	白須	白須	白須	白須
	8	平田	大藤	大藤	大藤	大藤
	9	吉田	吉田	吉田	白須	白須
	10	杉山	立田	立田	立田	立田
4	1	大屋	森田	森田	森田	森田
	2	山口	鳥川	鳥川	鳥川	鳥川
	3	橋本	友部	友部・'大橋'	友部	大橋
	4	潮田	真砂	'真砂'	真砂	真砂
	5	山中	石井	石井	石井	馬場
	6	大井田	堀	堀・'入江'	入江	入江
	7		宮崎	堀・'入江'	宮崎	宮島
	8	入江	御貸長屋	記載なし	大部屋	吉村
	9		御貸長屋	記載なし	御貸長	貸長屋
	10	高田	伊藤	伊トウ・'佐藤'	佐藤	佐藤
	11	山内	山内	山内	山内	山内
	12	永井	永井	永井	永井	永井
5	1	市川	南部	南部	南部	南部
	2	市川	手嶋	山田	山田	山田
	3	小川	加藤	加藤	加藤	加藤
	4	山懸	間嶋	'間嶋'	間嶋	間嶋
	5	石塚	加藤	山中	山中	山中
	6	中山	庄林	雨夜	雨夜	雨夜
	7	丹羽	小川	加藤・'石巻'	石巻	石巻

第12表 武家屋敷変遷表（2）

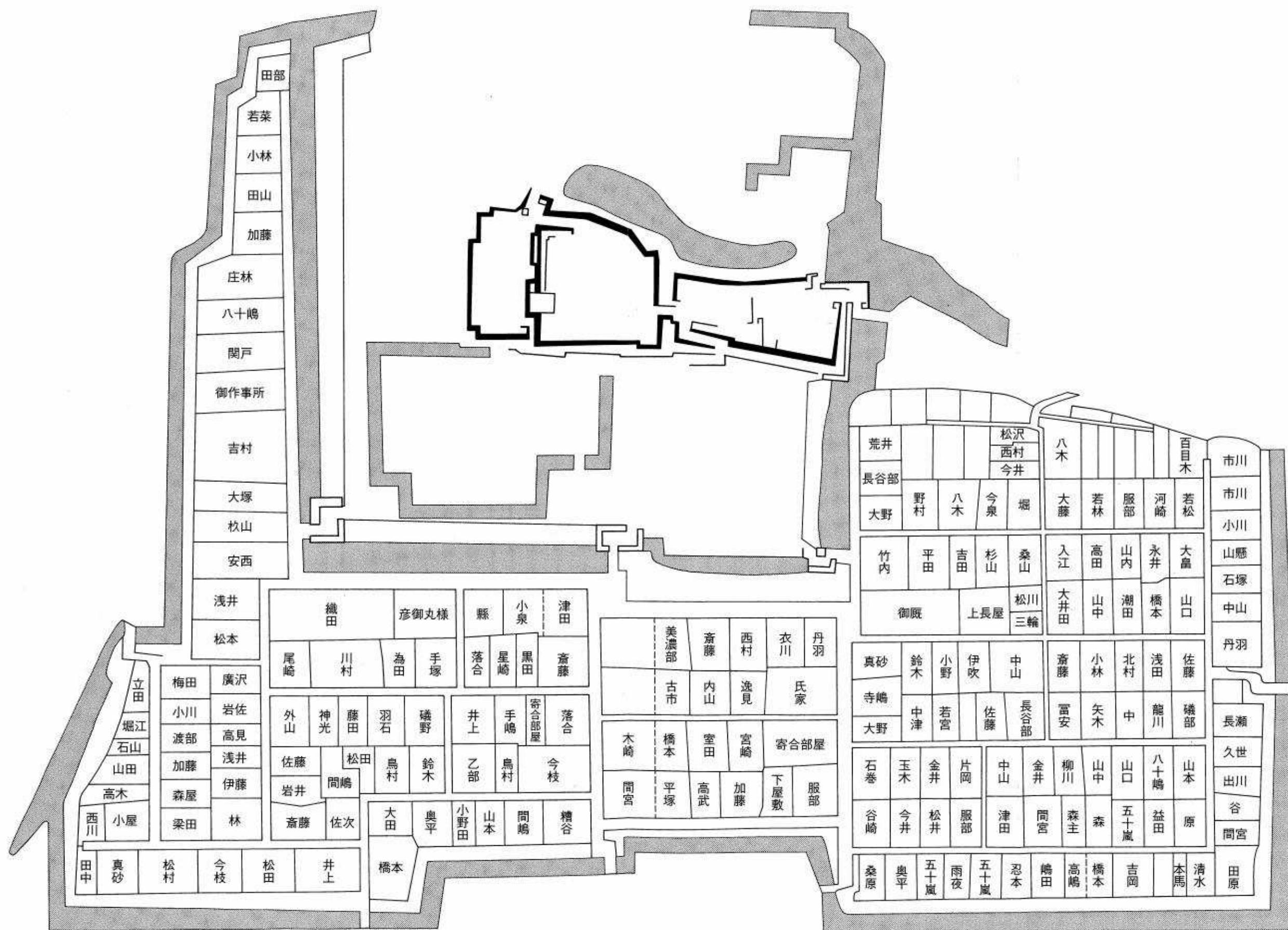
ブロック	番号	①	②	③	④	⑤
6	1	佐藤	太田	太田	太田	鈴木
	2	磯部	磯部	記載なし	磯部	磯部
	3	龍川	本間	本間	本間	本間
	4	中	武藤	武藤	武藤	武藤
	5	矢木	千種	千種	千種	千種
	6	富安	小谷	小谷	小谷	小谷
	7	斎藤	斎藤	安川	安川	安川
	8	小林	磯部	片山	片山	磯部
	9	北村	高田	高田	高田	高田
	10	浅田	浅田	佐藤・‘潮田’	潮田	潮田
7	1	山本	山本	忍本・‘竹内’	竹内	竹内
	2	原	荒井	荒井・‘菅’	荒井	菅
	3	益田	益田	増田	益田	益田
	4	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐
	5	森	赤谷	赤谷	赤谷	赤谷
	6	森主	井上	‘手嶋’	手島	手島
	7	間宮	桑原	桑原	桑原	桑原
	8	津田	鷺塚	鷺塚	鷺塚	鷺塚
	9	中山	大塚	市川	市川	市川
	10	金井	吉田	吉田	吉田	吉田
	11	柳川	柳川	柳川・‘小野口’	小野口	小野口
	12	山中	手塚	清水	清水	清水
	13	山口	山口	山口	山口	山口
	14	八十嶋	矢野	矢ノ	矢野	矢野
8	1	記載なし	水谷	若宮・‘伊藤’	伊藤	伊藤
	2	長瀬	長瀬	長瀬	長瀬	長瀬
	3	久世	久世	久世・‘室田’	久世	室田
	4	出川	佐藤	佐藤	佐藤	佐藤
	5	谷	津田	橋本・‘津田’	橋本	橋本
	6	間宮	橋本	橋本	橋本	橋本
	7	田原	田原	田原	田原	田原
	8	清水	村岡	村岡	村岡	村岡
	9	本馬	山田	松田	松田	松田
	10	記載なし	藤井	水谷	水谷	水谷
	11	吉岡	橋本	‘橋本’	橋本	橋本
	12	橋本	橋本	‘丹羽’	丹羽	丹羽
	13	鳴田	島田	鳴田	鳴田	鳴田
	14	忍本	井上	斎藤	斎藤	伊藤
	15	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐	五十嵐
	16	雨夜	雨夜	大賀	大賀	大賀
	17	五十嵐	閔戸	手塚	手塚	手塚
	18	奥平	奥平	大井田	大井田	大井田
	19	桑原	木村	木村	木村	木村
9	1	中山	山口	山口	山口	山口
	2	長谷部	船谷	記載なし	船田	松本
	3	佐藤	水野	記載なし	桜井	櫻井
	4	記載なし	三好	記載なし	三好	三好
	5	若宮	間宮	記載なし	間宮	間宮
	6	中津	大山	記載なし	大山	大山
	7	大野	向井	向井	向井	向井
	8	寺嶋	寺嶋	‘寺嶋’	寺島	寺島
	9	真砂	逸見	逸見	逸見	逸見
	10	鈴木	鈴木	鈴木	鈴木	佐治
	11	小野	矢木	矢木	奥平	奥平
	12	伊吹	原	原	原	原

第13表 武家屋敷変遷表（3）

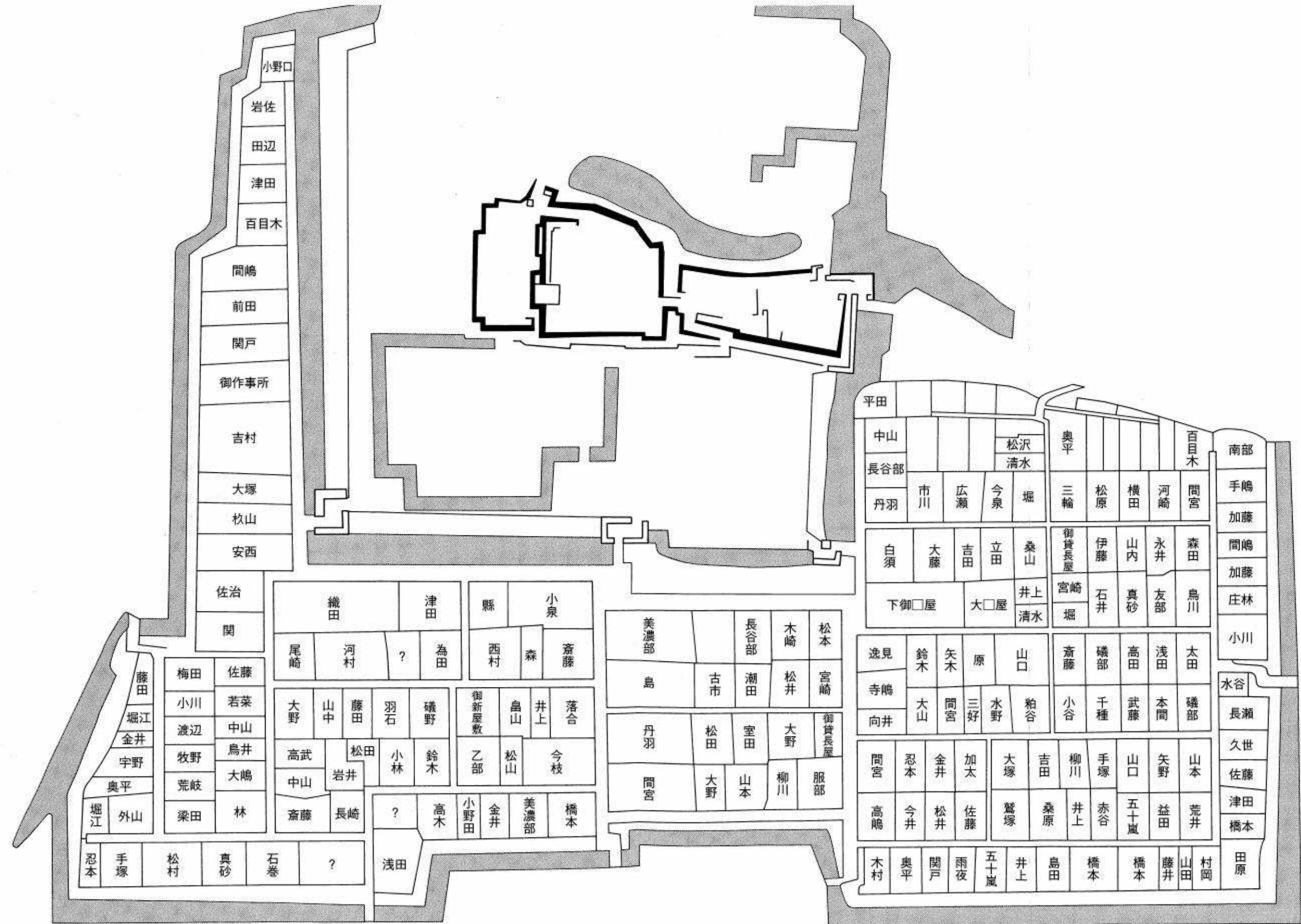
ブロック	番号	①	②	③	④	⑤
10	1	片岡	加太	加太	加太	加太
	2	服部	佐藤	小ノ田	大野田	小野田
	3	松井	松井	‘林’	林	林
	4	今井	今井	今井	今井	今井
	5	谷崎	高嶋	吉田	高嶋	高崎
	6	石巻	間宮	記載なし	間宮	間宮
	7	玉木	忍本	記載なし	吉田	吉田
	8	金井	金井	内山	内山	内山
11	1	丹羽	松本	松本	松本	高武
	2	氏家	宮崎	宮崎	宮崎	宮崎
	3	氏家	松井	記載なし	松井	松井
	4	逸見	潮田	記載なし	藤木	藤木
	5	内山	古市	大野	大野	大野
	6	古市	島	島	島	島
	記載なし					
	7	記載なし	美濃部	美濃部	美濃部	美濃部
	丹下下屋敷					
	8	斎藤	？	島	島	島
12	9	西村	長谷部	指月院様	指月院様屋敷	指月院
	10	衣川	木崎	木崎	木崎	木崎
	1	寄合部屋	御貸長屋	記載なし	速水	速水
	2	寄合部屋	御貸長屋	記載なし	堀江	堀江
	3	服部	服部	服部	服部	服部
	4	下屋敷	柳川	林	林	林
	5	加藤	山本	山本	山本	山本
	6	高武	大野	大野	大野	大野
	7	平塚	間宮	間宮	間宮	間宮
	間宮					
	8	木崎	丹羽	丹羽	丹羽	丹羽
	橋本					
13	9	室田	松田	松田	松田	松田
	10	宮崎	室田	黒田	室田	荒木
	11					斎藤
	12	寄合部屋	大野	大野	大野	松山
	13					大野
	1	津田	小泉	小泉	小泉	小泉
14	小泉					
	2	斎藤	斎藤	斎藤	斎藤	斎藤
	3	黒田	森	山本	山本	山本
	4	星崎	西村	水野	水野	水野
	5	落合		西村	西村	西村
	6	縣	縣	縣	縣	縣
15	1	落合	落合	落合	落合	落合
	2	今枝	今枝	今枝	今枝	今枝
	3	島村	松山	松山	松山	松山
	4	乙部	乙部	乙部	乙部	乙部
	5	井上	御新屋敷	‘?’	屋敷	松平
	6	手塚	畠山	‘畠山’	畠山	畠山
	7	寄合部屋	井上	中村	中村	中村
16	1	糟谷	橋本	黒田	黒田	黒田
	2	間嶋	美濃部	記載なし	美濃部	美濃部
	3	山本	金井	記載なし	金井	金井
	4	小野田	小野田	‘美濃部’	浅田	浅田
	5	奥平	高木	‘金井’	高木	高木
	6	大田	？	‘浅田’	牧野	牧野
	7	橋本	浅田	記載なし	佐治	山尾
17	1	彦御丸様	津田	津田	津田	津田
	2	手塚	為田	長谷部	長谷部	長谷部
	3	為田	？	吉野	吉野	吉野
	4	川村	河村	河村	河村	河村
	5	尾崎	尾崎	尾崎	尾崎	尾崎
	6	織田	織田	織田	織田	織田

第14表 武家屋敷変遷表(4)

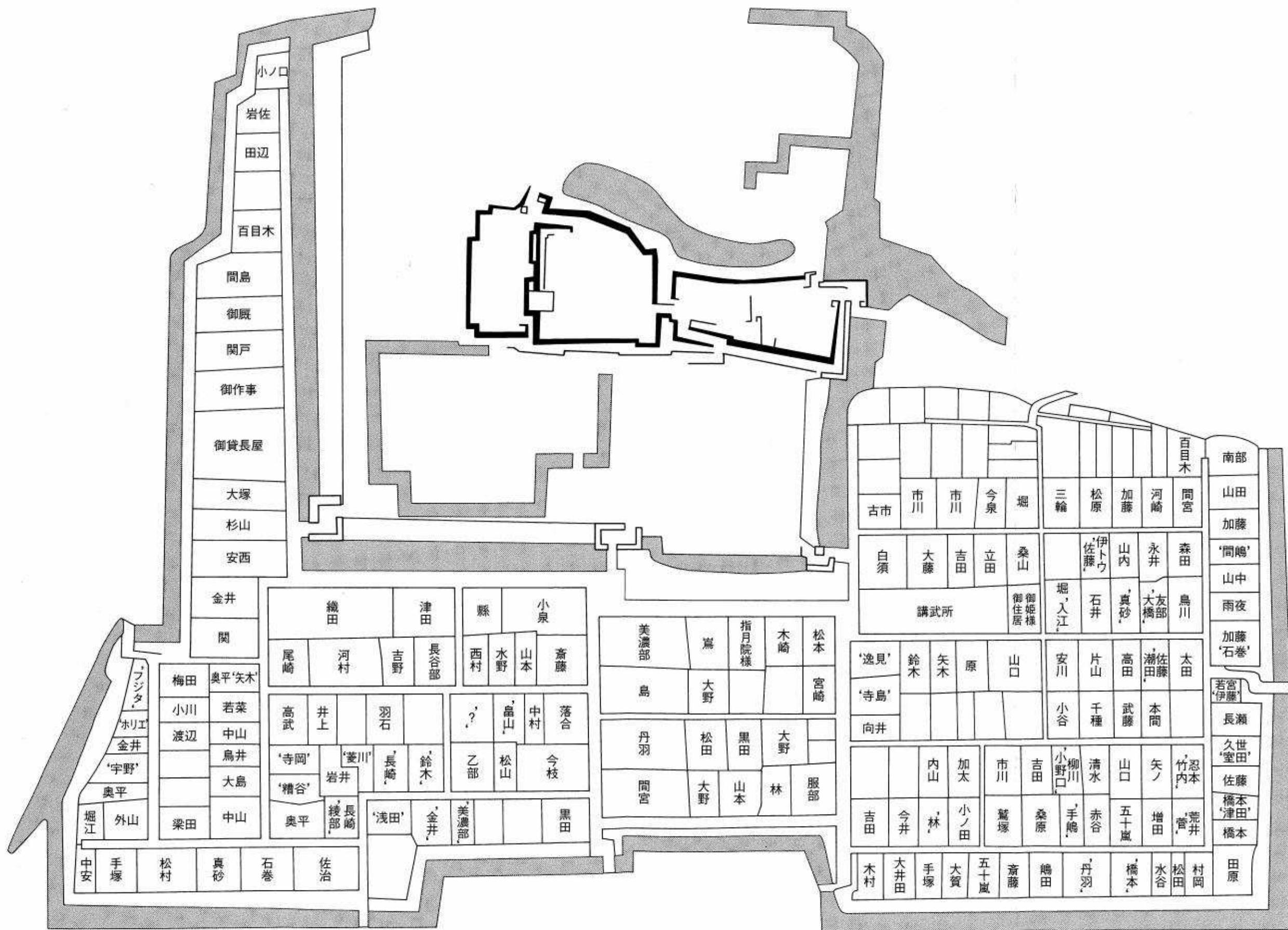
ブロック	番号	①	②	③	④	⑤
17	1	磯野	磯野	記載なし	磯野	磯野
	2	鈴木	鈴木	‘鈴木’	鈴木	鈴木
	3	鳥村	小林	‘長崎’	記載なし	林
	4	松田	松田	‘菱川’	菱川	菱川
	5	間嶋	岩井	岩井	岩井	岩井
	6	佐次	長崎	長崎・‘綾部’	口部	綾部
	7	斎藤	斎藤	奥平	奥平	奥平
	8	岩井	中山	‘糟谷’	粕谷	粕谷
	9	佐藤	高武	‘寺岡’	寺岡	寺岡
	10	外山	大野	高武	高武	荻野・藤田
	11	神光	山中	井上	井上	井上
	12	藤田	藤田	記載なし	小林	小林
	13	羽石	羽石	羽石	羽石	羽石
18	1	井上	?	佐治	御納屋	斎藤
	2	松田	石巻	石巻		御用前藏
	3	今枝	真砂	真砂	真砂	真砂
	4	松村	松村	松村	松村	松村
	5	真砂	手塚	手塚	手塚	手塚
	6	田中	忍本	中安	中安	中安
19	1	廣沢	佐藤	奥平・‘矢木’	八木	矢木
	2	岩佐	若菜	若菜	若菜	若菜
	3	高見	中山	中山	中山	中山
	4	浅井	鳥井	鳥井	鳥井	津田
	5	伊藤	大鳴	大島	高桑	高桑
	6	林	林	中山	中山	中山
	7	梁田	梁田	梁田	梁田	梁田
	8	森屋	荒岐	記載なし	荒岐	荒木
	9	加藤	牧野	記載なし	立田	立田
	10	渡部	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺
	11	小川	小川	小川	小川	小川
	12	梅田	梅田	梅田	梅田	梅田
20	1	立田	藤田	フジタ	藤田	荻野
	2	堀江	堀江	ホリエ	林	鳥居
	3	石山	金井	金井	金井	金井
	4	山田	宇野	‘宇野’	宇野	宇野
	5	高木	奥平	奥平	奥平	奥平
	6	小屋	外山	外山	外山	外山
	7	西川	堀江	堀江	堀江	堀江
21	1	田部	小野口	小ノロ	柳川	長崎
	2	若菜	岩佐	岩佐	岩佐	岩佐
	3	小林	田辺	田辺	田辺	田辺
	4	田山	津田	記載なし	小川	小川
	5	加藤	百目木	百目木	百目木	百目木
	6	庄林	間嶋	間島	間嶋	間島
	7	八十鳩	前田	御厩	御厩	御馬部屋
	8	関戸	関戸	関戸	関戸	関戸
	9	御作事	御作事所	御作事	御作事所	御作事場
	10	吉村	吉村	御賃長屋	御賃長屋	賃長屋
	11	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
	12	松山	松山	杉山	松山	杉山
	13	安西	安西	安西	安西	安西
	14	浅井	佐治	金井	金井	金井
	15	松本	閑	閑	閑	閑



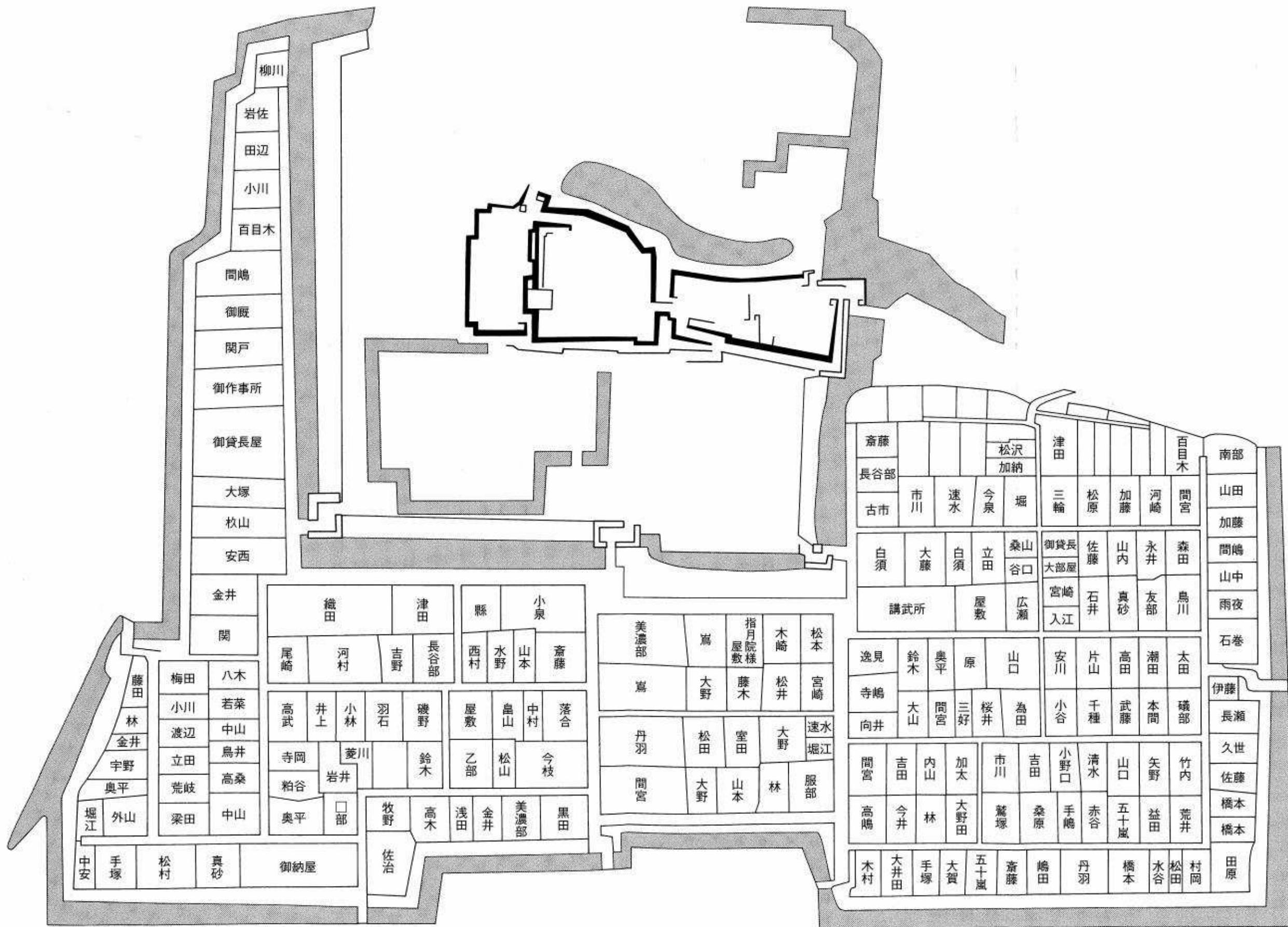
第7図 「明石御廟内之図」の居住者名



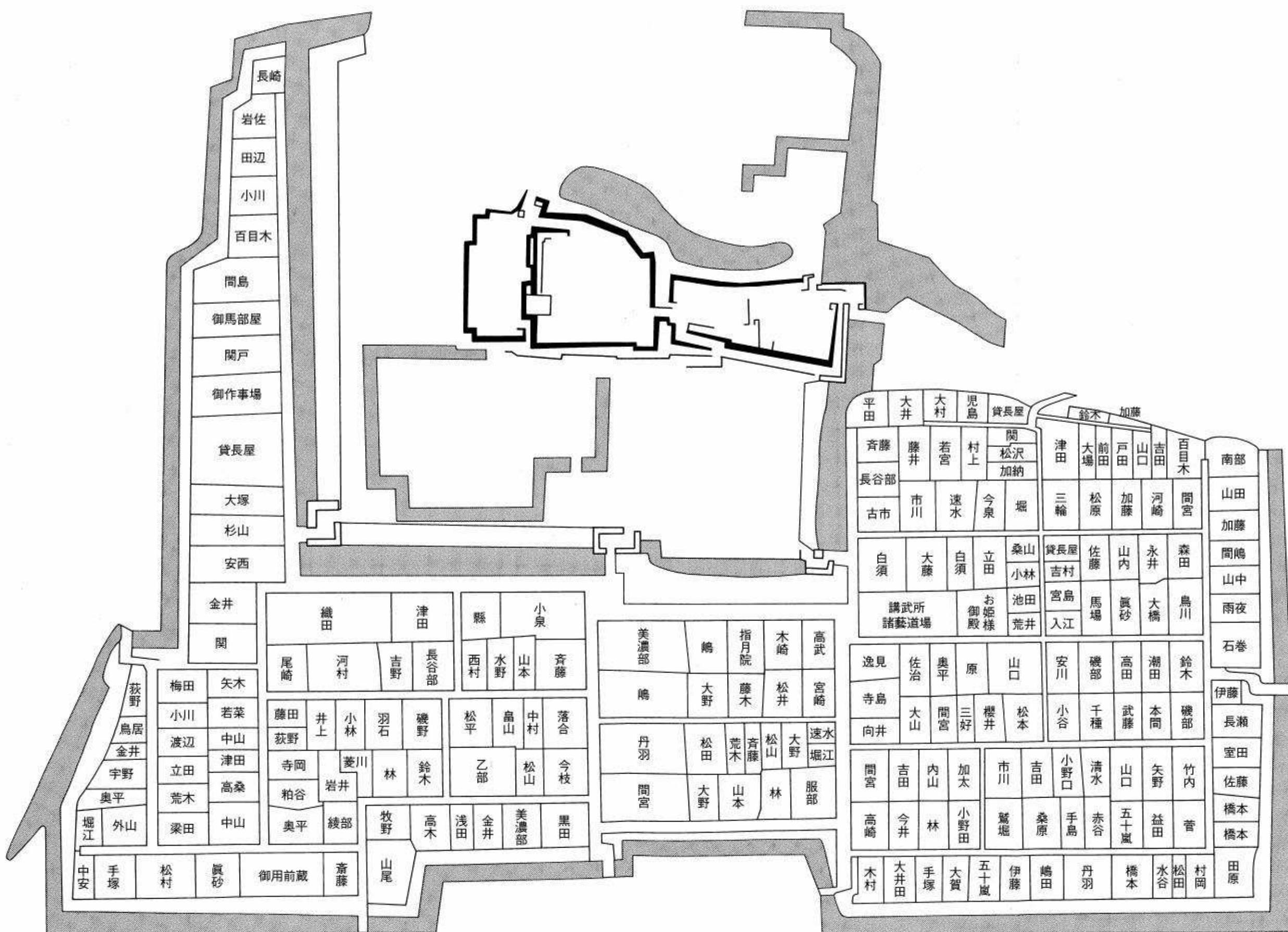
第8図 『明石城侍屋敷敷図』の居住者名



第9図 「明石町旧全図」の居住者名



第10図 「明石家中之図」の居住者名

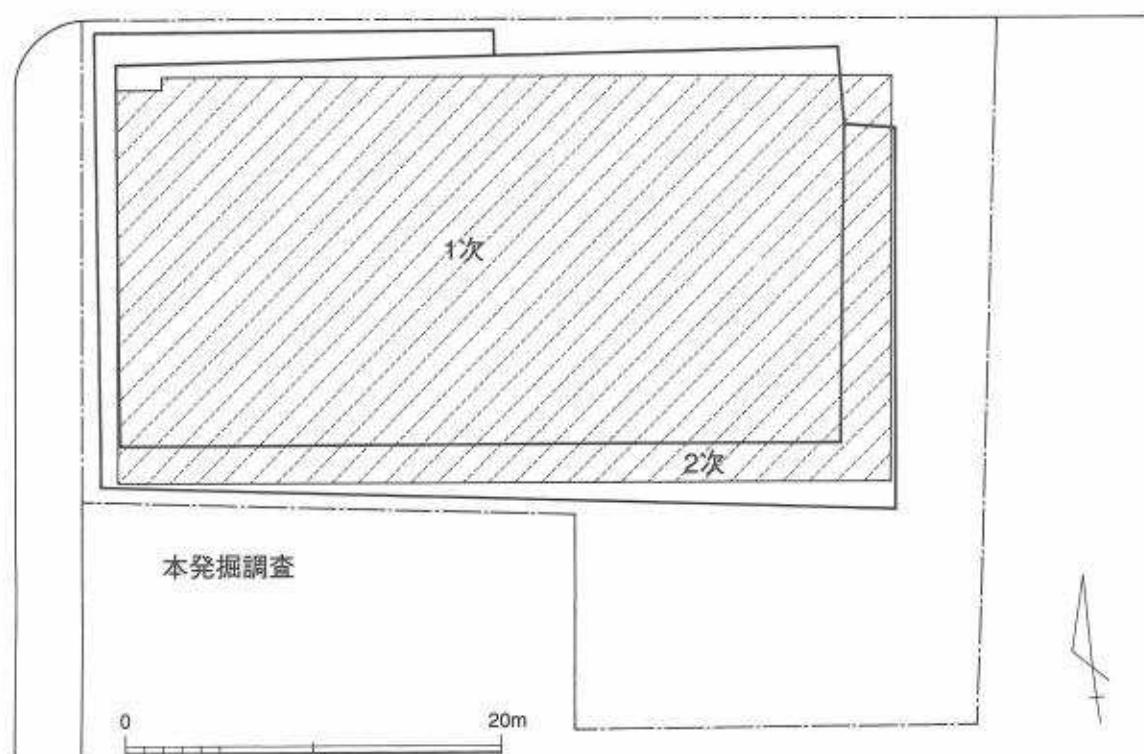
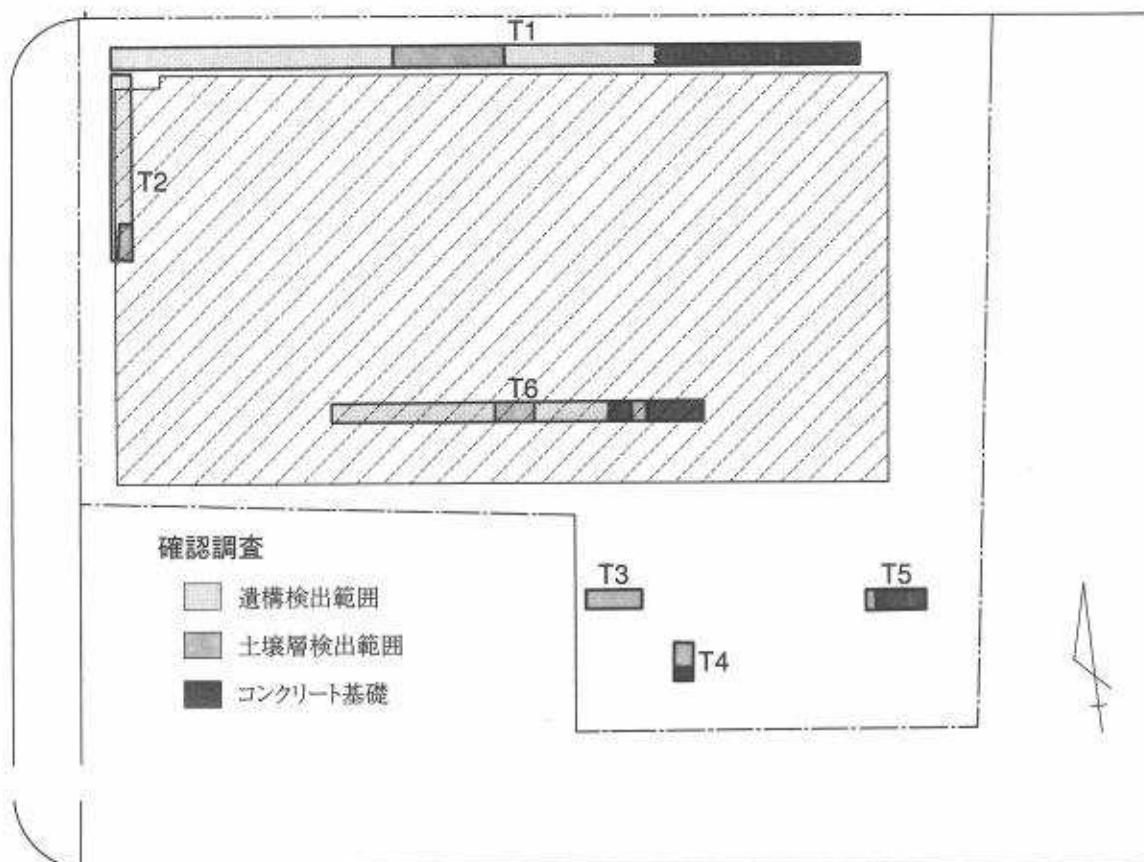


第11図 『文久年間明石町之図』の居住者名

図 版

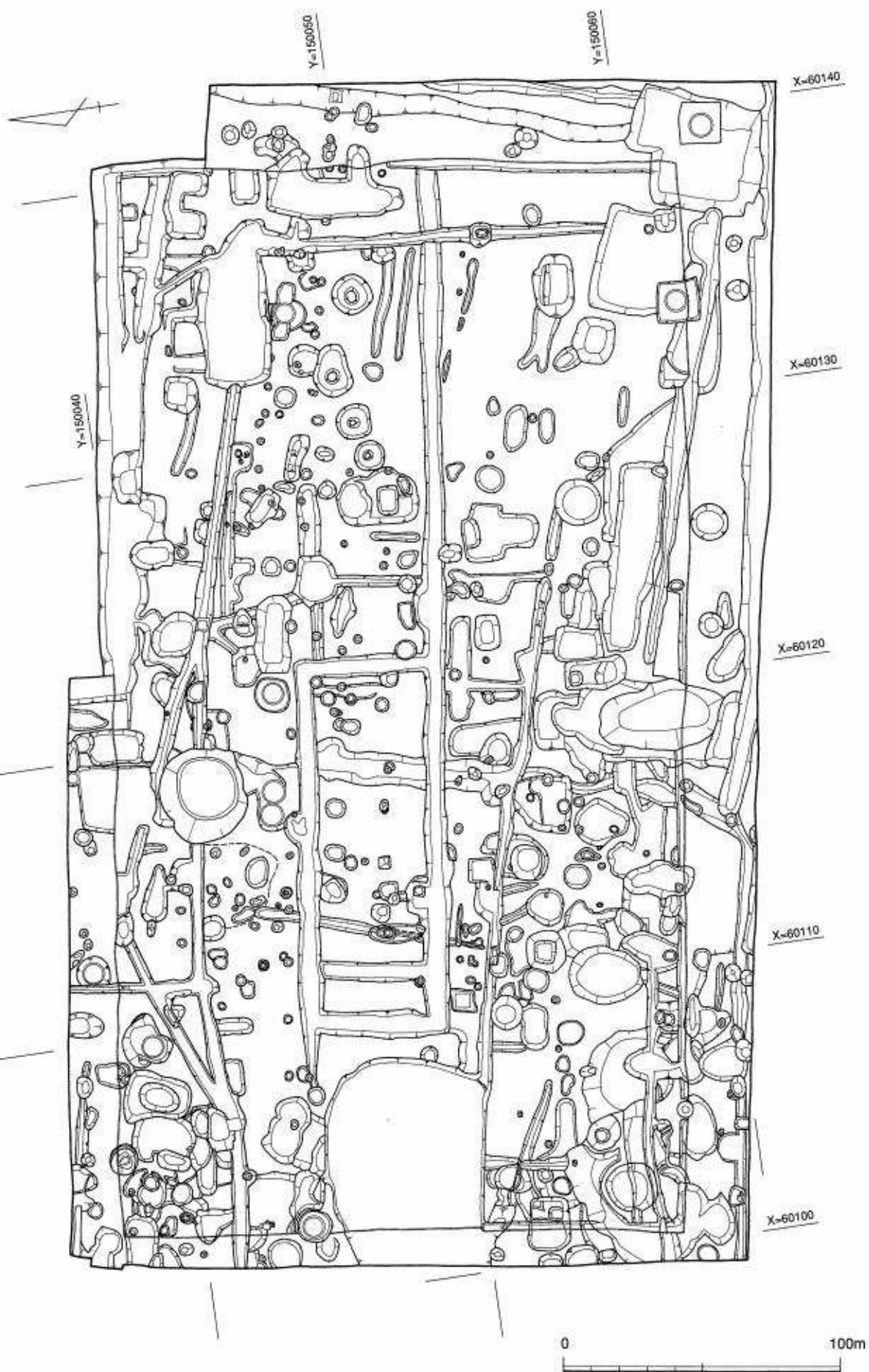
図版 1

調査区配置図



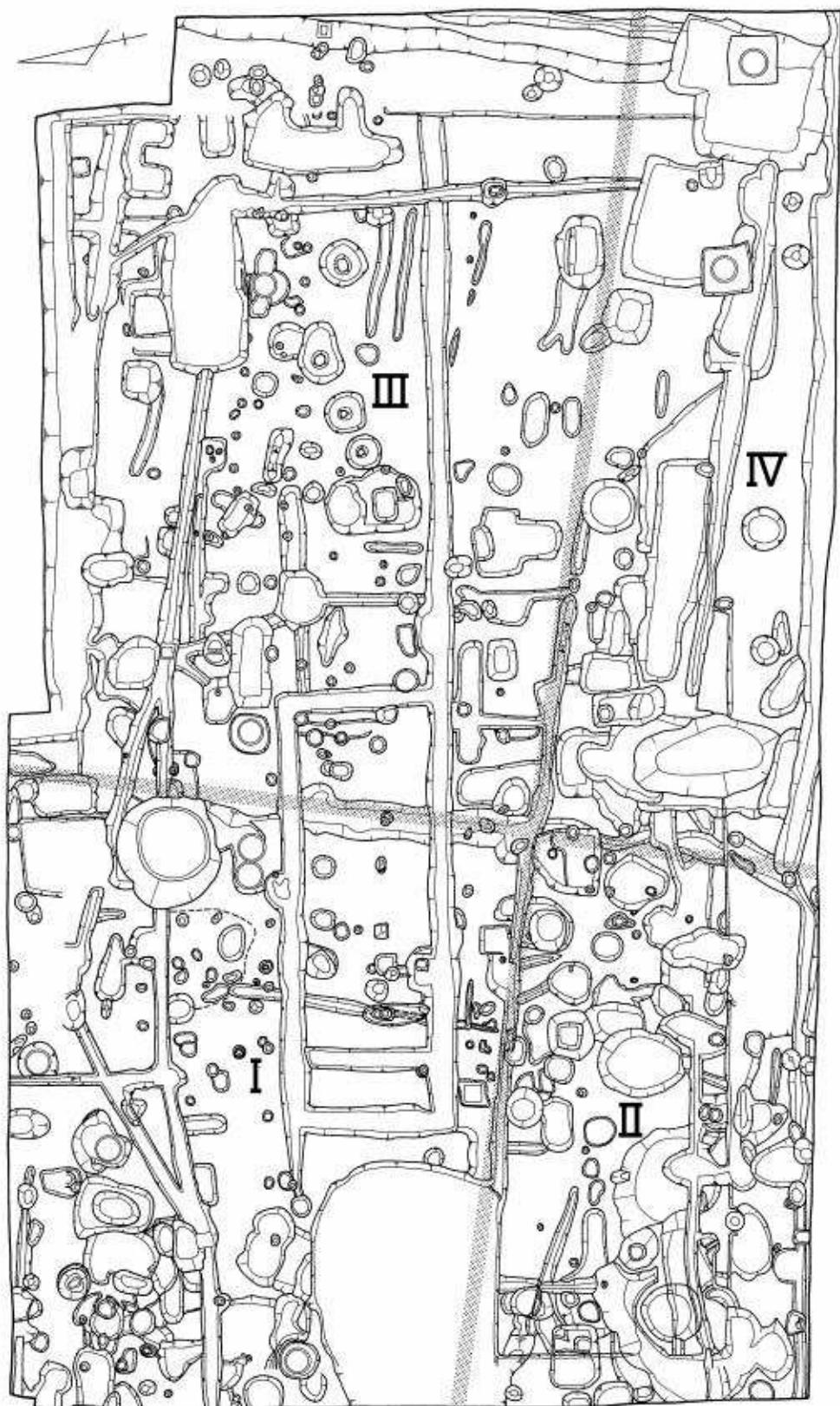
## 図版2

### 全体図



図版 3

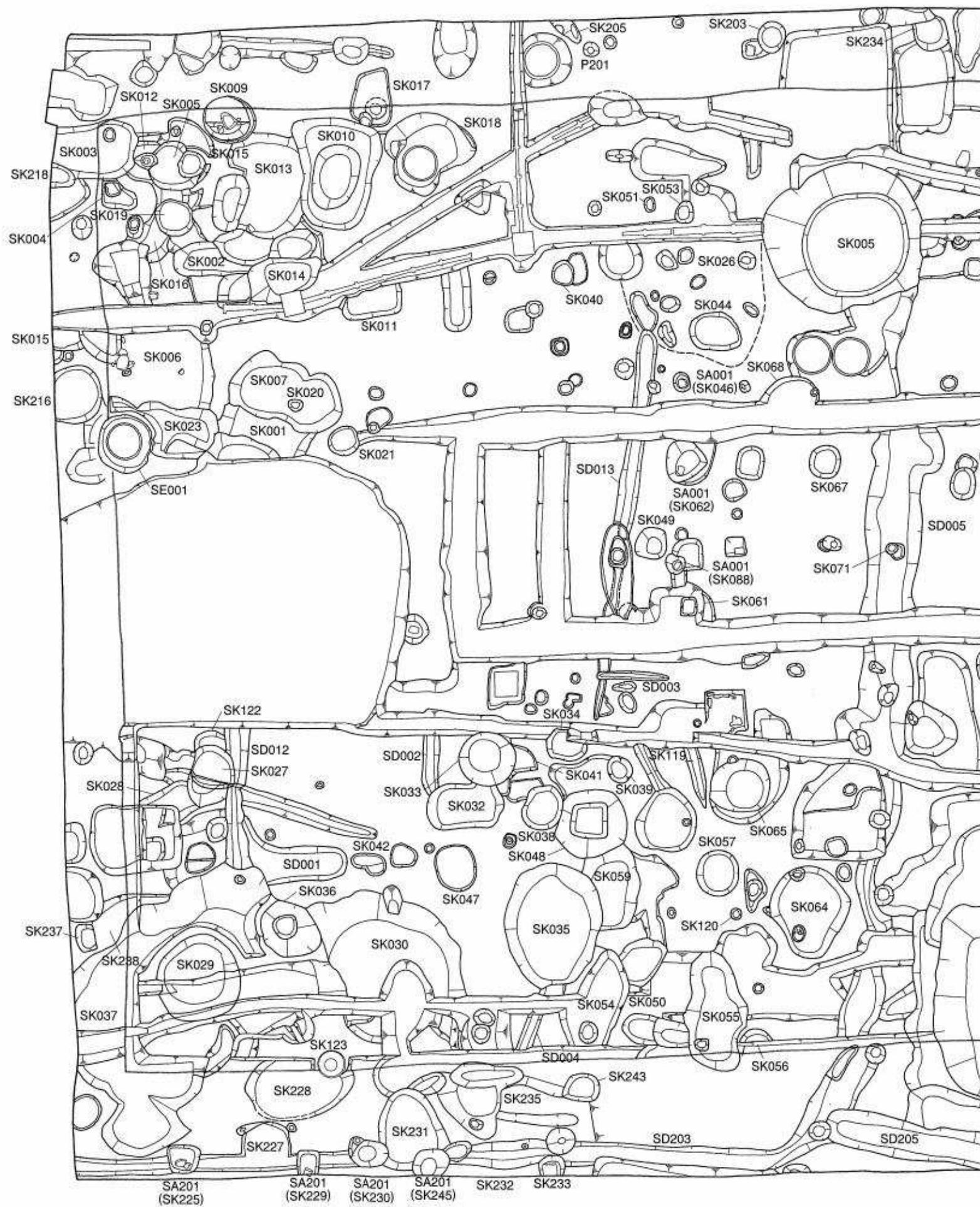
調査区地区割図



0 100m

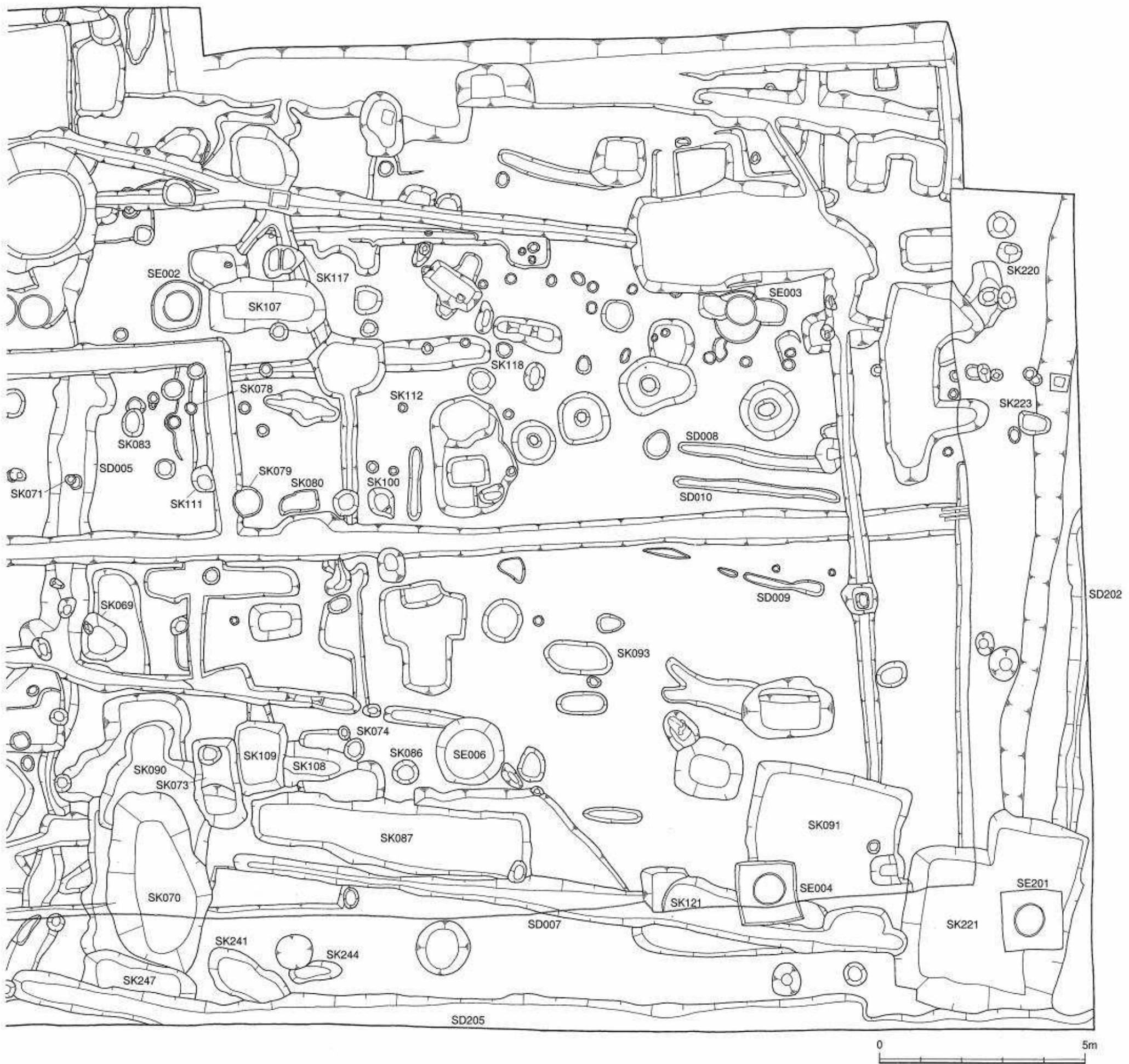
## 図版4

I・II区造構配置図



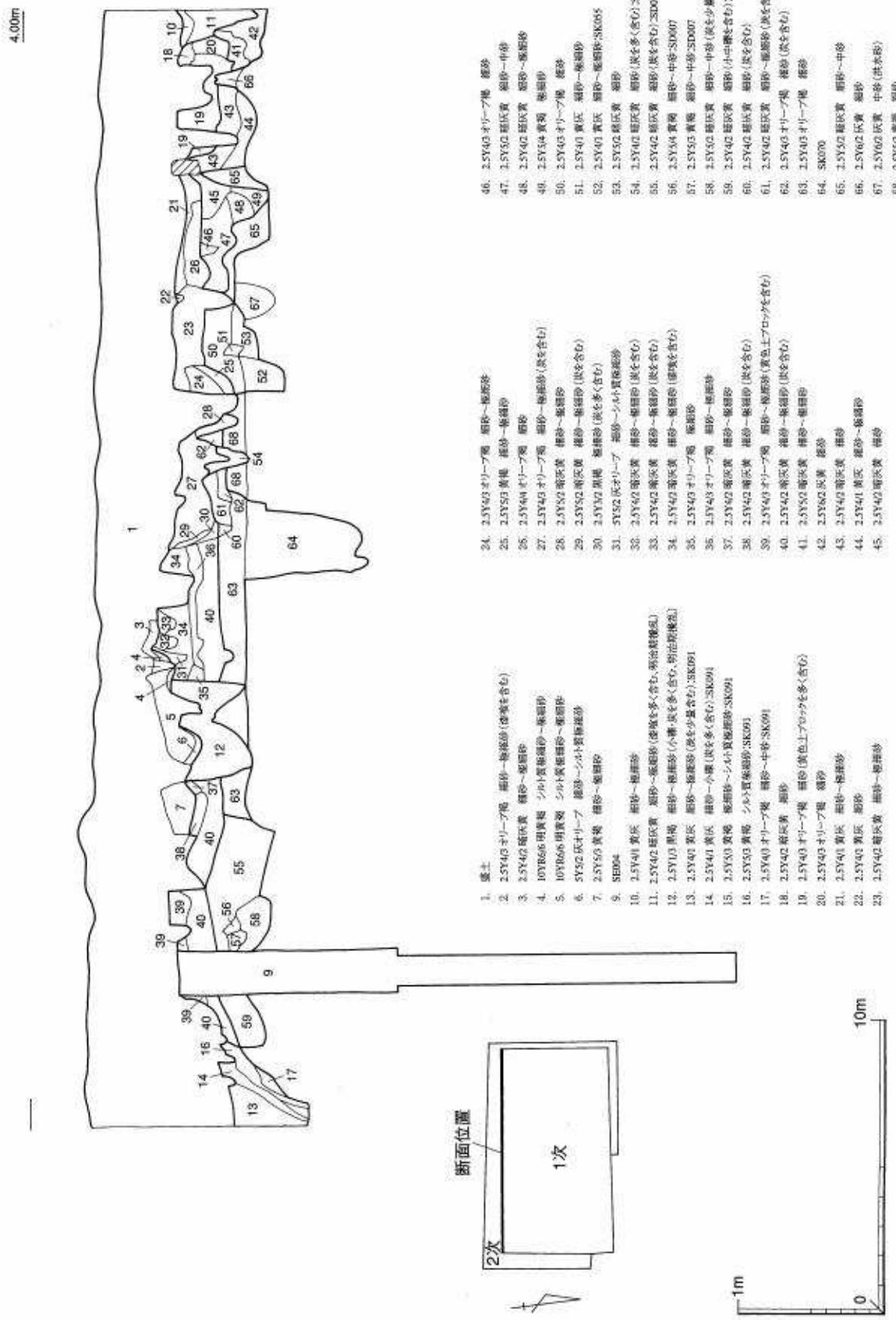
図版 5

III・IV区造構配置図



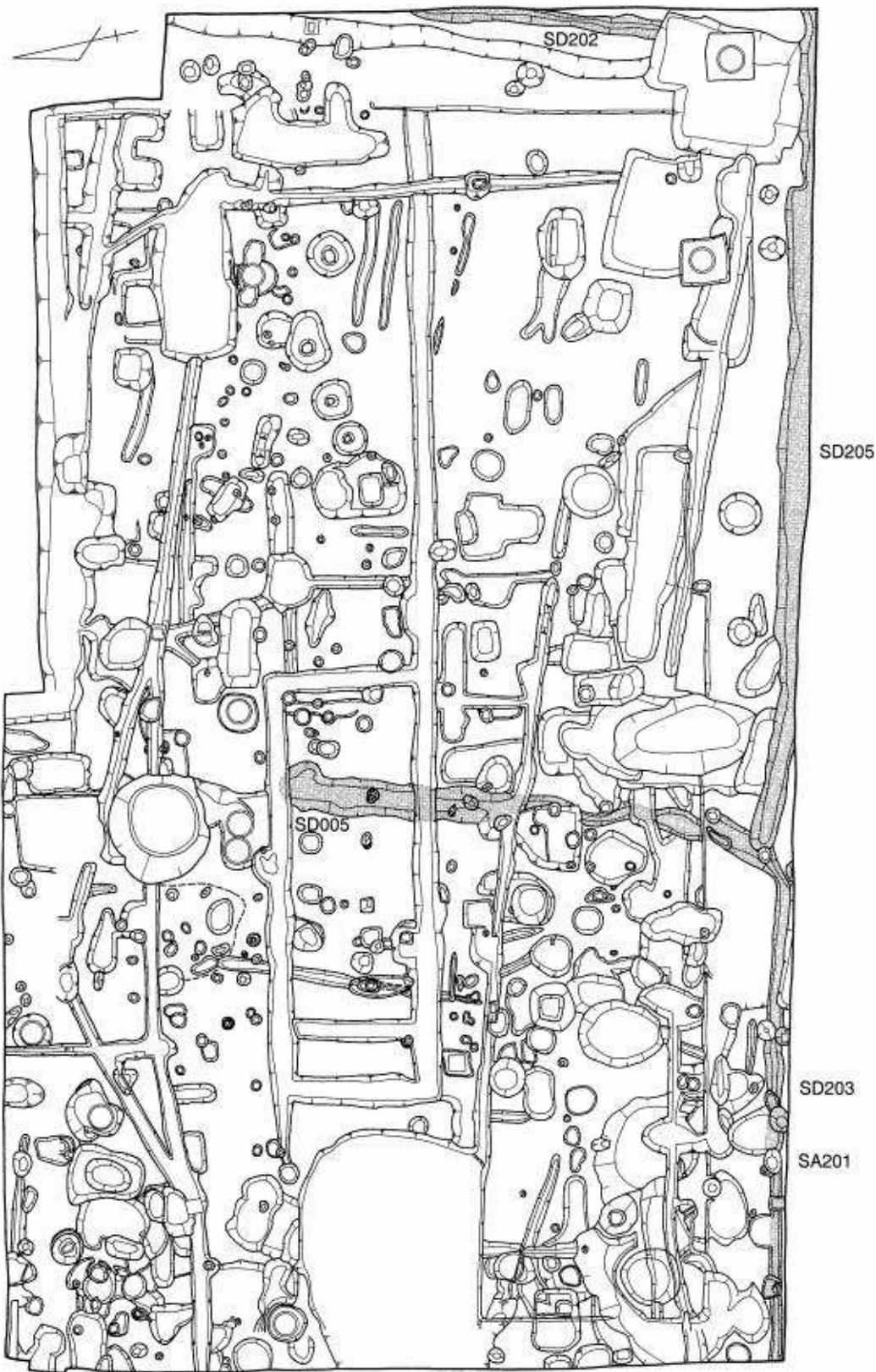
# 図版6

調査区土層断面図



図版 7

区画施設位置図

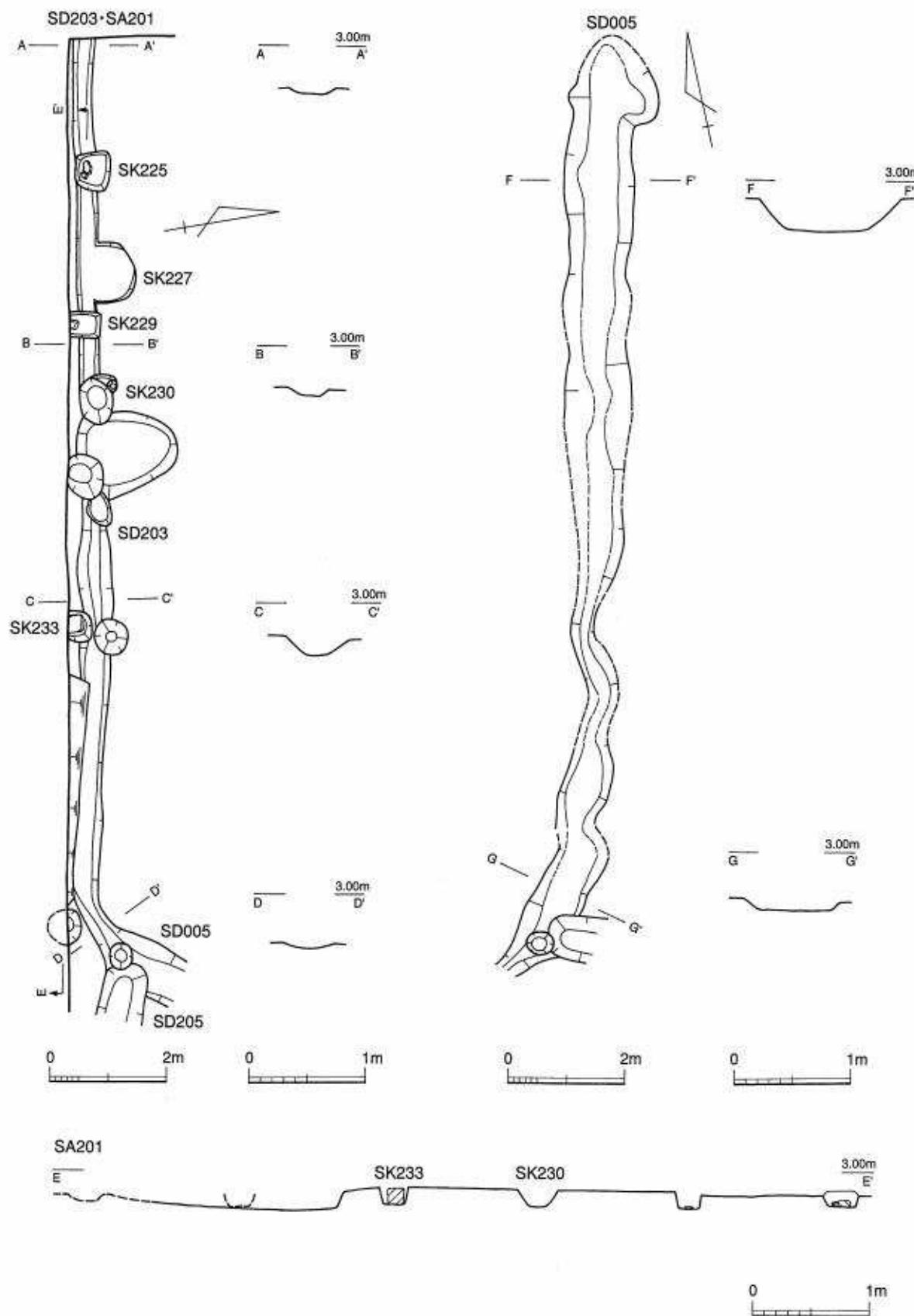


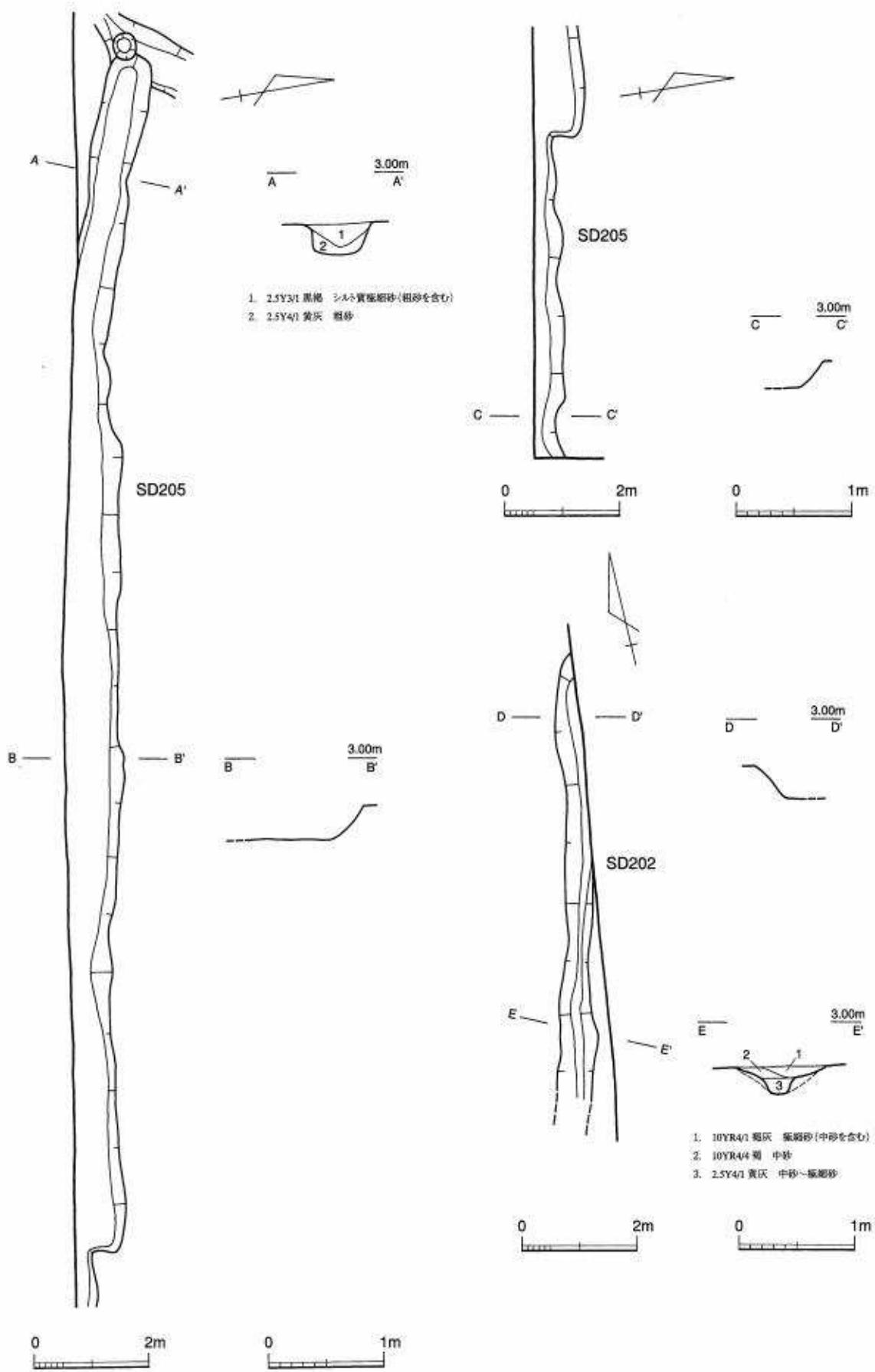
0

100m

# 図版 8

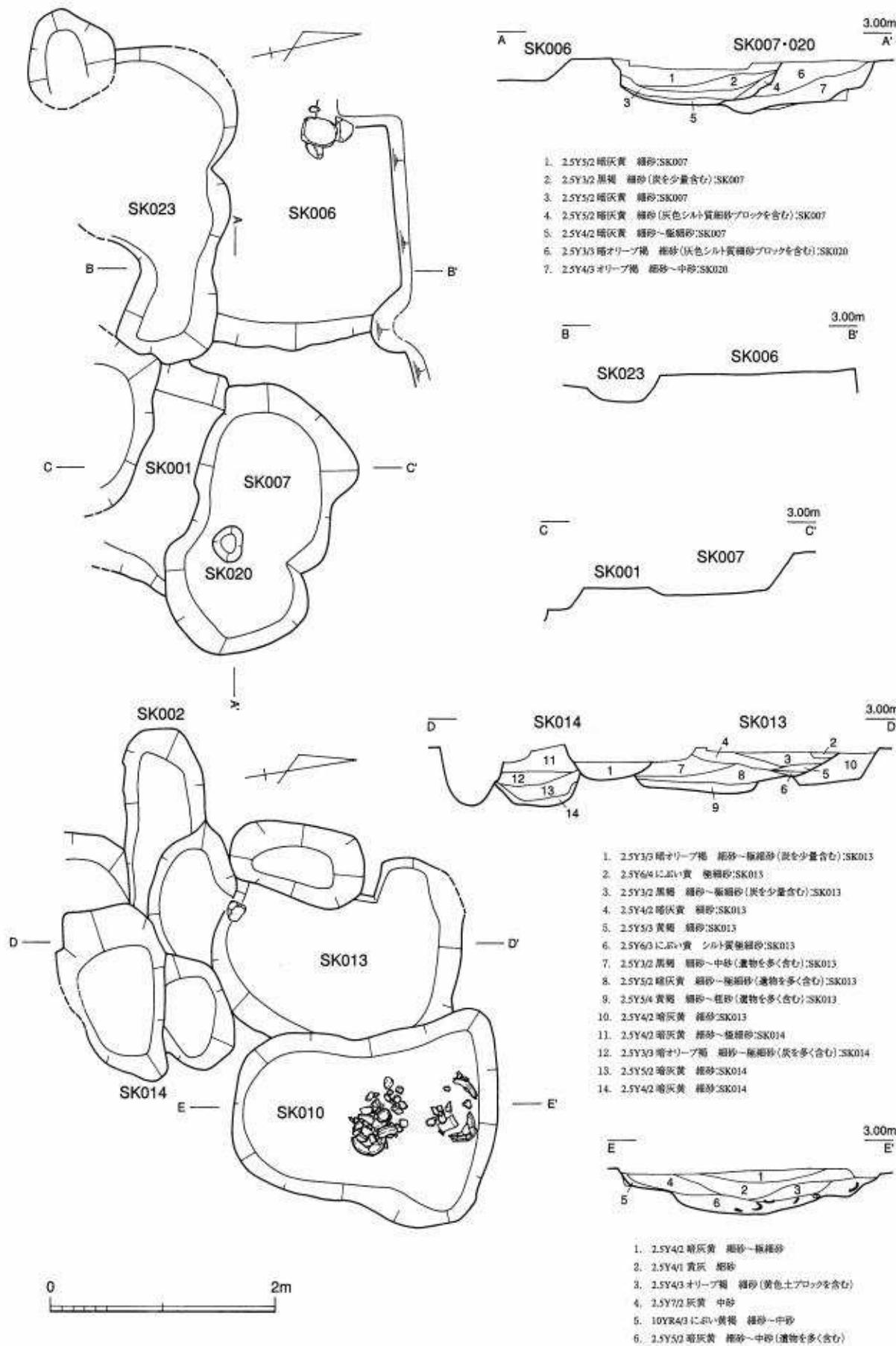
区画施設 (1)





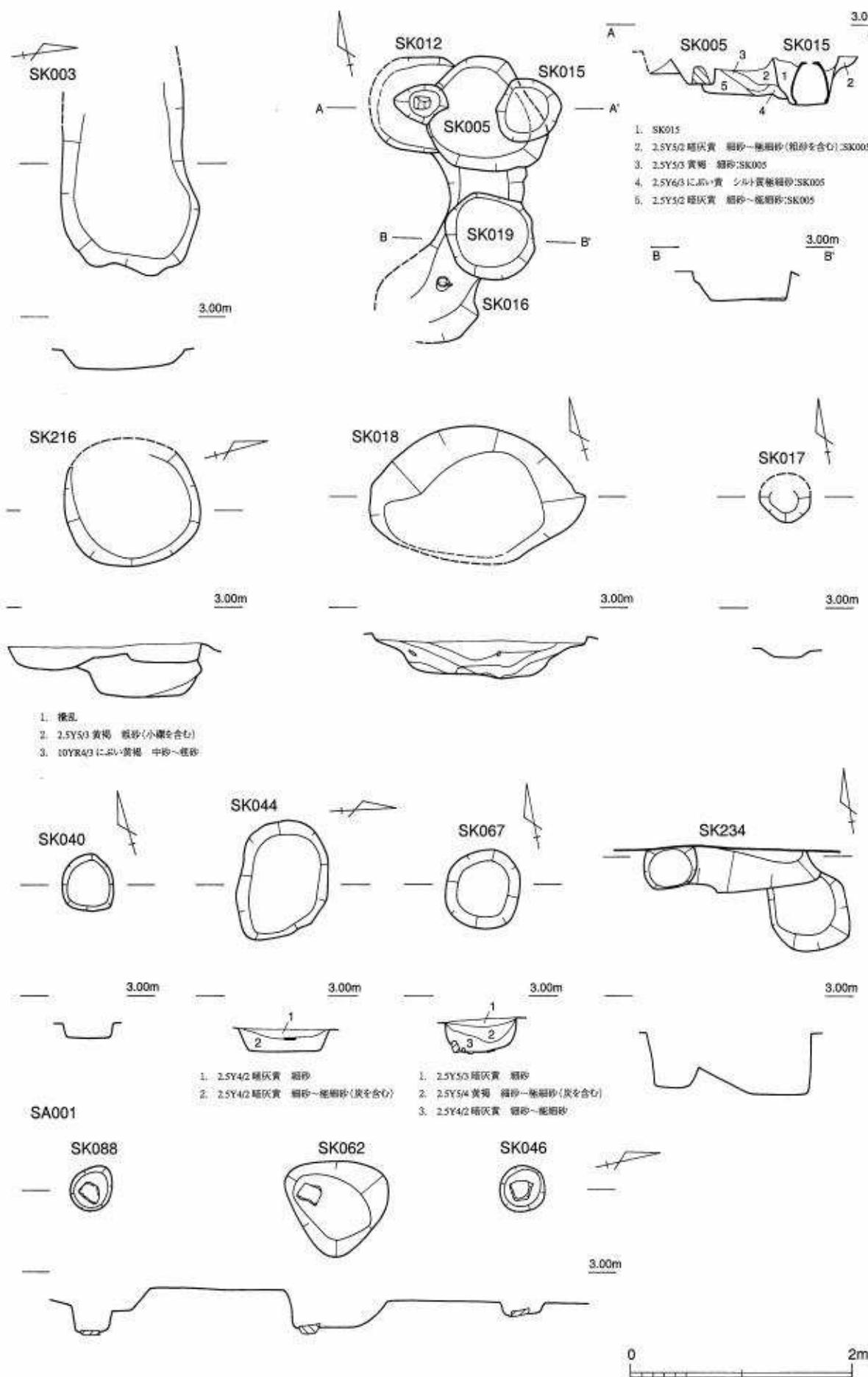
# 図版10

## I区の遺構(1)



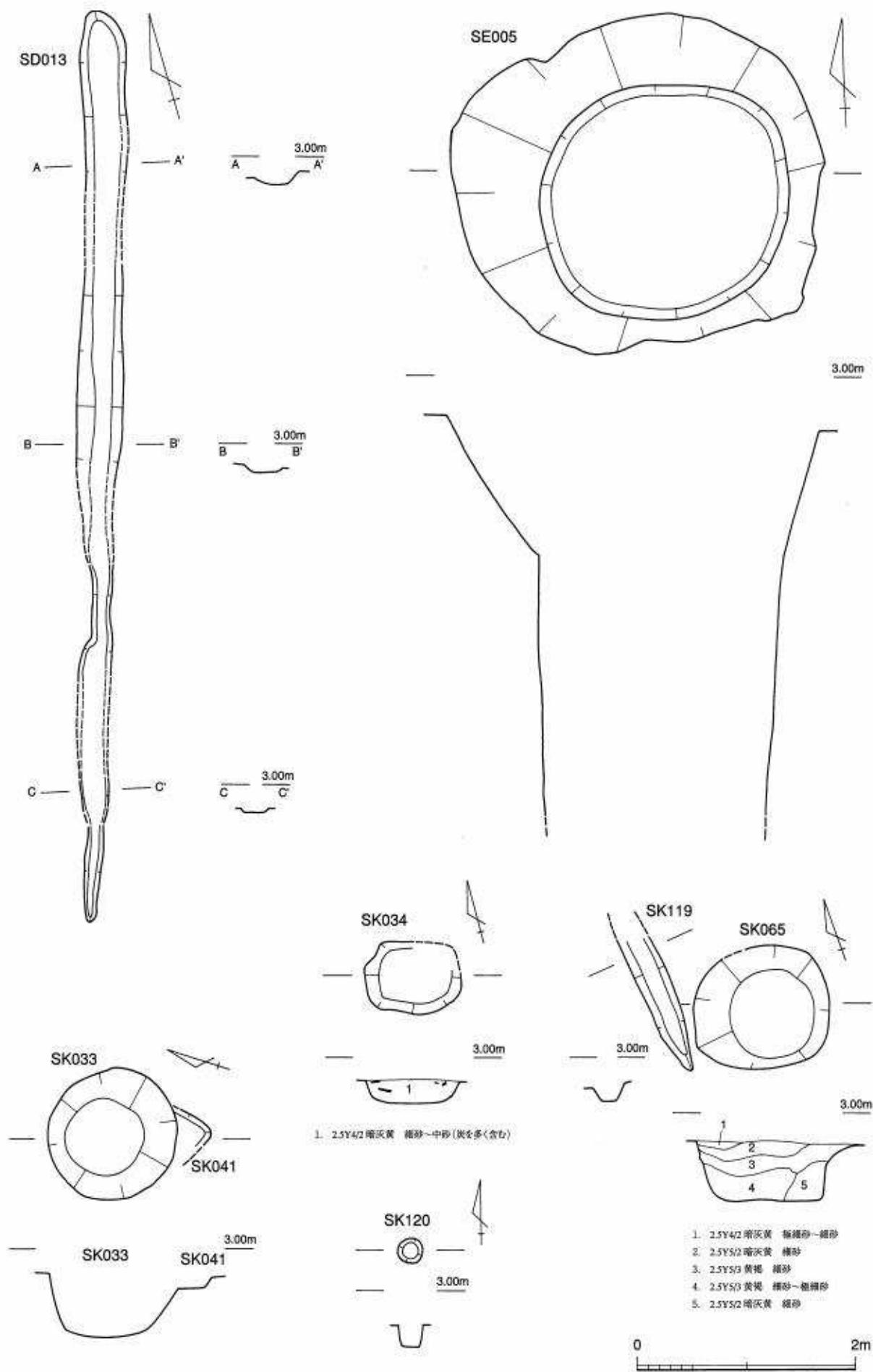
図版11

I区の遺構 (2)



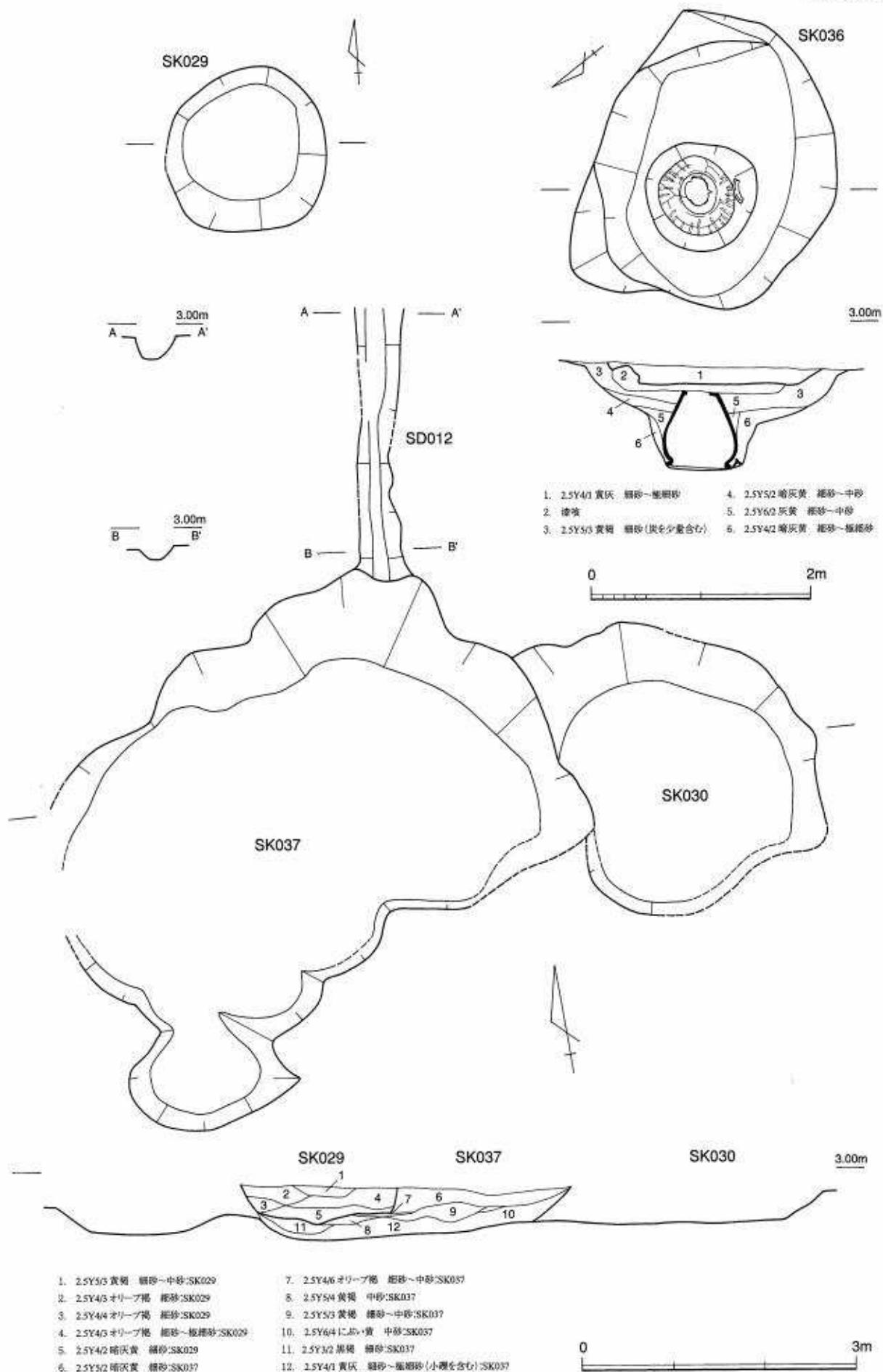
## 図版12

I区の遺構(3)、II区の遺構(1)



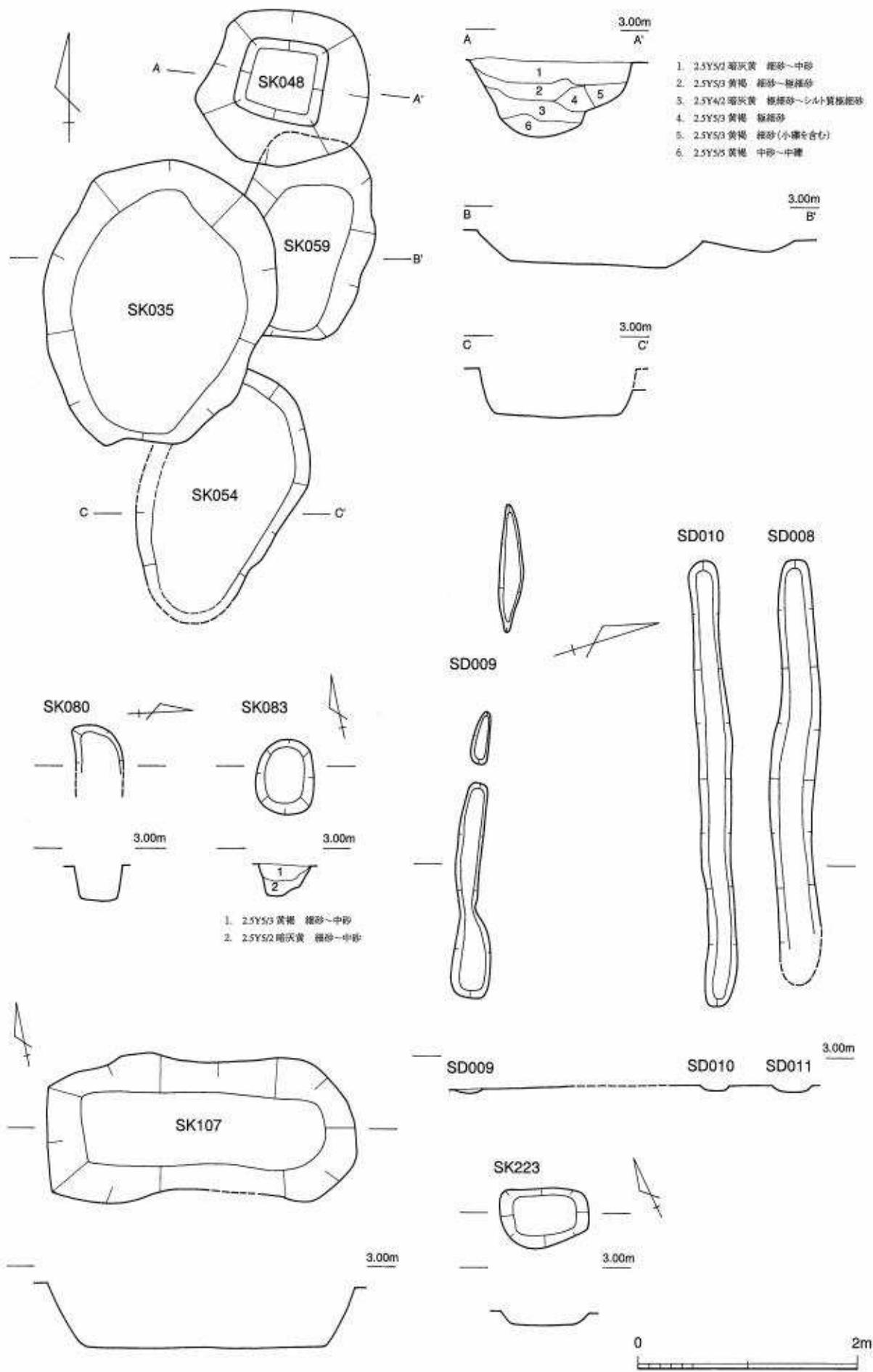
図版13

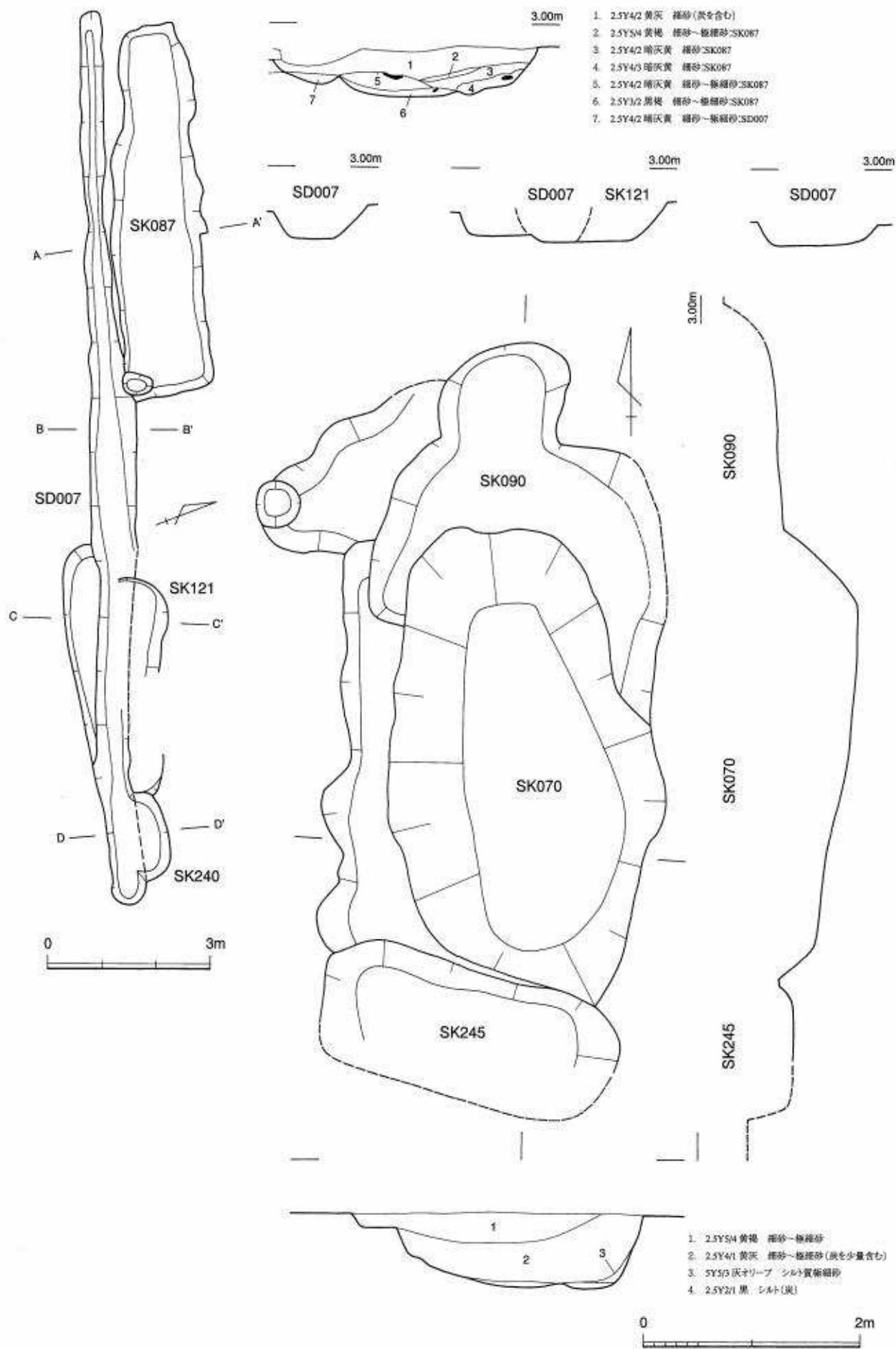
II区の遺構（2）



# 図版14

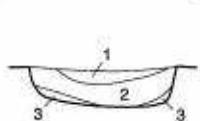
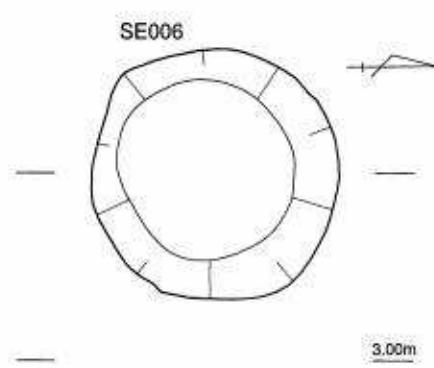
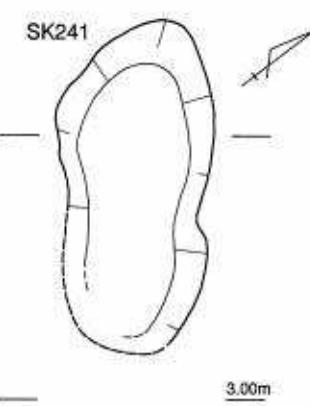
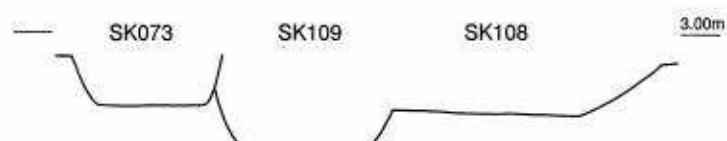
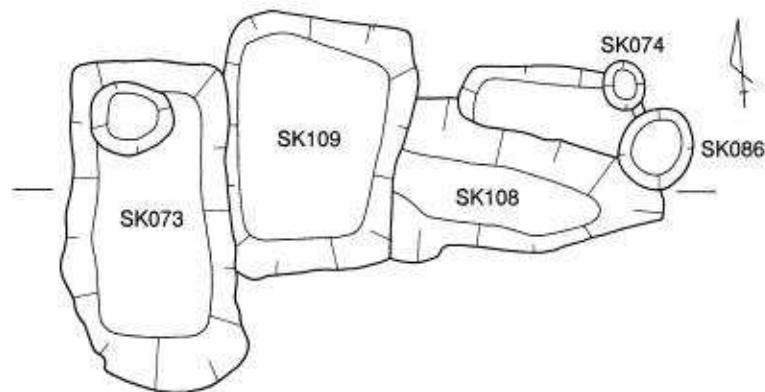
II区の遺構（3）、III区の遺構



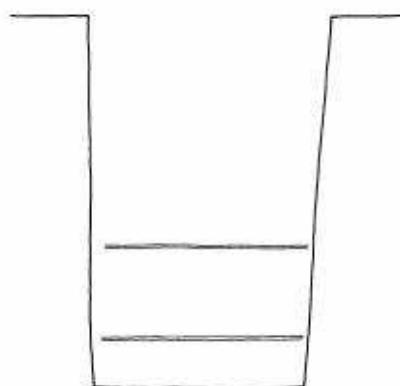
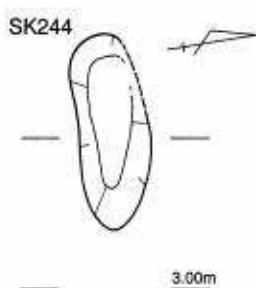


# 図版16

## IV区の遺構（2）



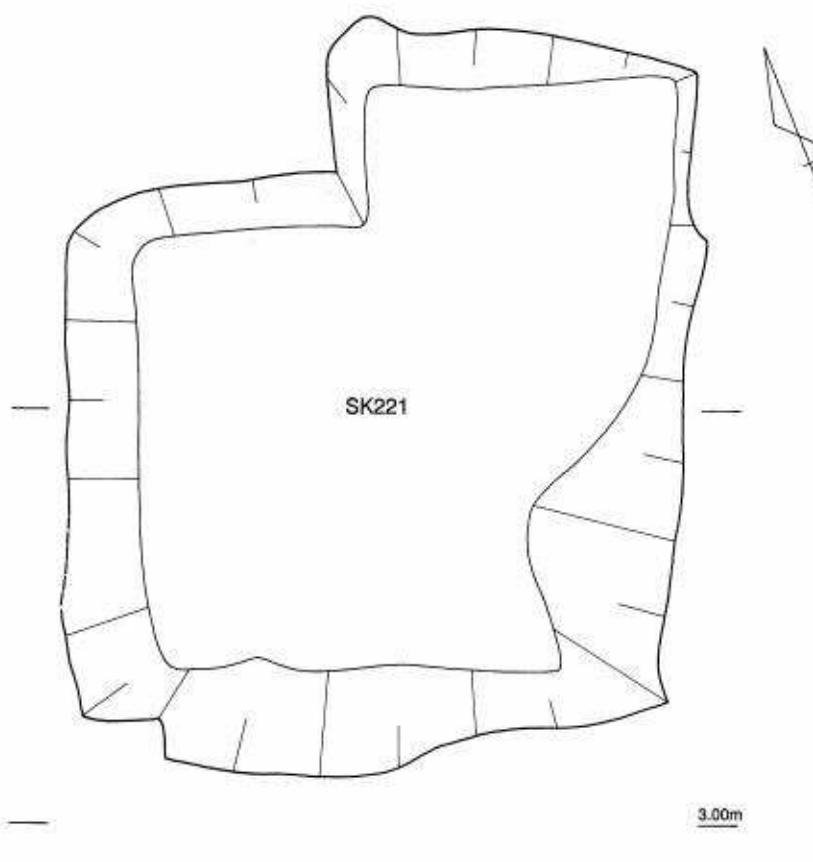
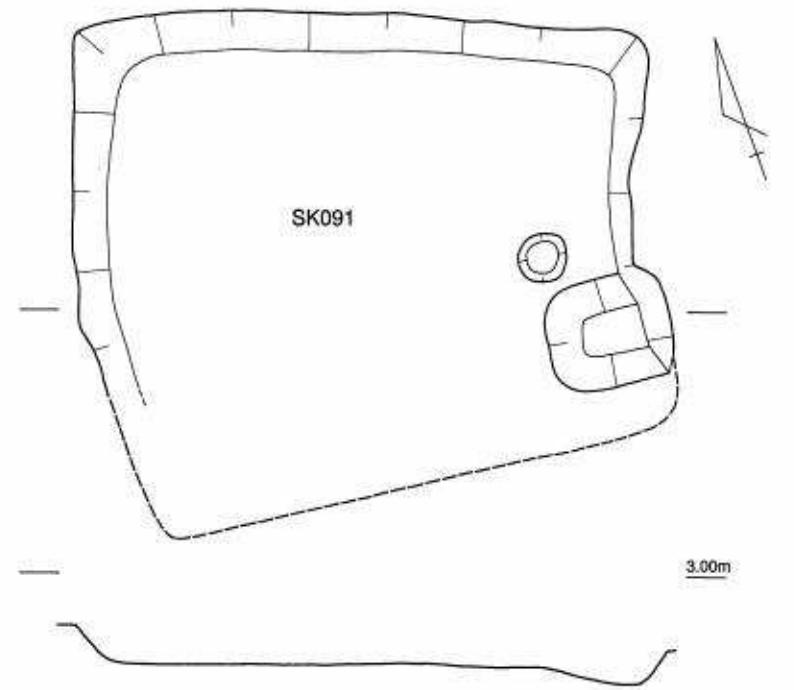
1. 2.5Y4/2 墓灰質 中砂  
2. 2.5Y4/1 黄灰 シルト質中砂  
3. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質中砂



1. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～中砂



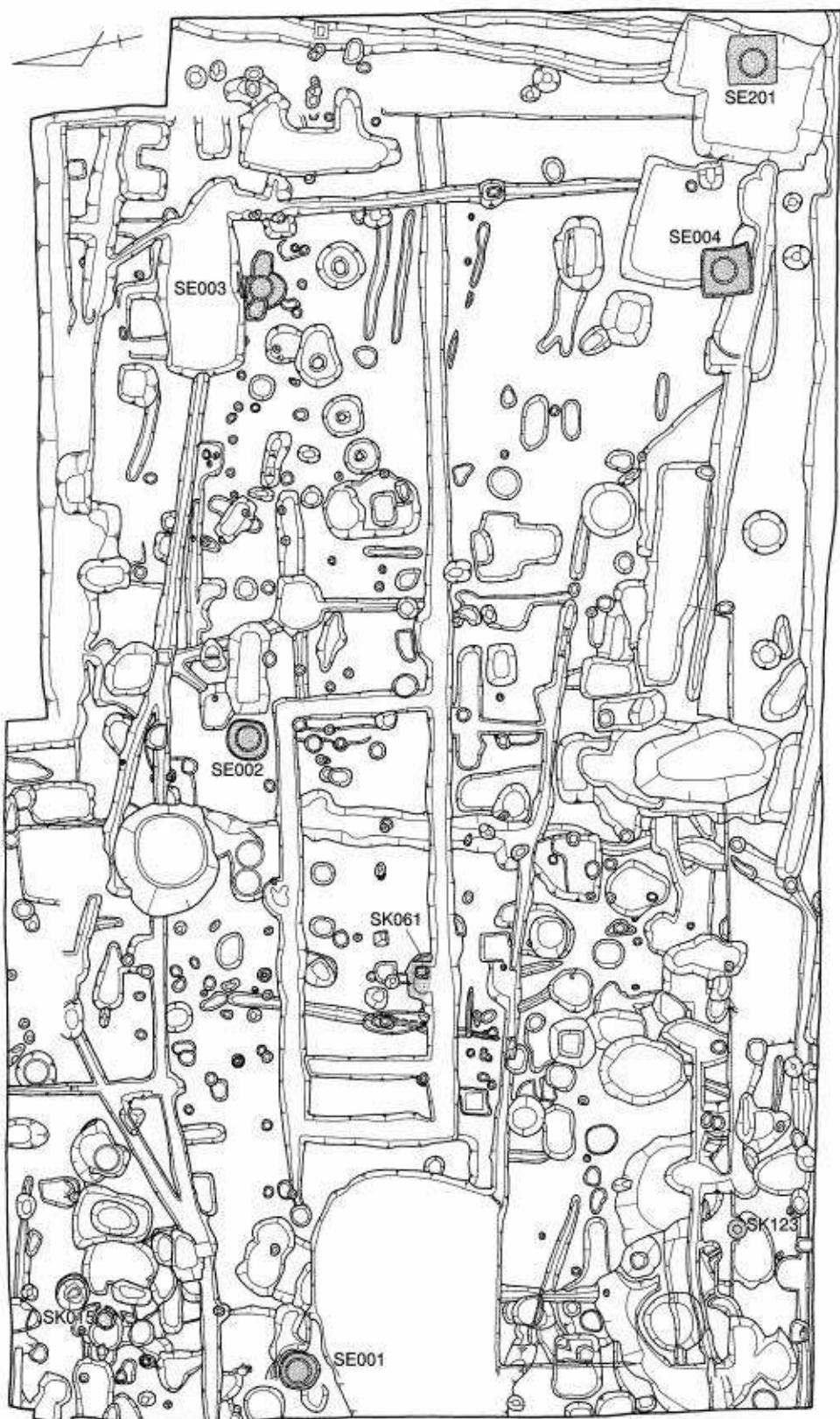
図版17  
IV区の遺構（3）



0 2m

# 図版18

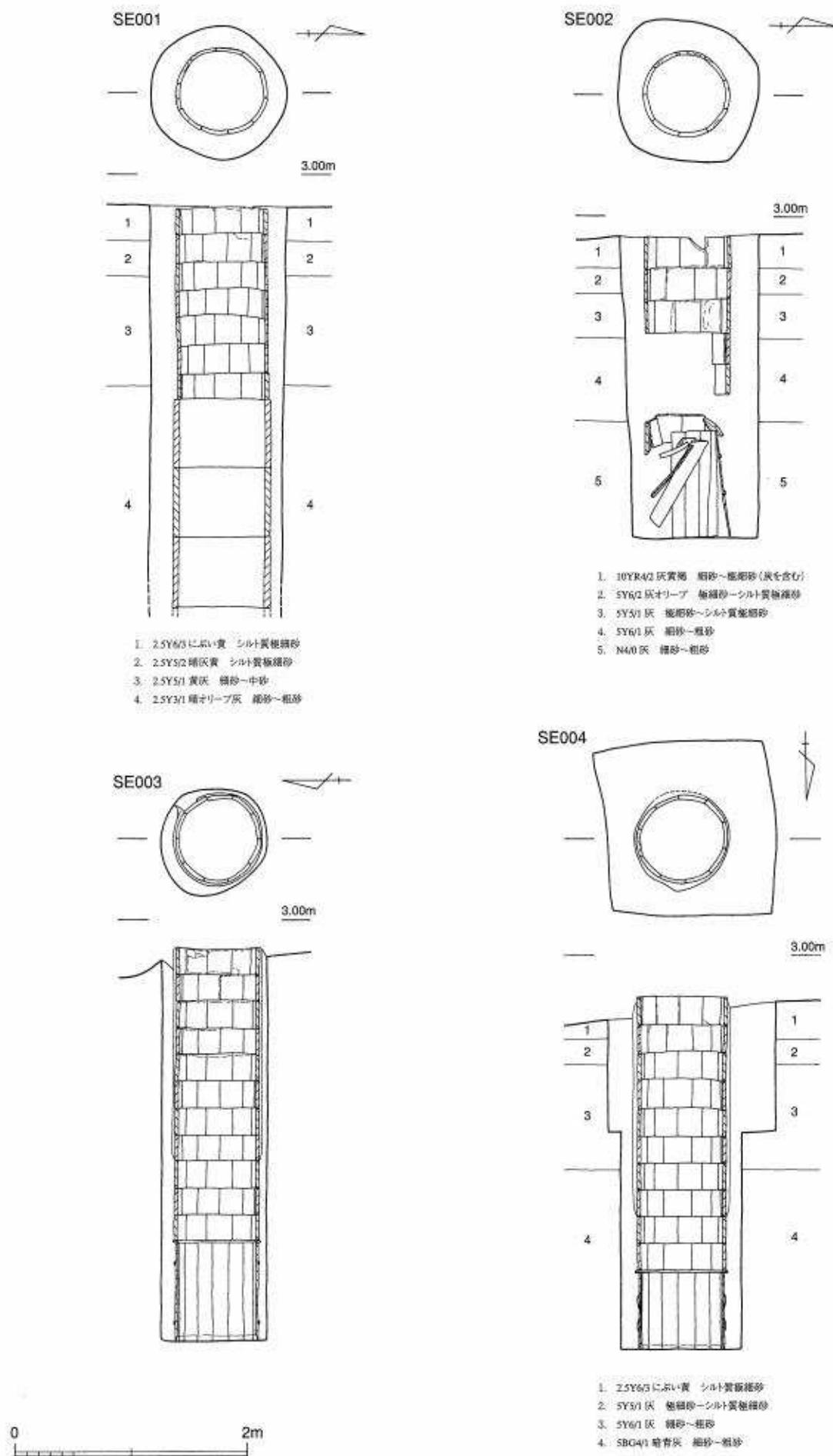
近代遺構配置図



0 100m

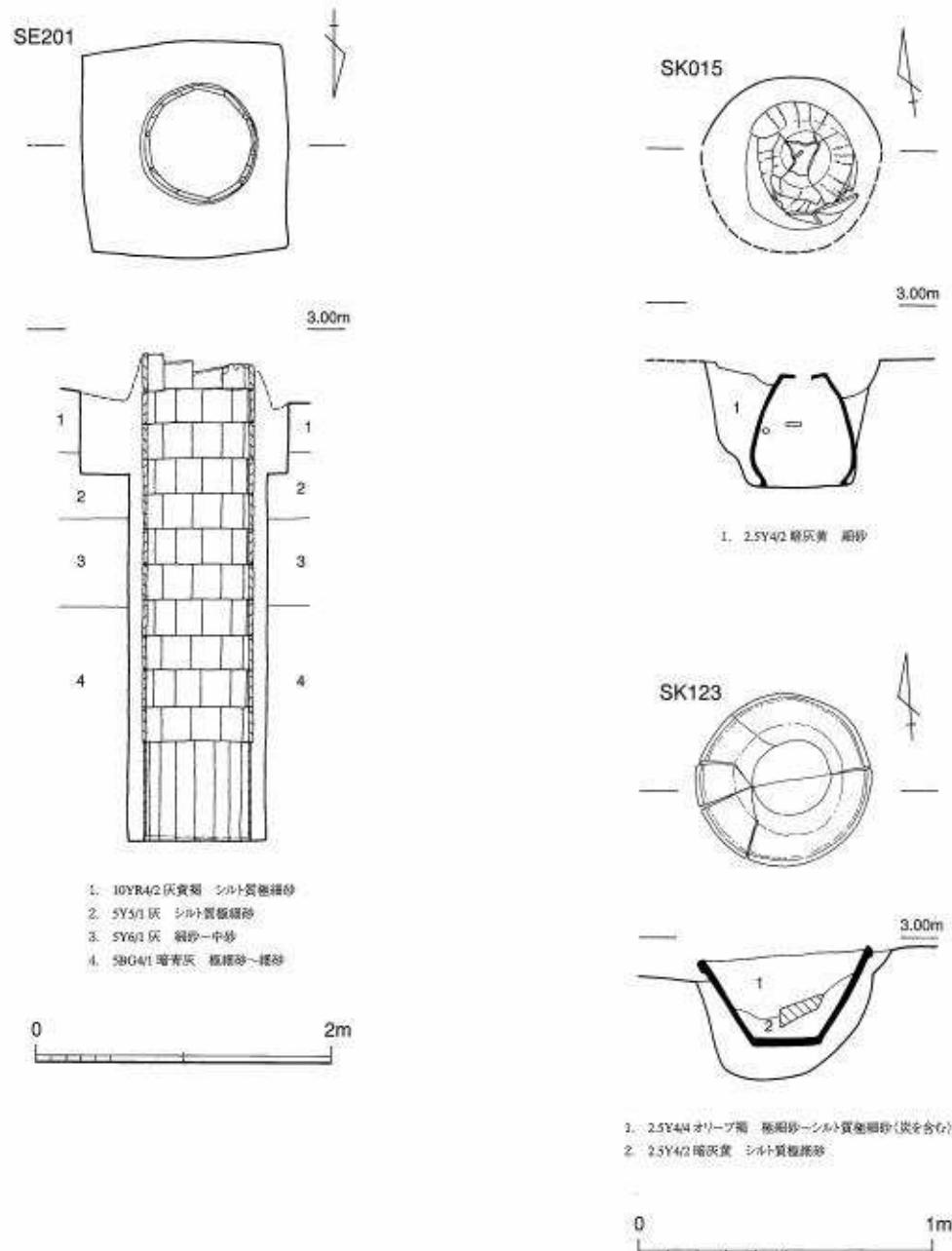
図版19

近代の遺構（1）



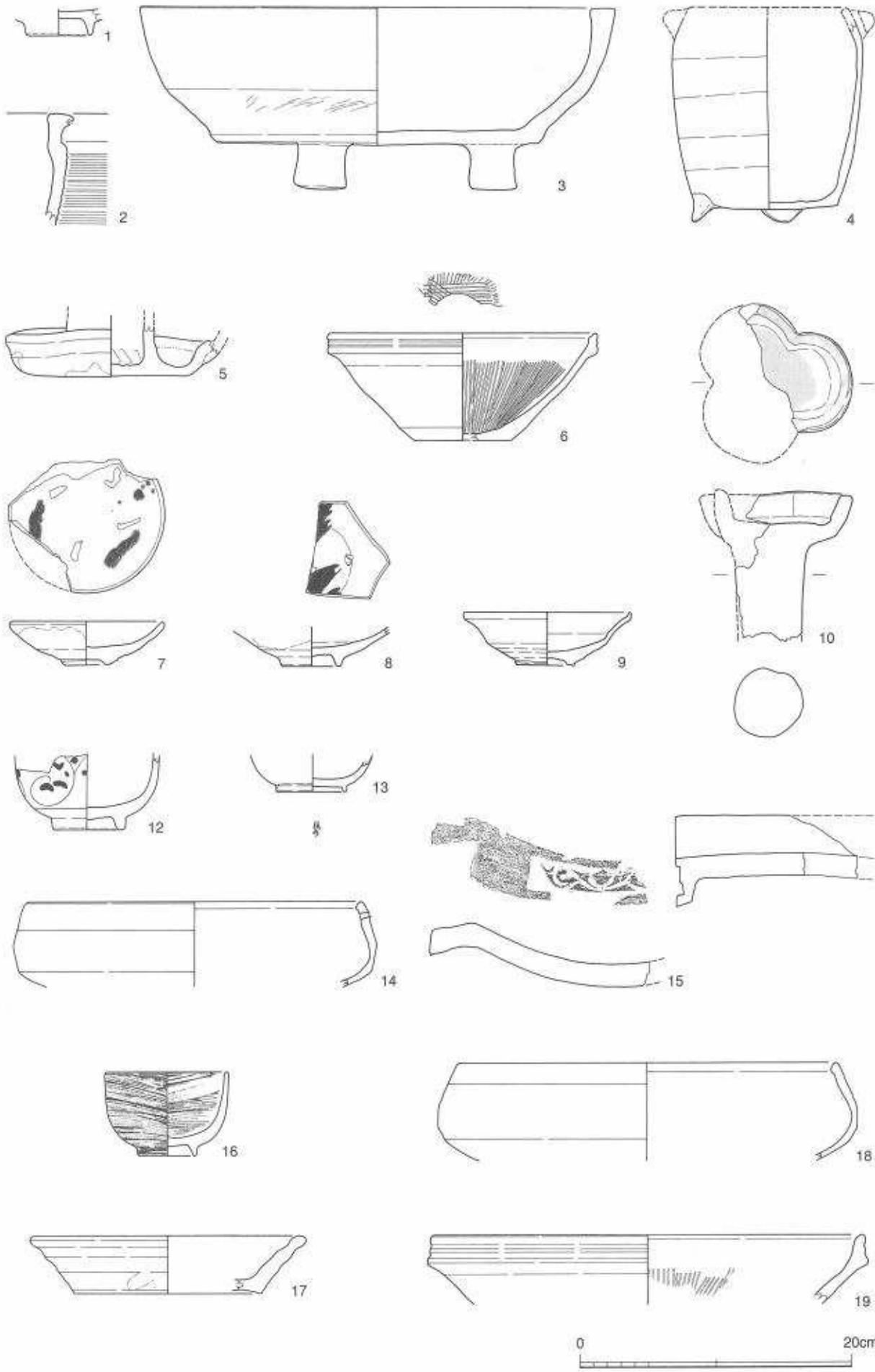
# 図版20

## 近代の遺構（2）



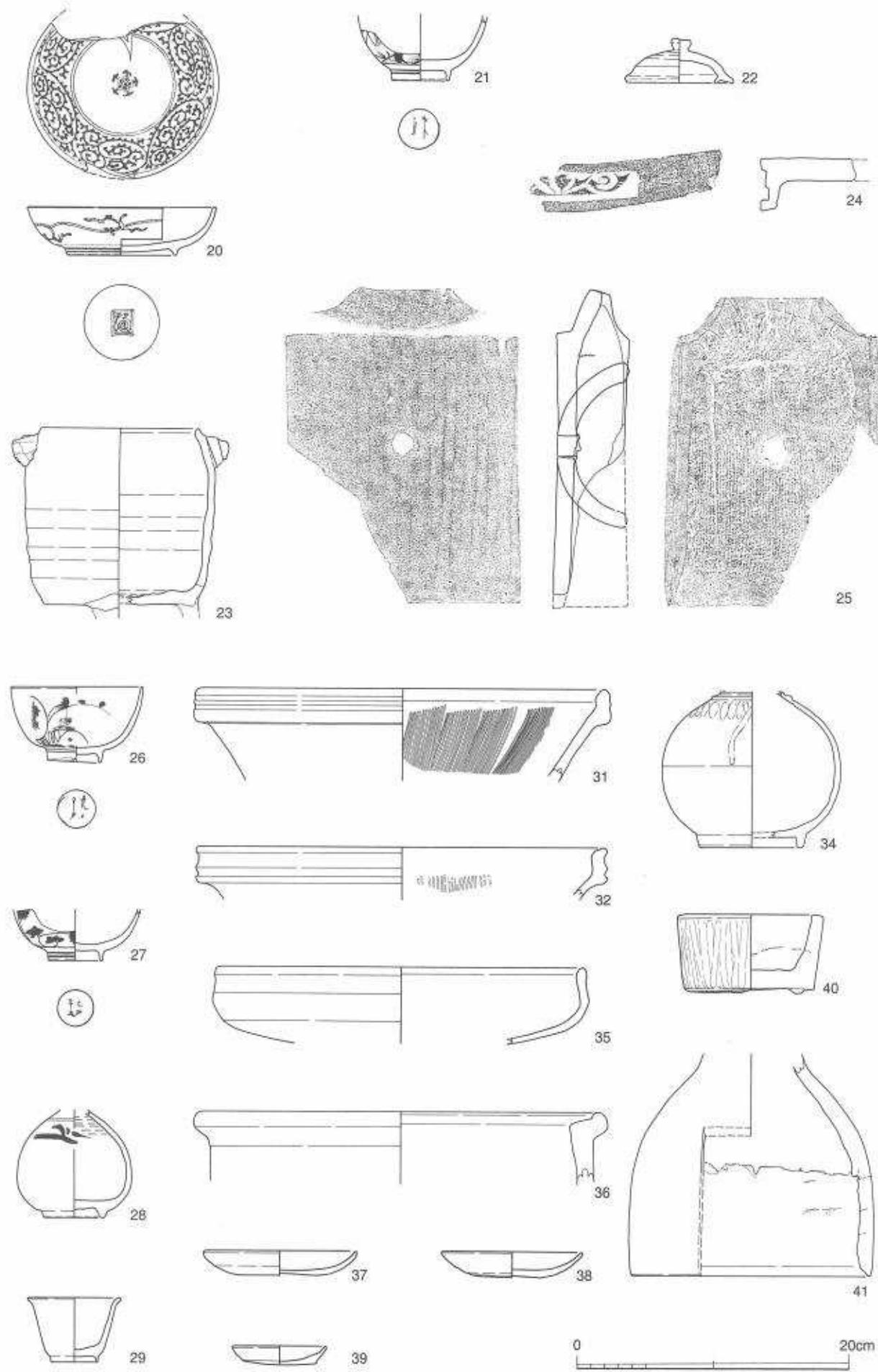
図版21

I区の遺物（1）



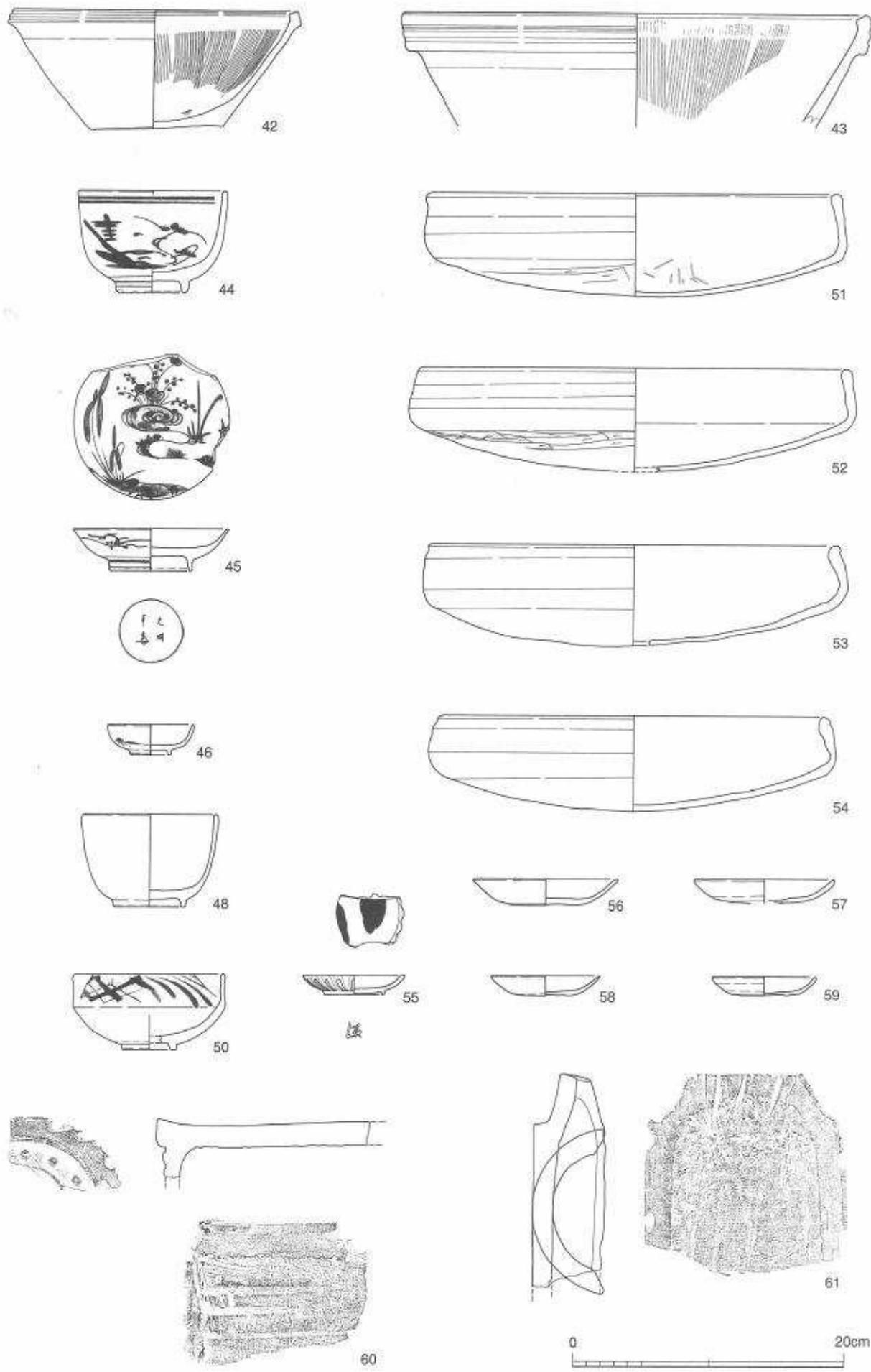
図版22

I区の遺物（2）



図版23

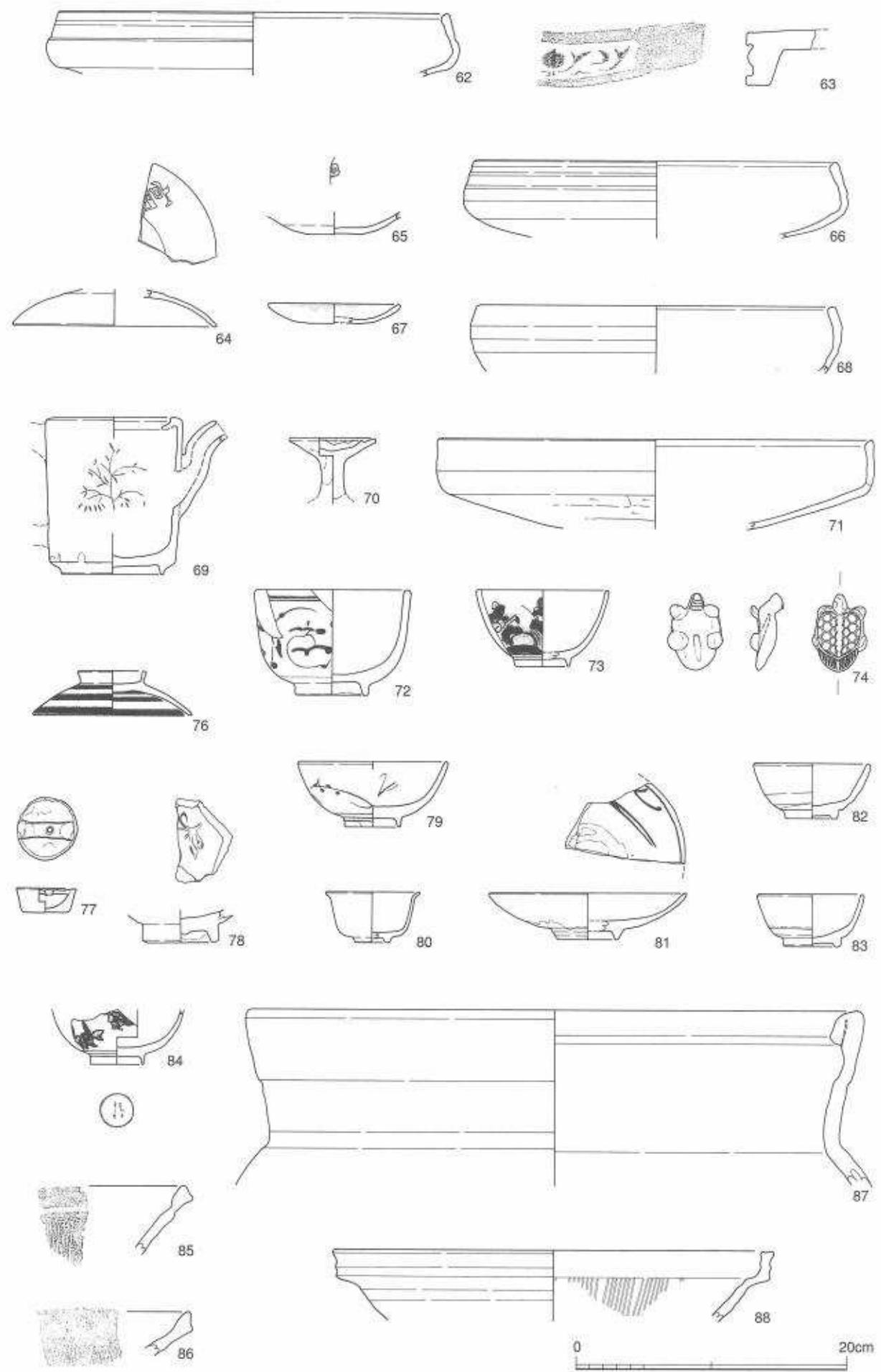
I区の遺物（3）



0 20cm

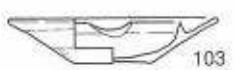
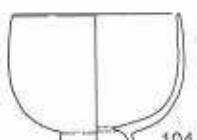
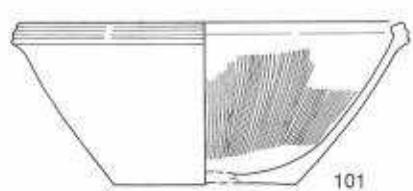
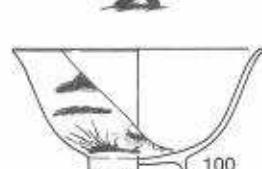
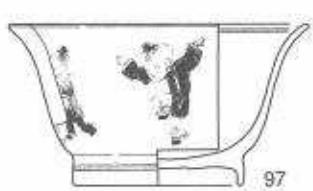
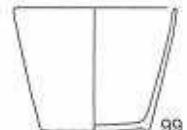
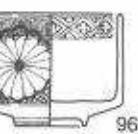
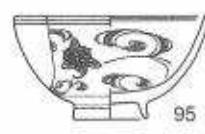
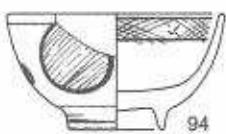
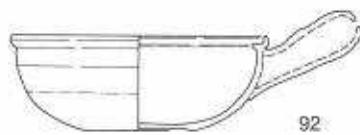
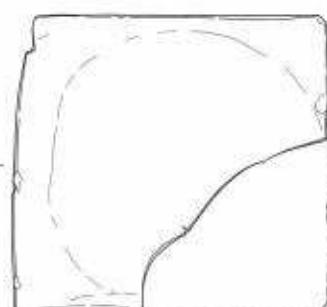
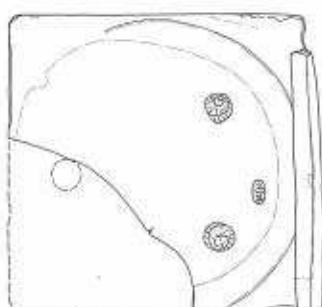
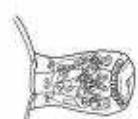
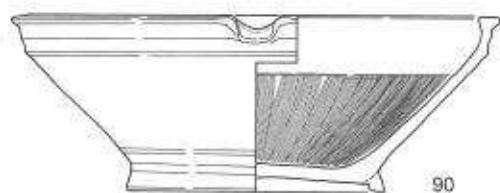
図版24

I区の遺物(4)



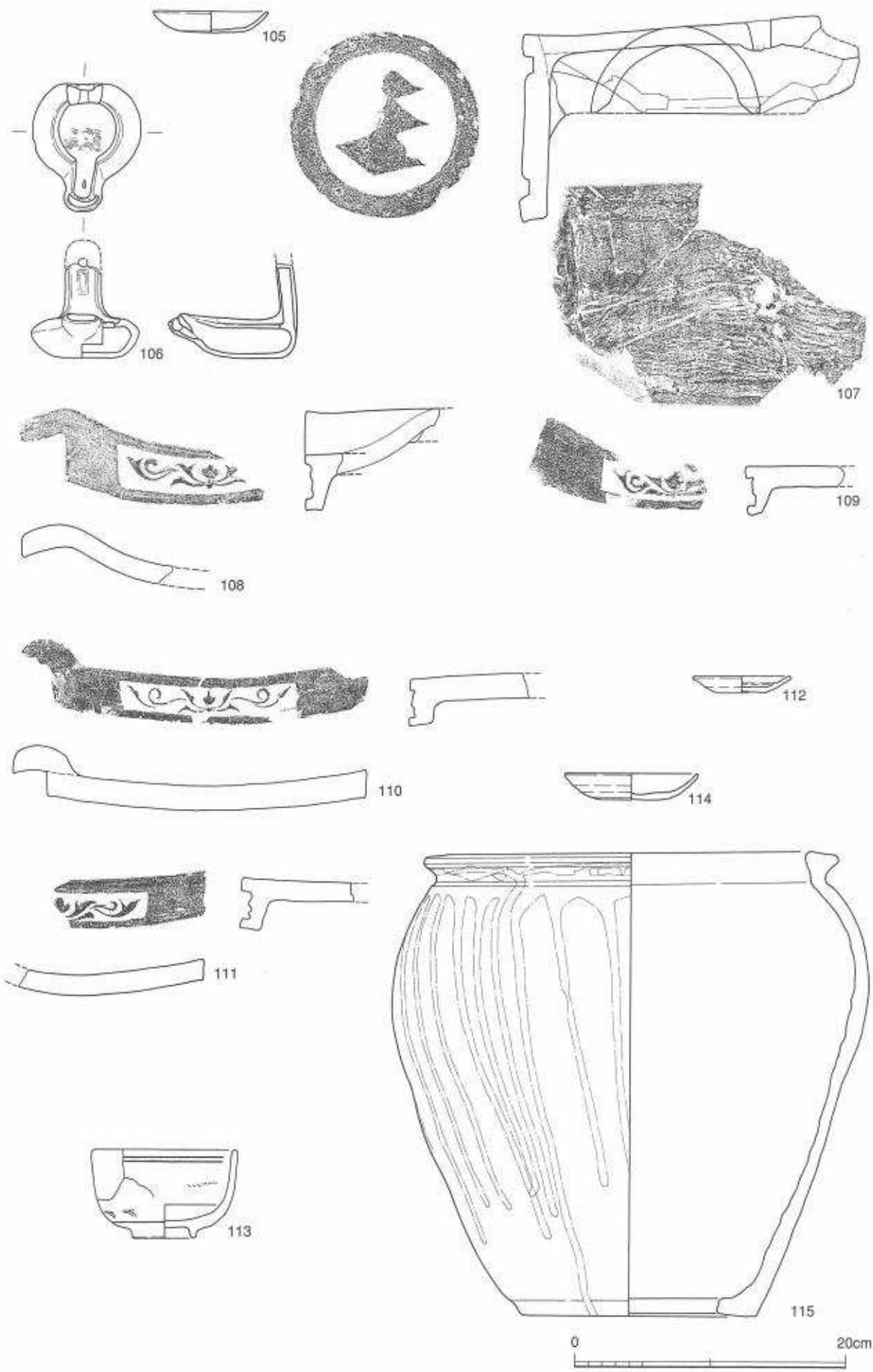
## 図版25

I区の遺物（5）、II区の遺物（1）

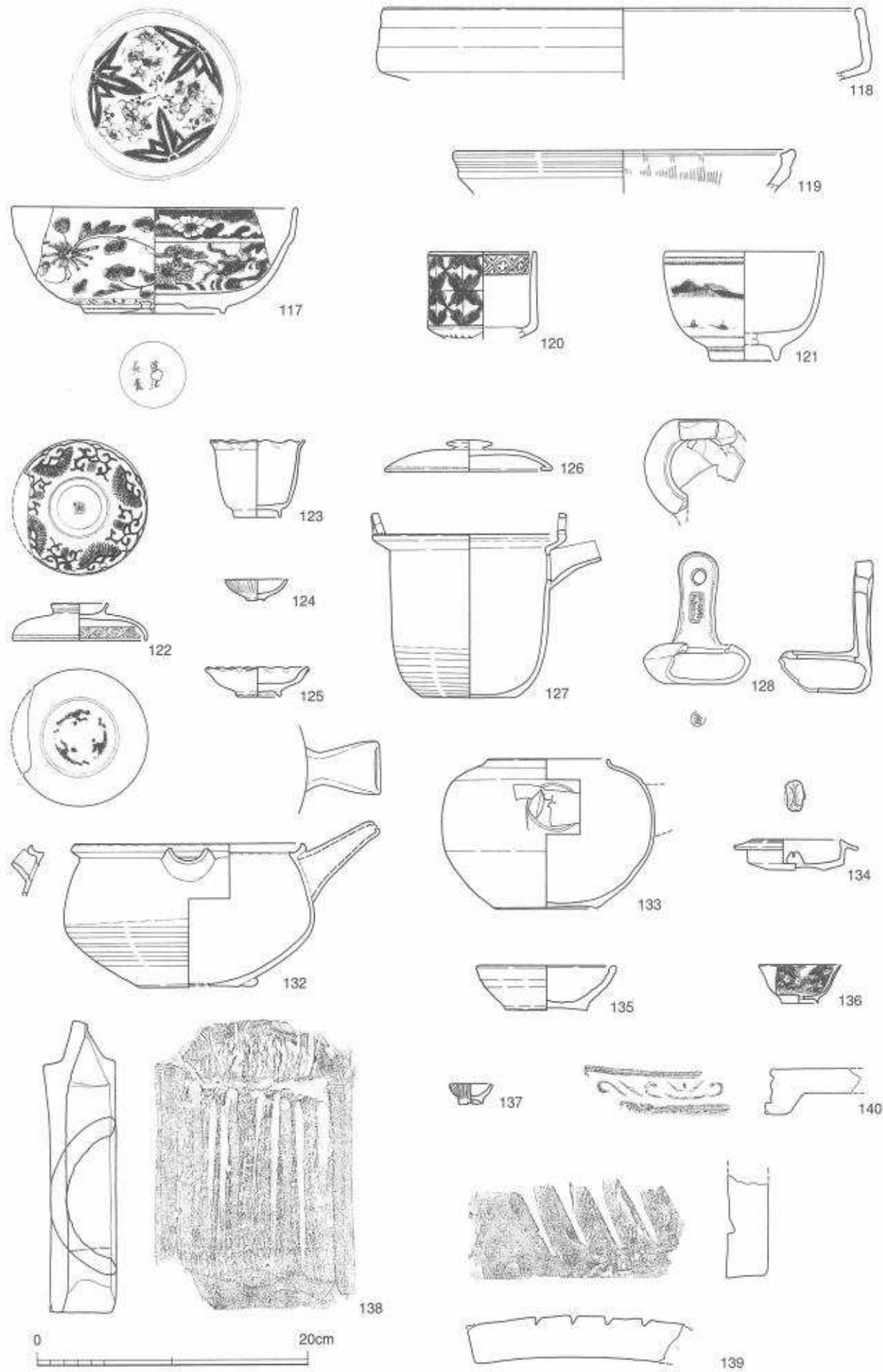


図版26

II区の遺物（2）

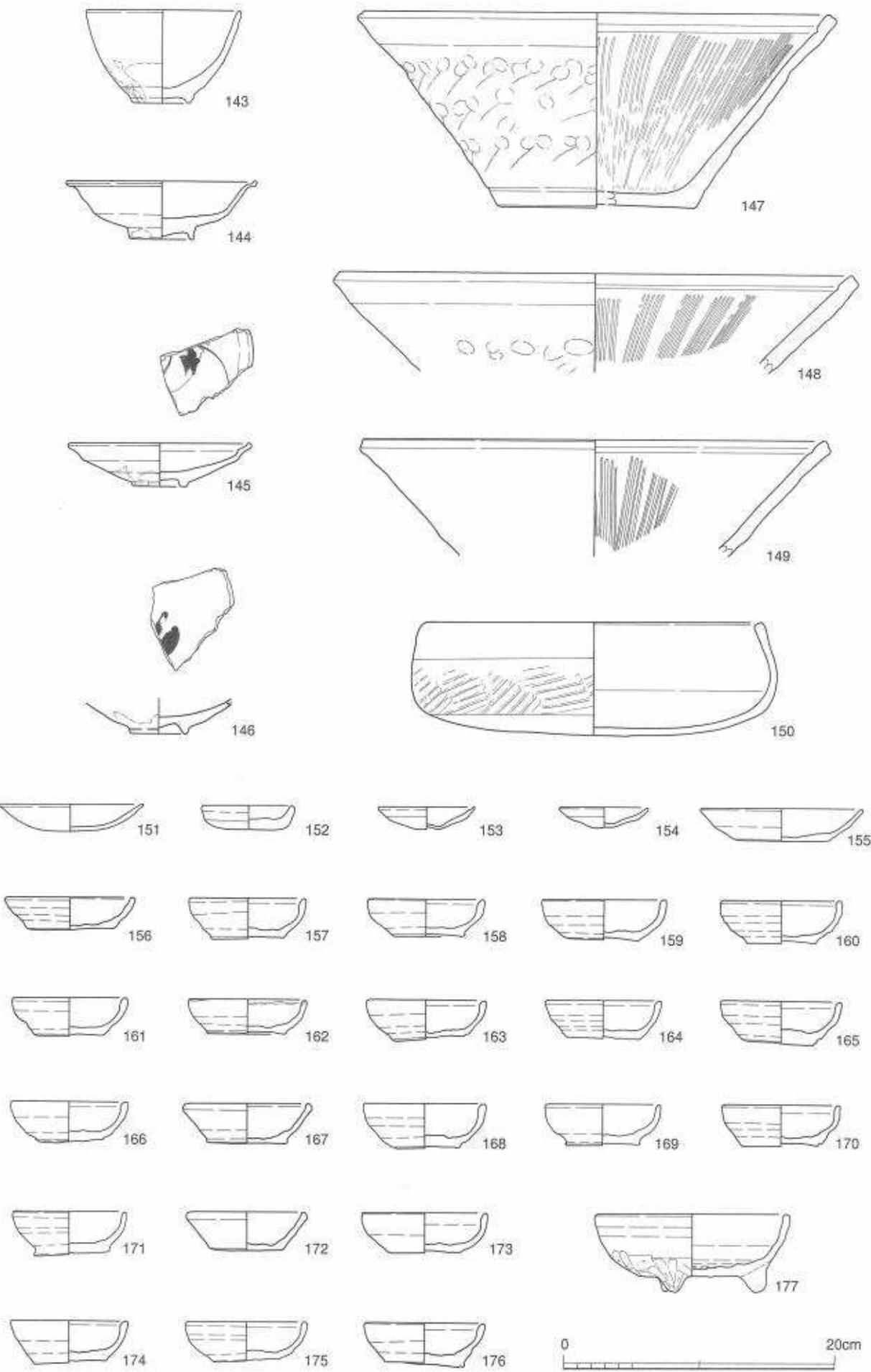


II区の遺物（3）、III区の遺物、IV区の遺物（1）

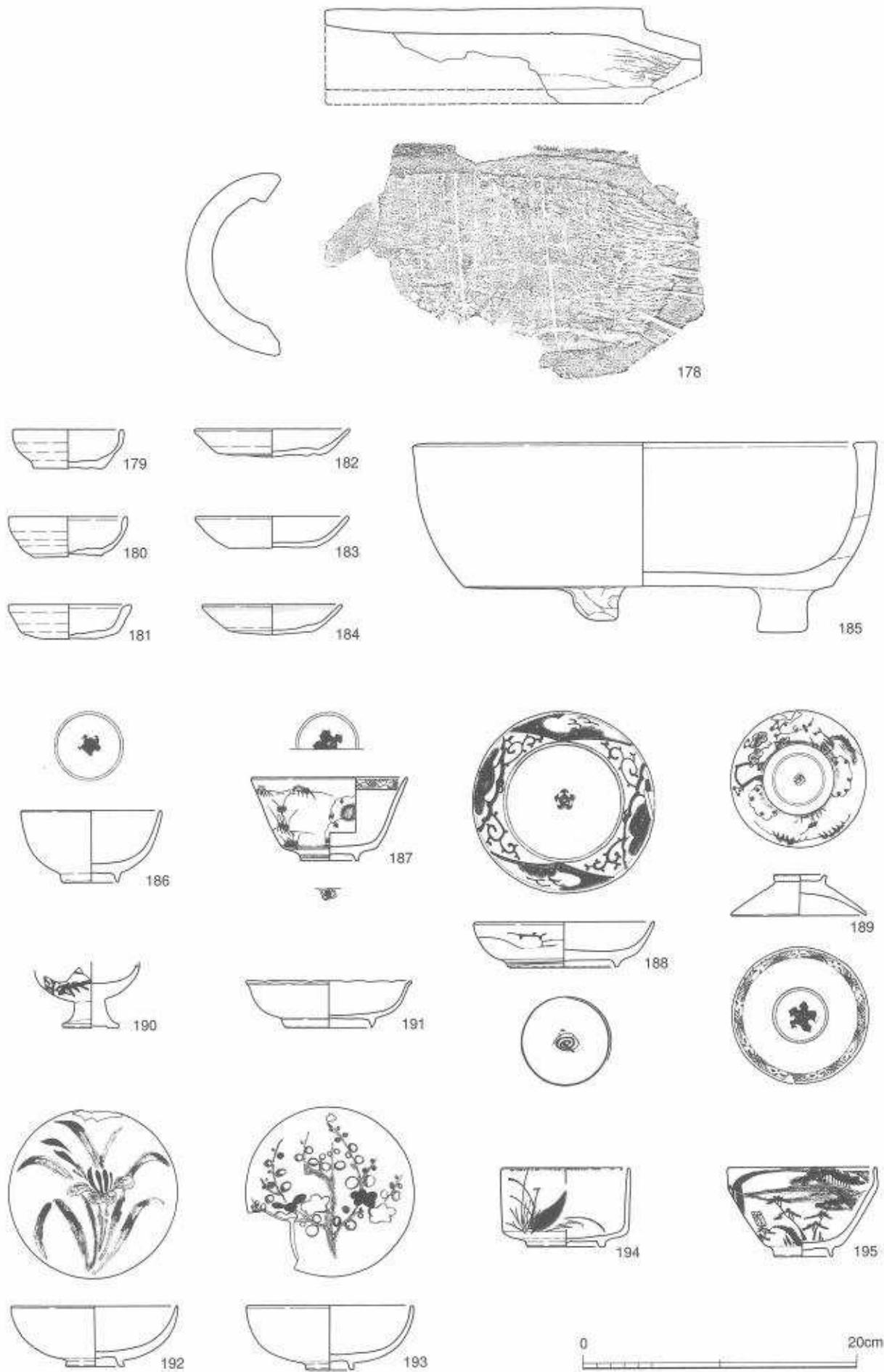


図版28

IV区の遺物（2）

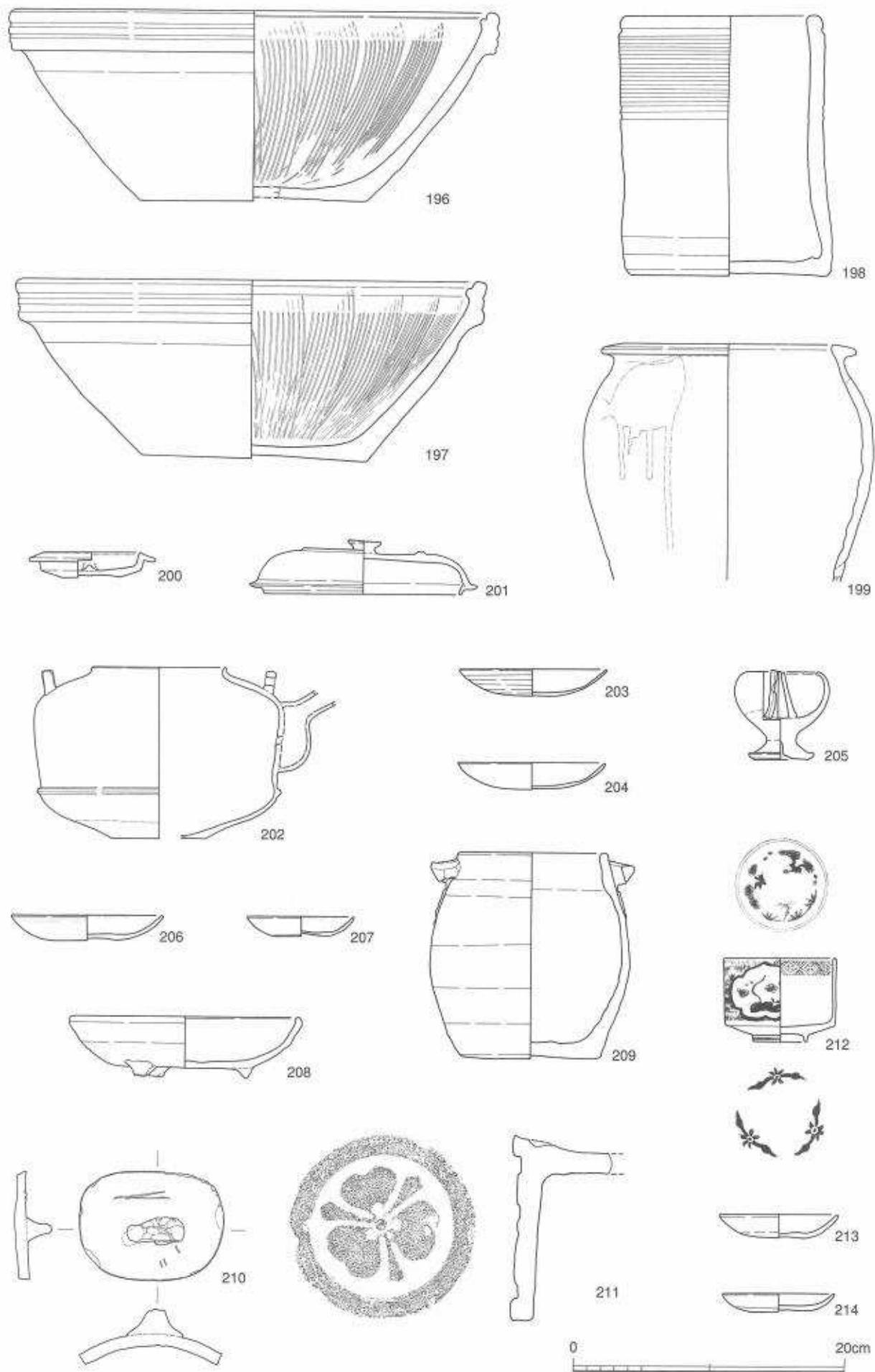


図版29  
IV区の遺物（3）



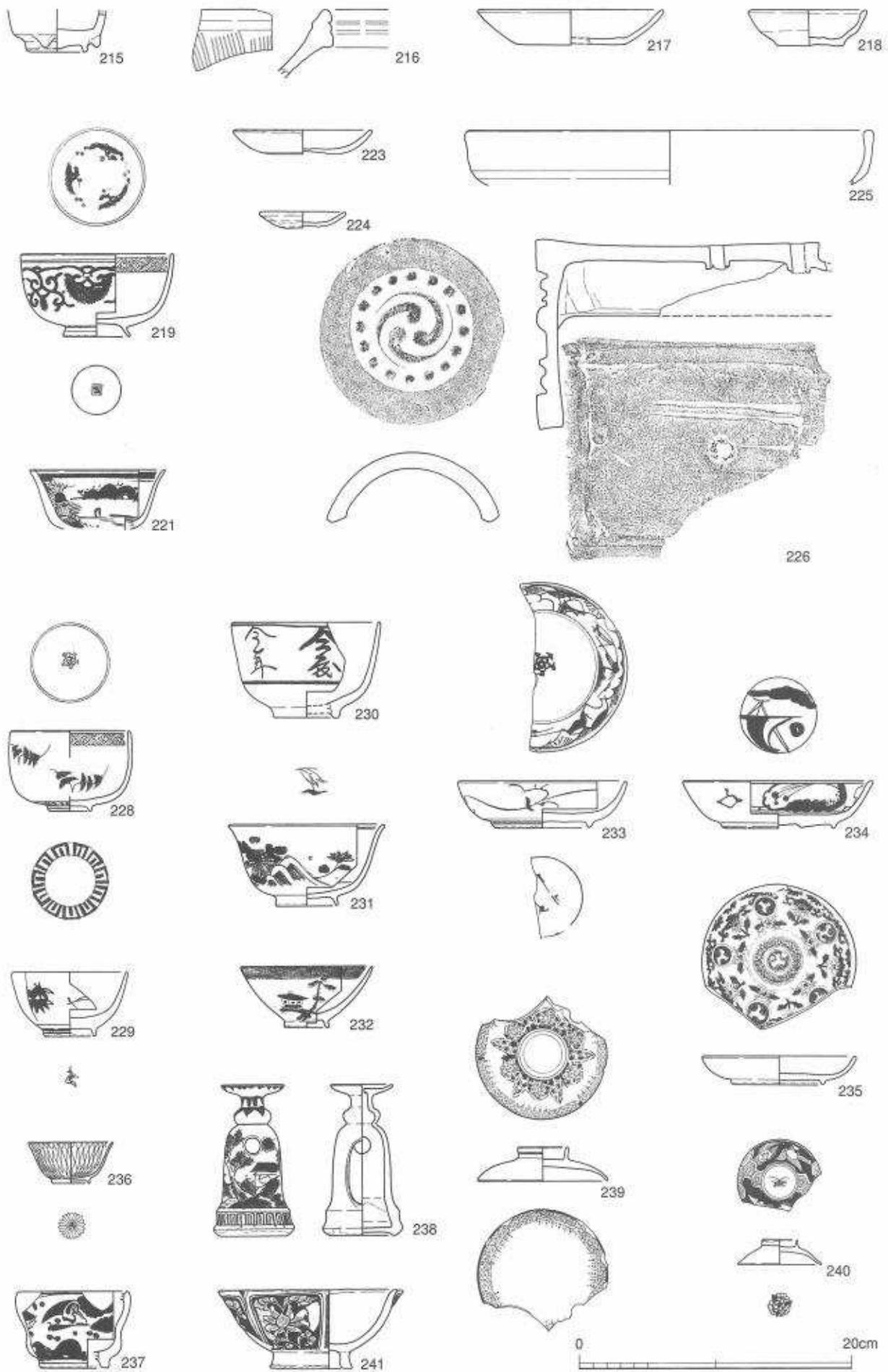
図版30

IV区の遺物(4)



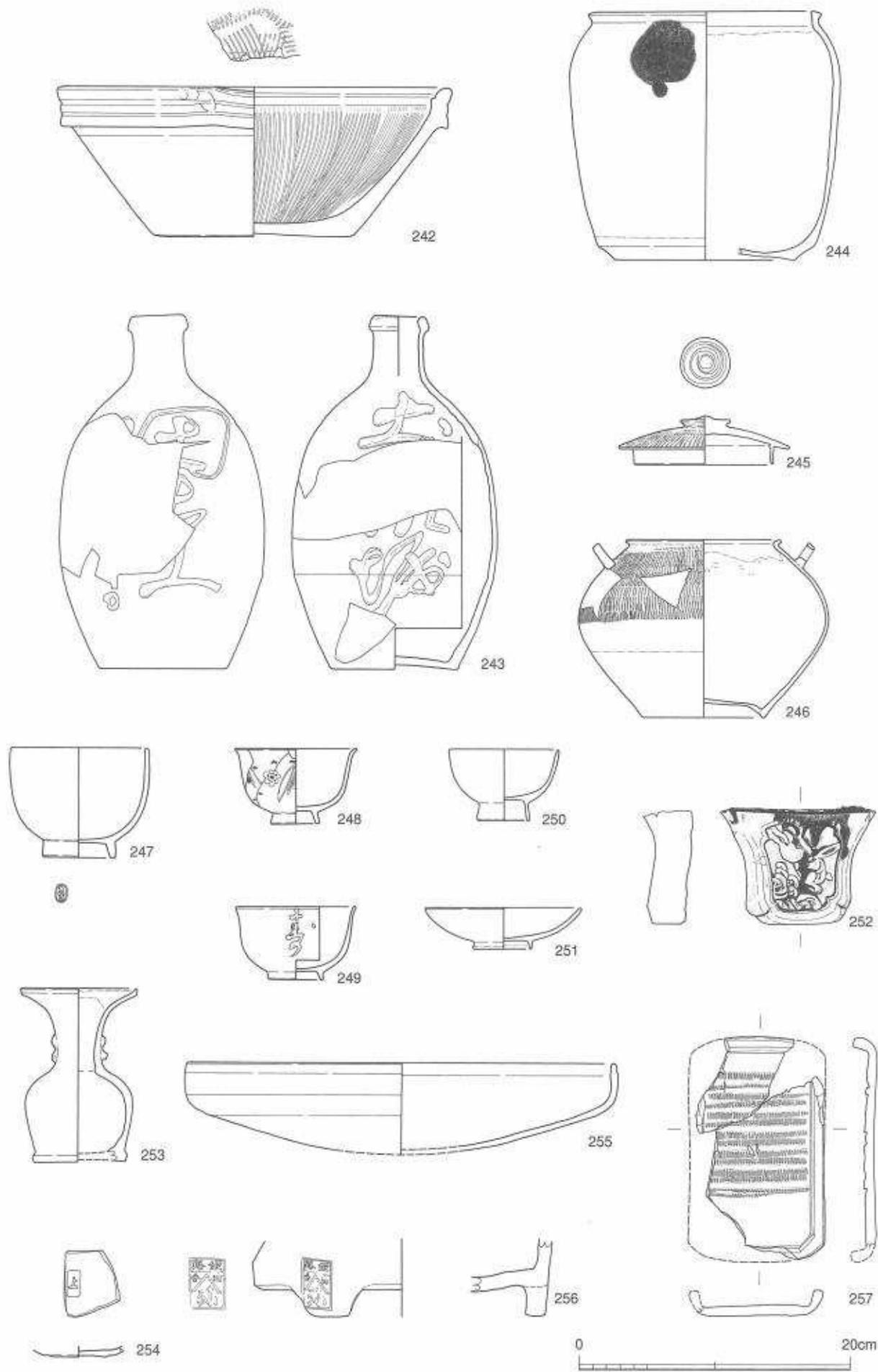
図版31

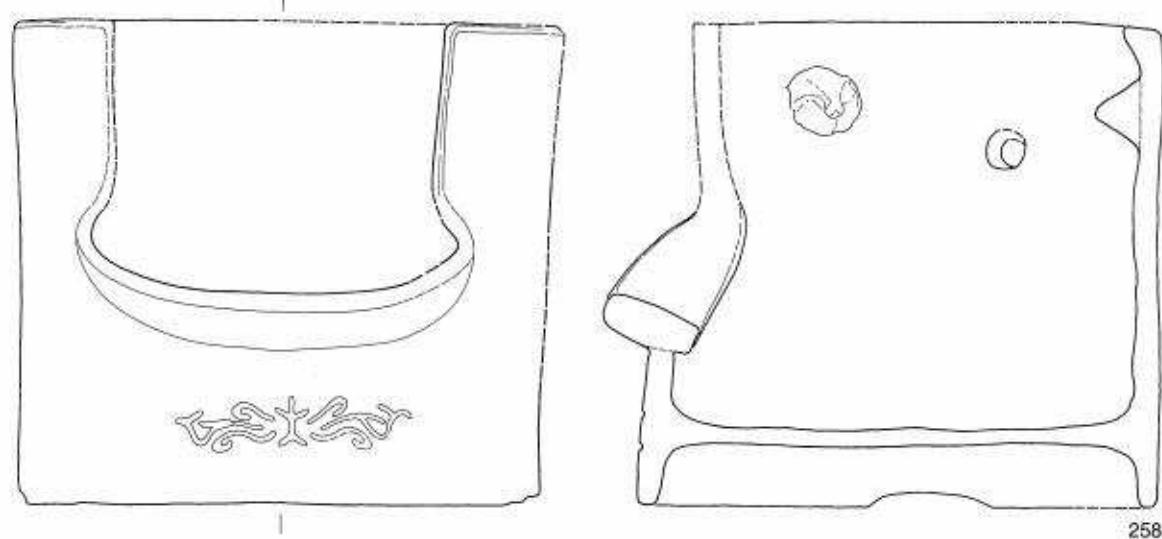
IV区の遺物（5）、VII区の遺物（1）



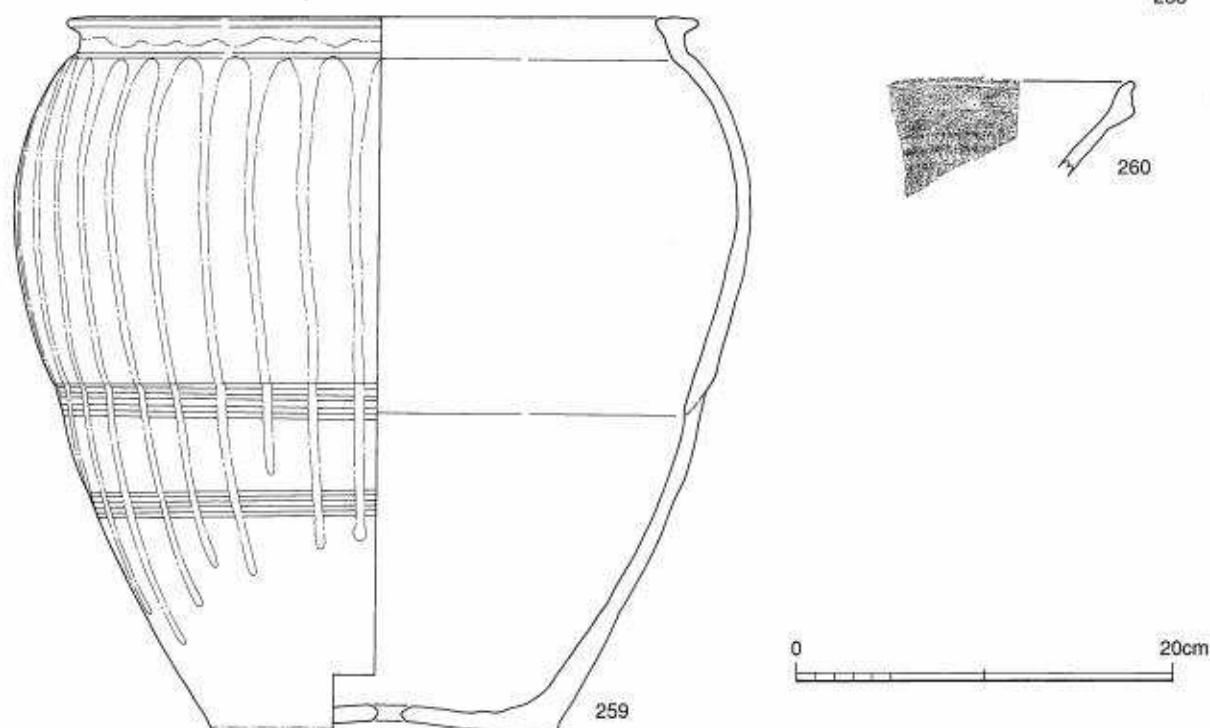
図版32

IV区の遺物（6）

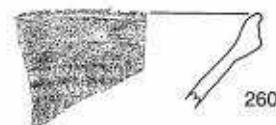




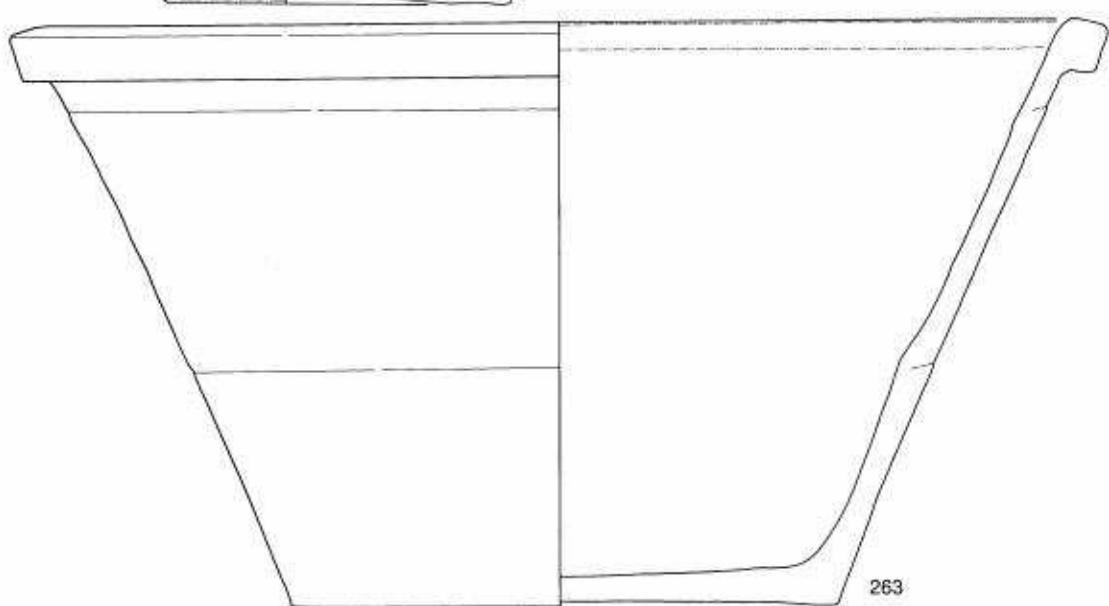
258



259



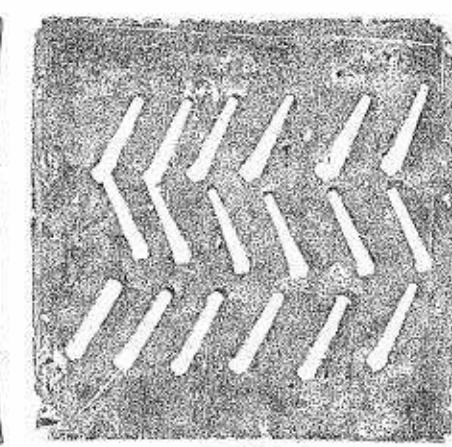
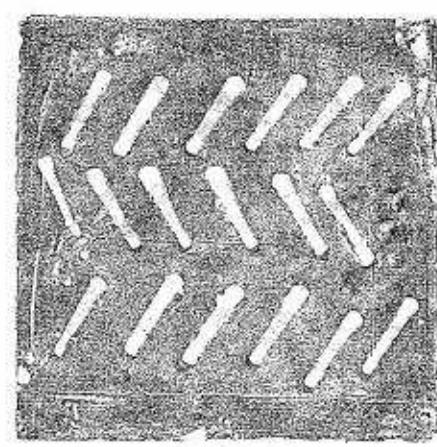
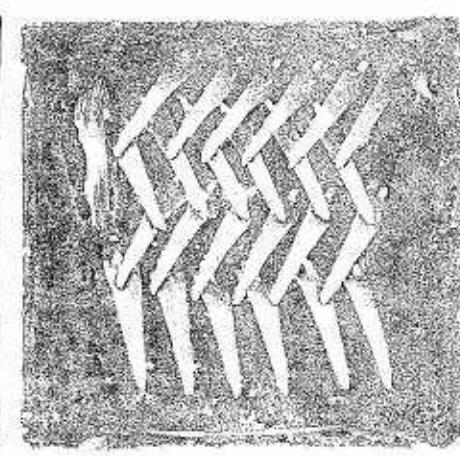
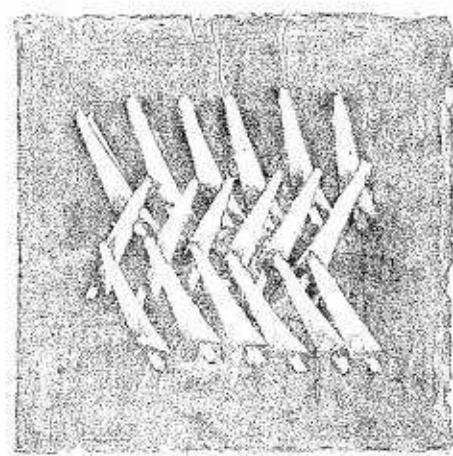
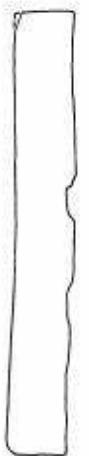
260



263

図版34

近代の遺物（2）



275



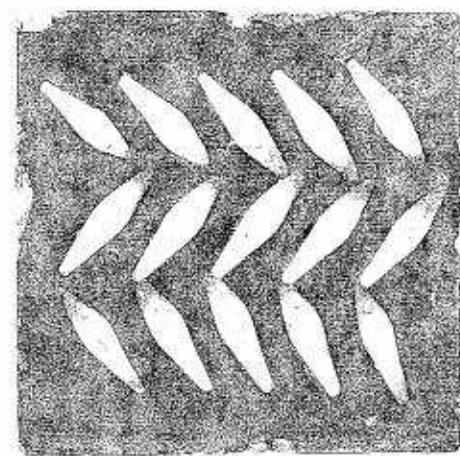
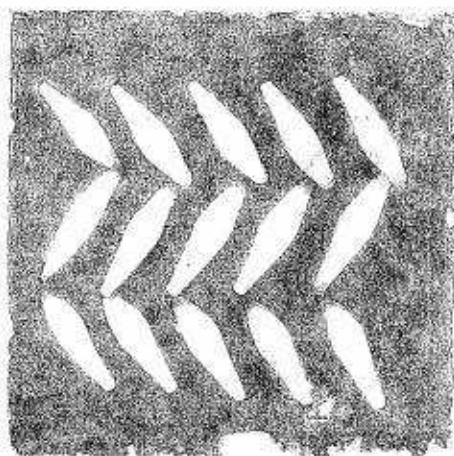
276



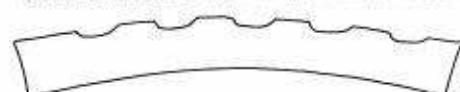
277

0

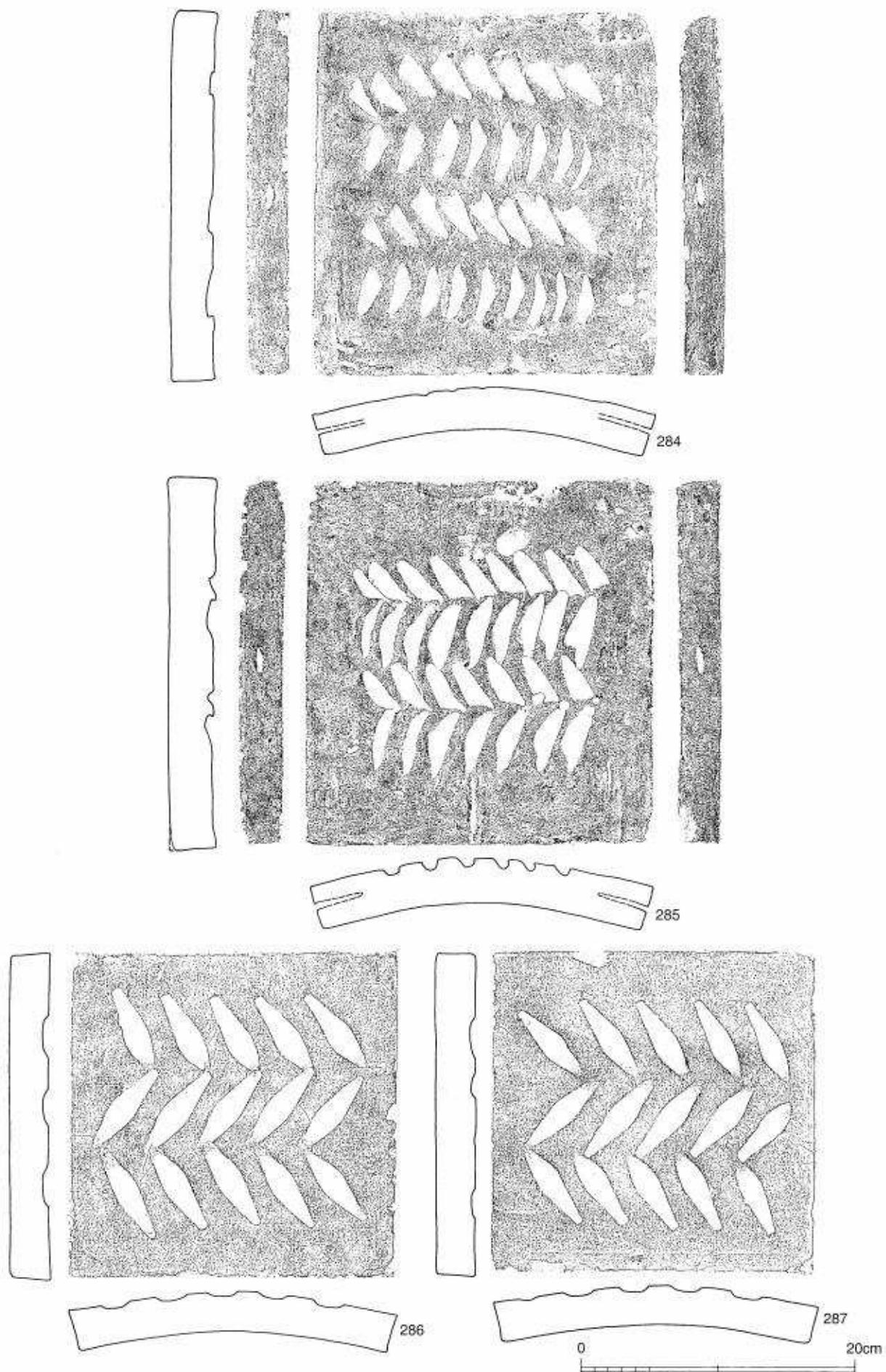
20cm



280

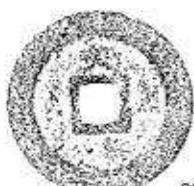


281

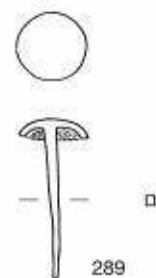


# 図版36

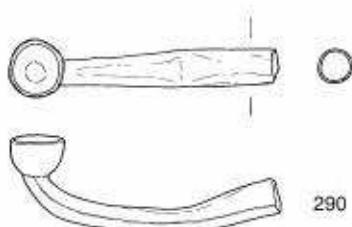
金属製品、包含層の遺物、刻印



288



289



290



291



13



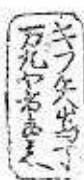
55



65



91



128



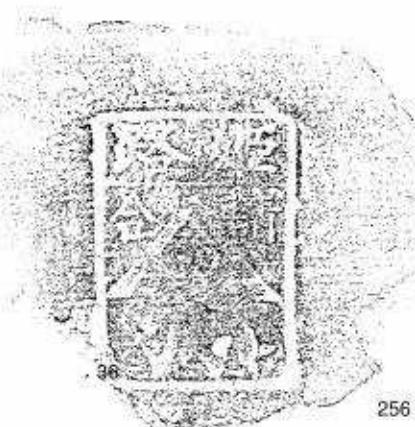
247



128



254



256





20



21



26



27



45



84



94



95



96



117



122



187



188



189



219



229



233

0 5cm

# 写真図版

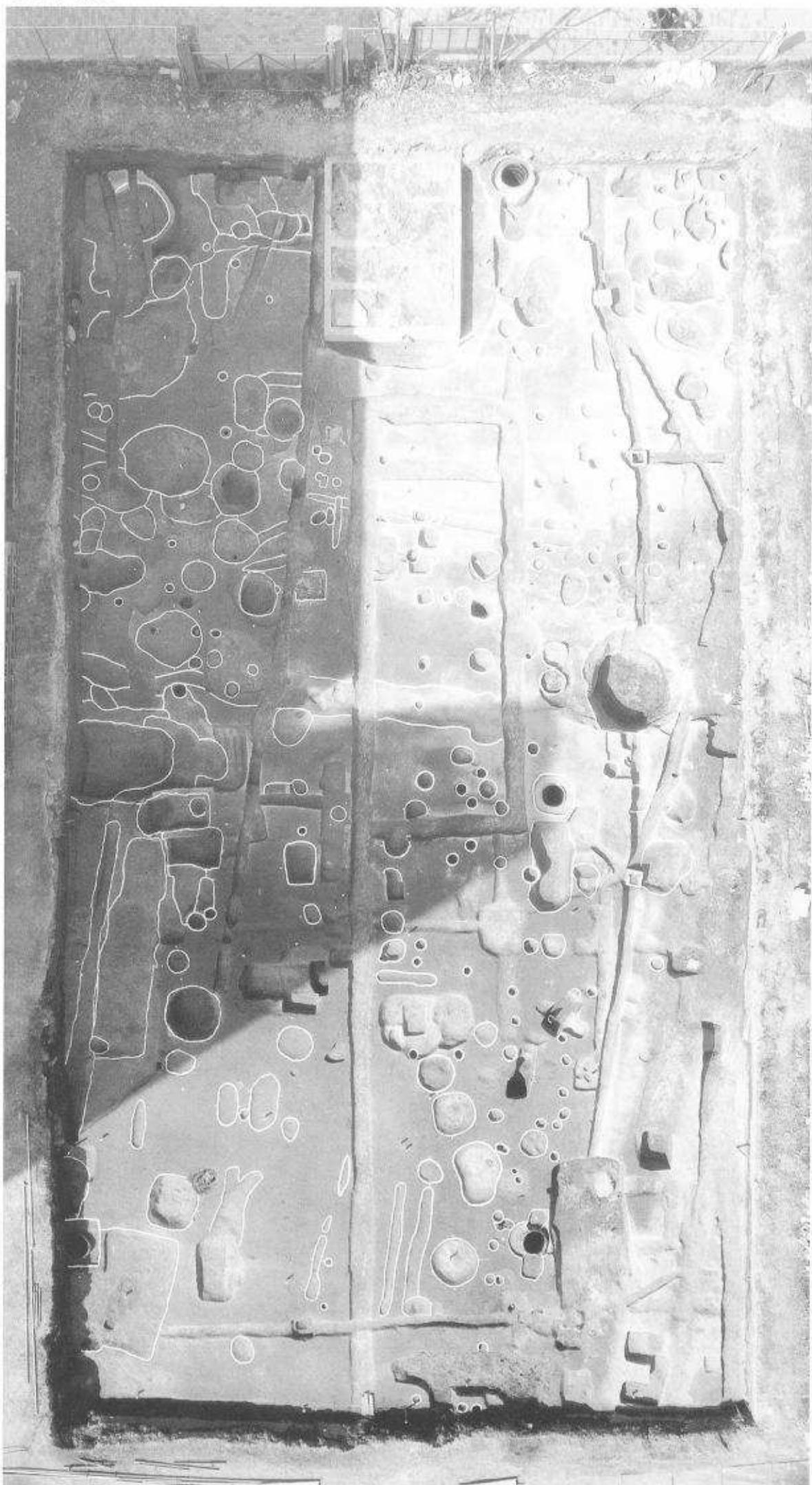


調査地遠景  
(南西から)



調査地遠景  
(南から)

## 写真図版 2



第1次全面調査全景  
(上から)



第1次全面調査全景  
(西から)

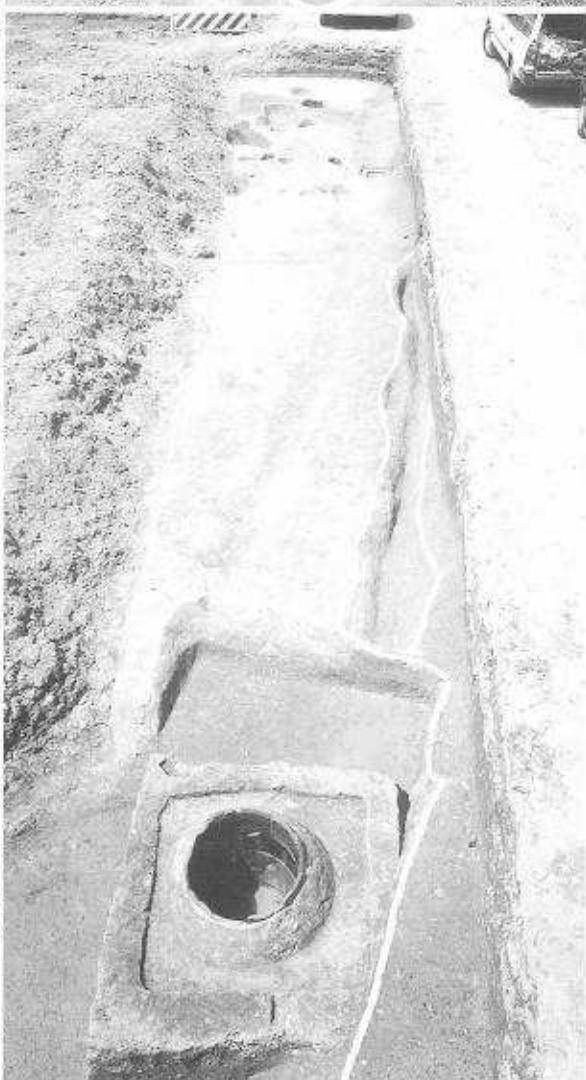


第1次全面調査全景 (東から)

## 写真図版 4



左：第2次全面  
調査北区  
(東から)  
右：第2次全面  
調査西区  
(北から)



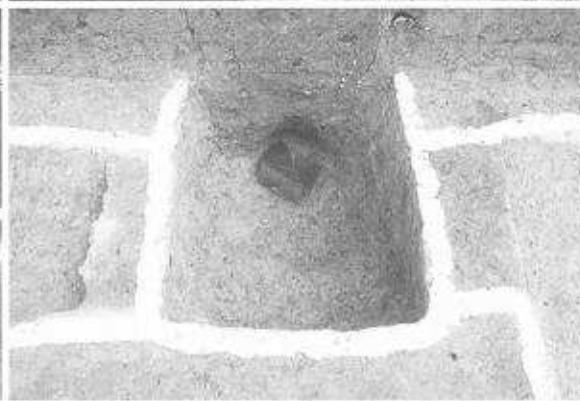
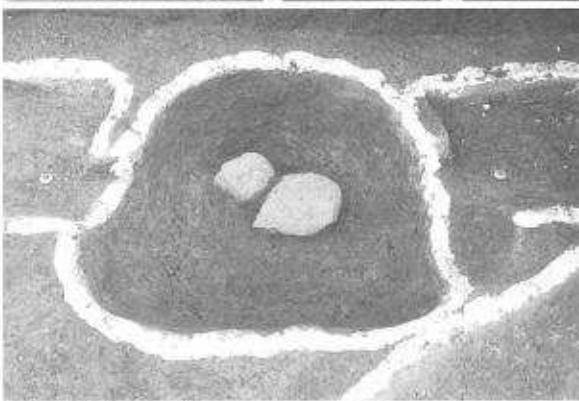
左：第2次全面  
調査南区  
(西から)  
右：第2次全面  
調査南区  
(南から)



左: SD 203  
(西から)  
右: SD 205  
(東から)



左: SA 201  
—SK 225  
(北から)  
右: SA 201  
—SK 229  
(北から)



左: SA 201  
—SK 245  
(北から)  
右: SA 201  
—SK 233  
(北から)



SD 202  
(南から)



写真図版 6



左：I区  
SK010  
(東から)

右：I区  
SK010  
遺物出土状況  
(北から)



I区SK005  
019  
(北から)



I区SK018  
(東から)

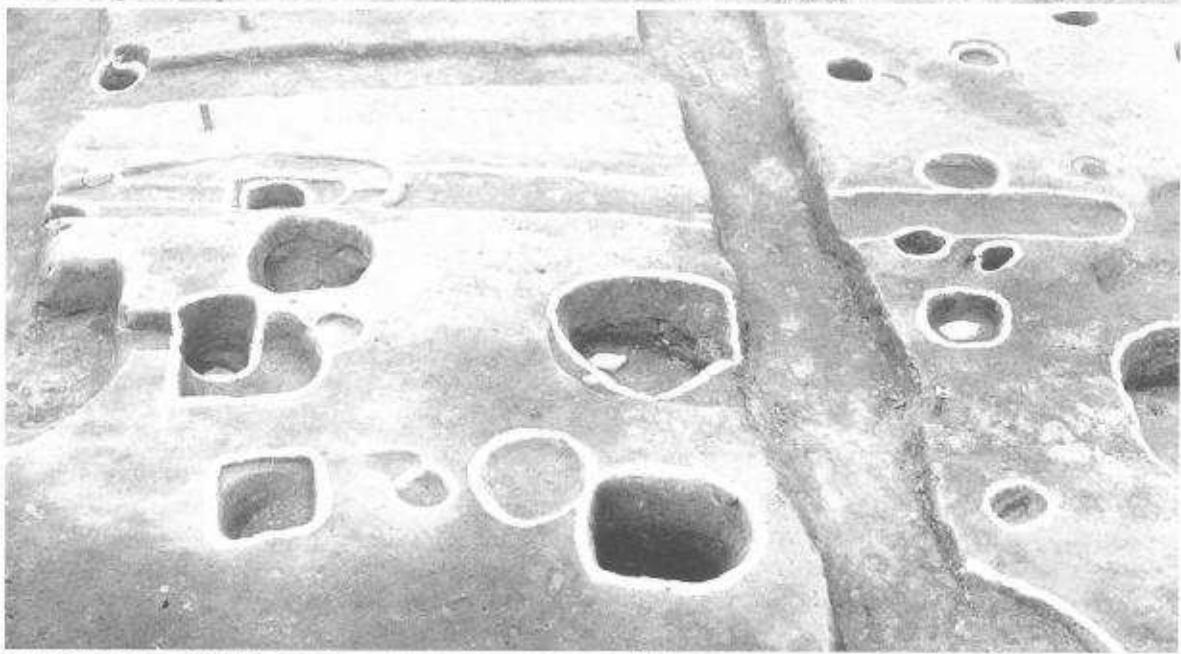


I区SK216  
(東から)

写真図版 8



I区SK234  
(南から)



I区SA101  
(東から)



I区SE005  
(南から)

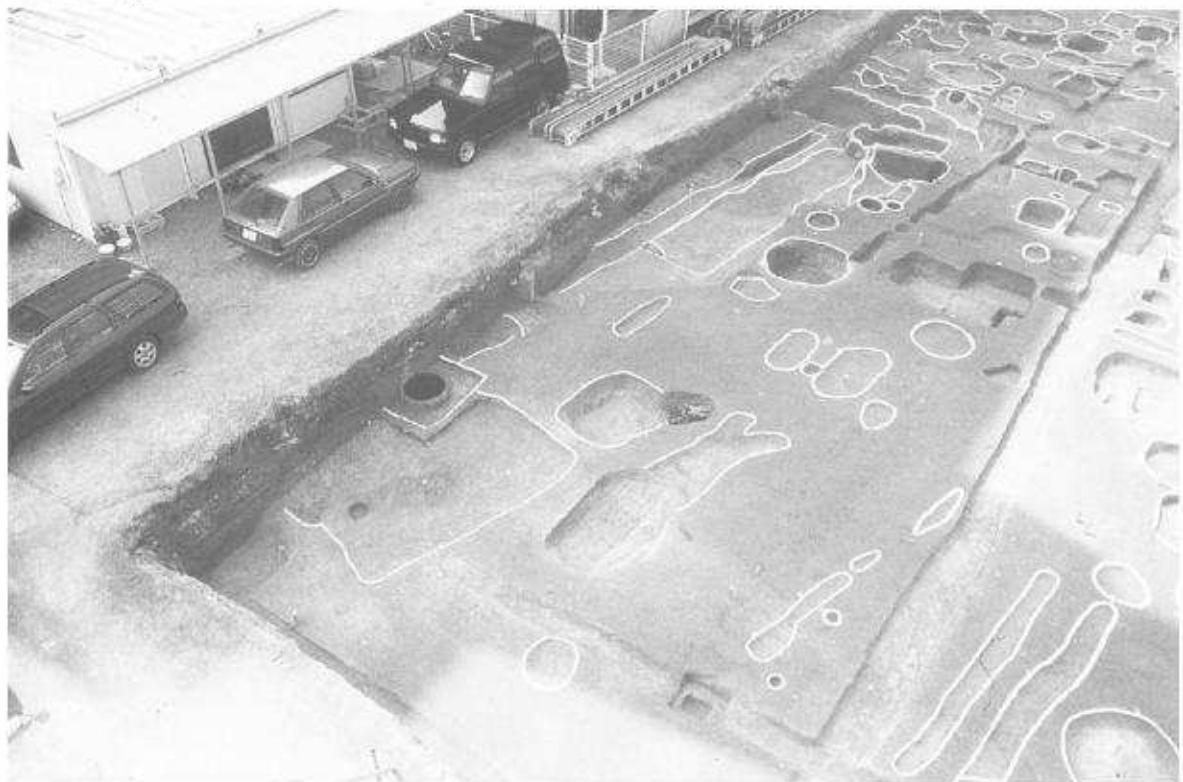


写真図版10



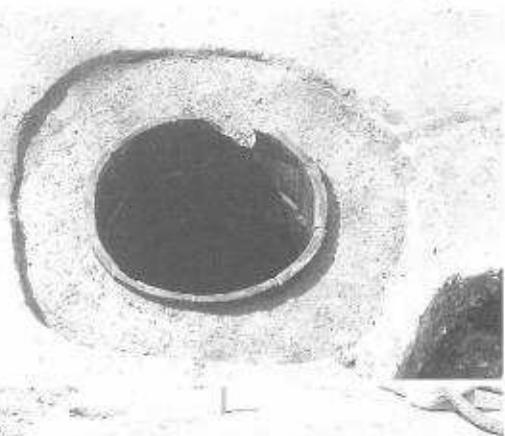


写真図版12





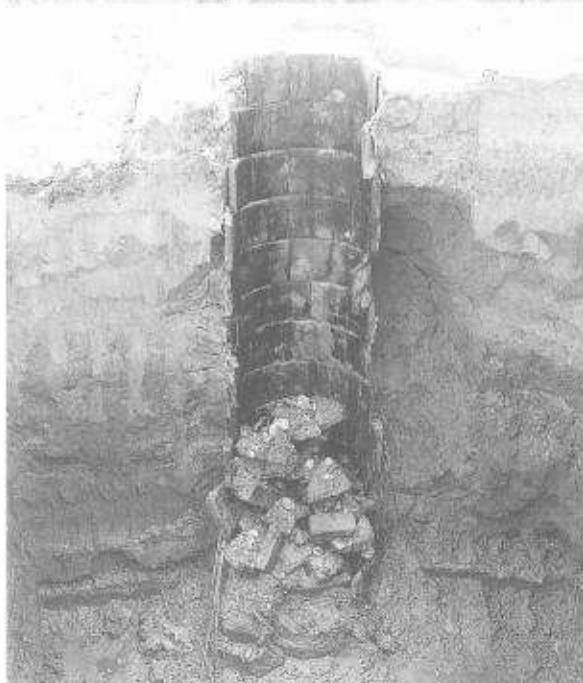
左: I区  
S E 0 0 1  
(東から)  
右: III区  
S E 0 0 2  
(東から)



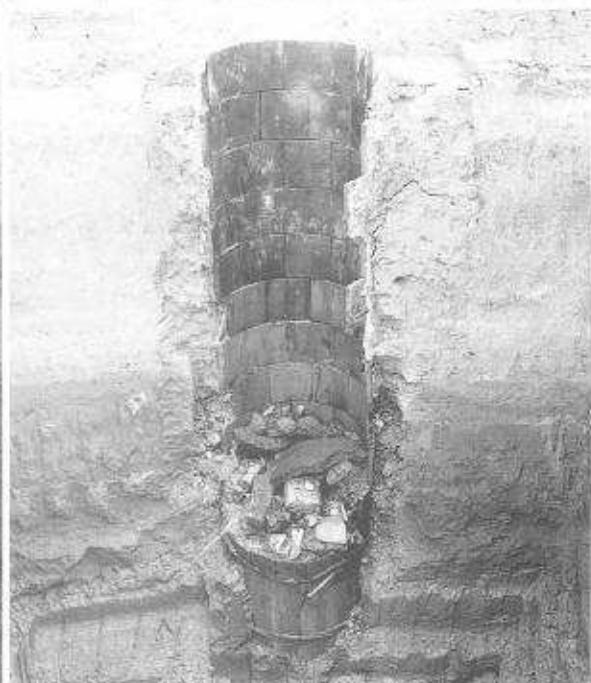
左: I区  
S E 0 0 1  
断面  
(東から)  
右: III区  
S E 0 0 2  
断面  
(東から)



左: III区  
S E 0 0 3  
(東から)  
右: IV区  
S E 0 0 4  
(北から)



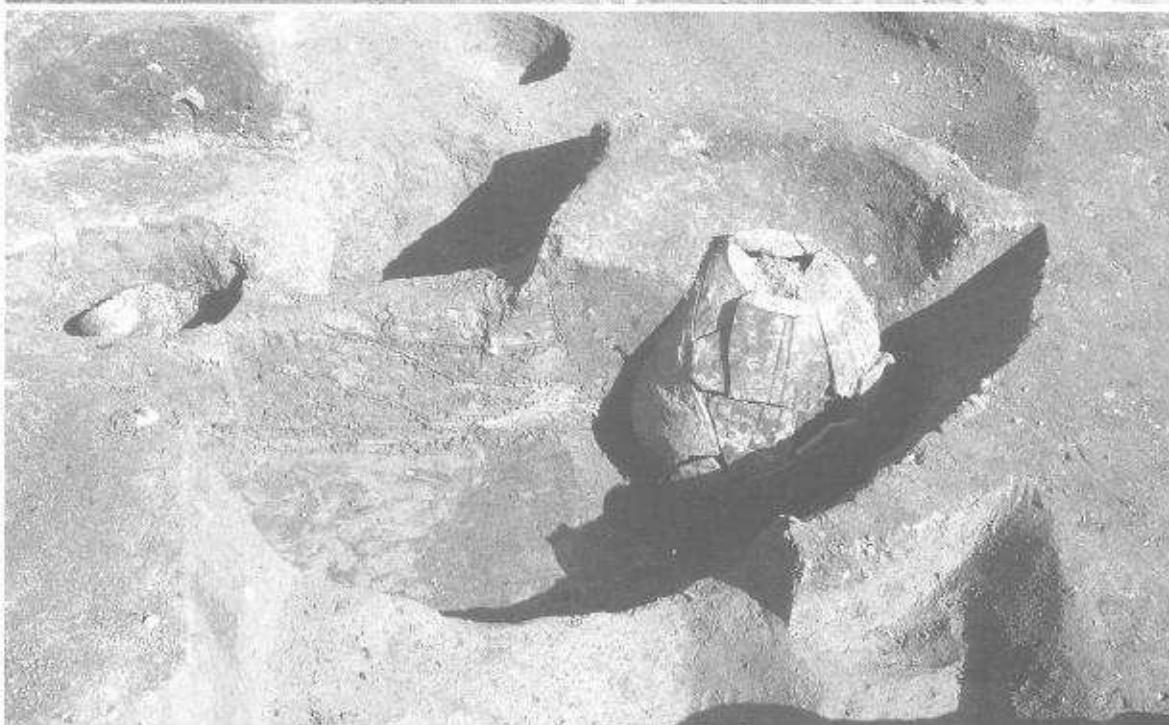
左: III区  
S E 0 0 3  
断面  
(西から)  
右: IV区  
S E 0 0 4  
断面  
(北から)



写真図版14



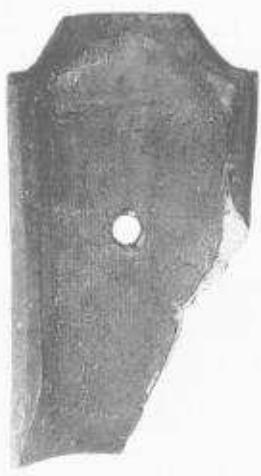
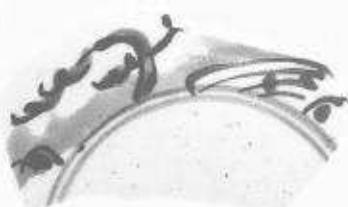
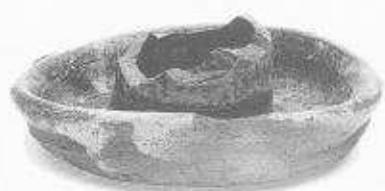
IV区 S E 2 0 1  
(東から)



I区 S K 0 1 5  
(南から)



II区 S K 1 2 3  
(北から)



5

6

9

7

8

10

11

14

15

22

21

24

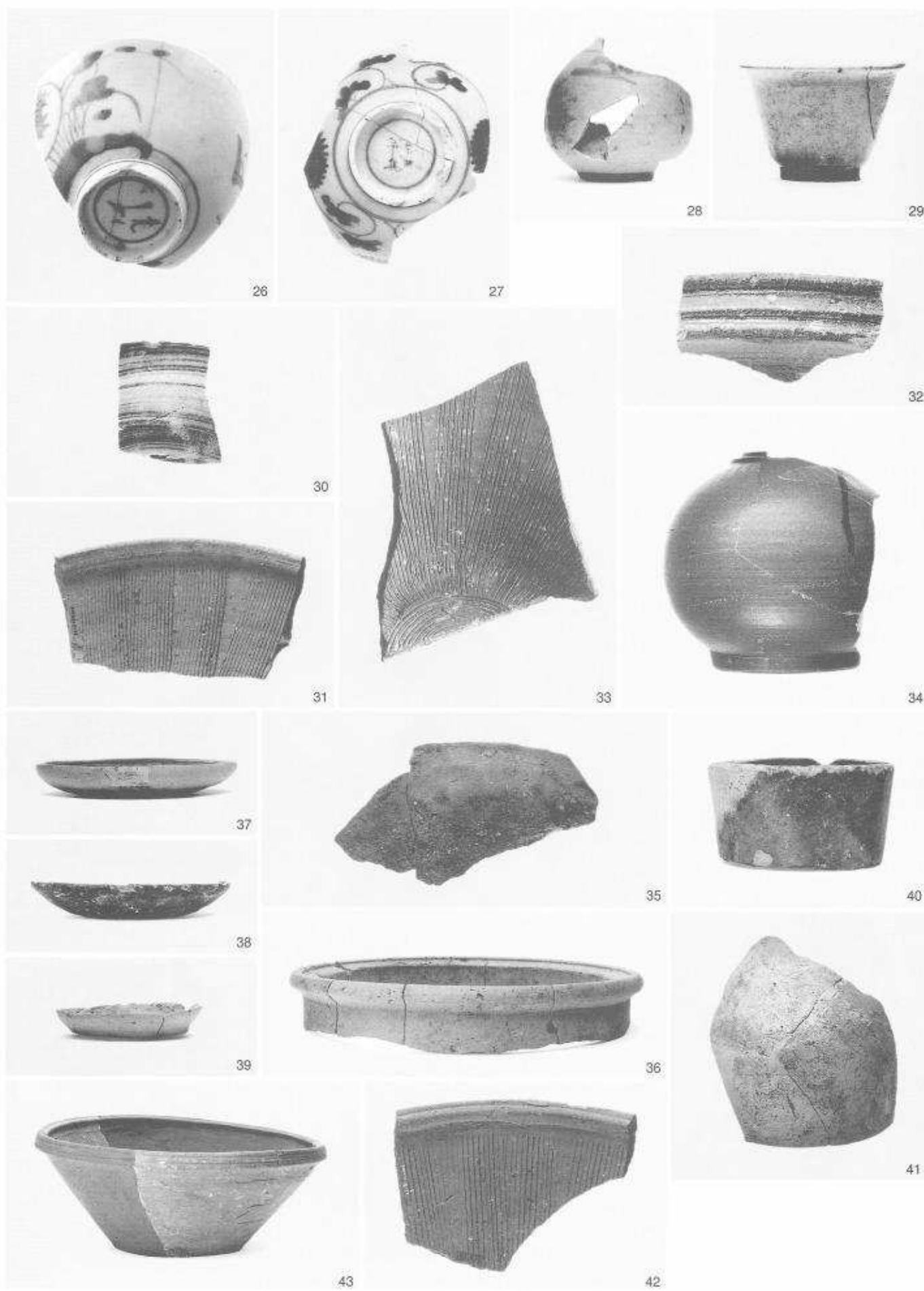
20

23

25

## 写真図版16

I区の遺物（2）





44



44



44



46



47



48



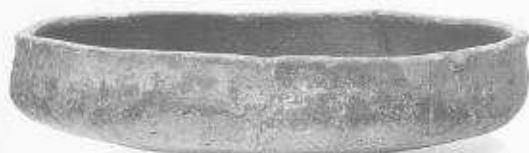
49



50



51



52



53



54



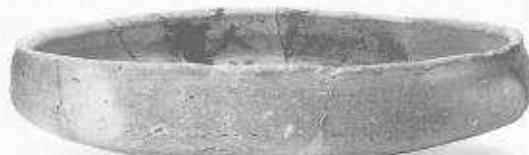
55



56



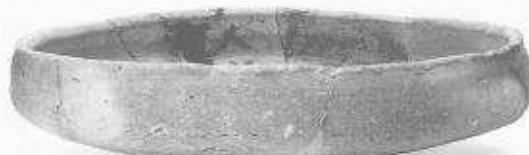
57



58



59



60



61

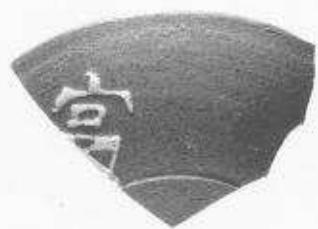


62



## 写真図版18

I区の遺物（4）、II区の遺物（1）



64



65



66



72



73



74



75



90



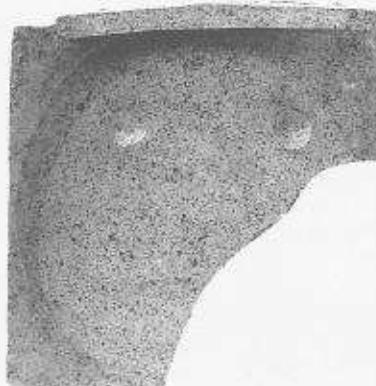
91



89



92



93



112



110



111



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107

# 写真図版20

II区の遺物（3）



114



115



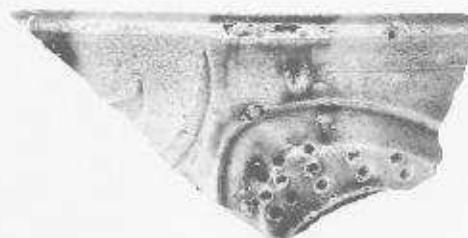
107



108



109



116



122



124



125



123



126・127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



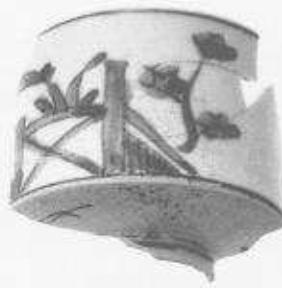
137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147

# 写真図版22

IV区の遺物（2）



150



177



151



152



153



154



155



163



167



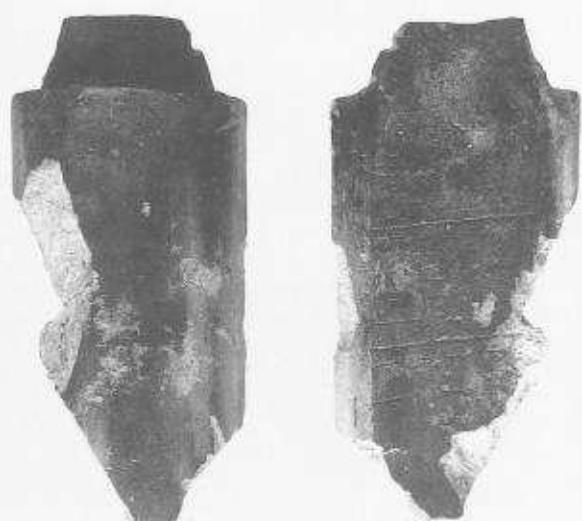
172



173



176



178



182



183



184



179



180



185



186



187



189



190



191

188



194



192



193



195



196



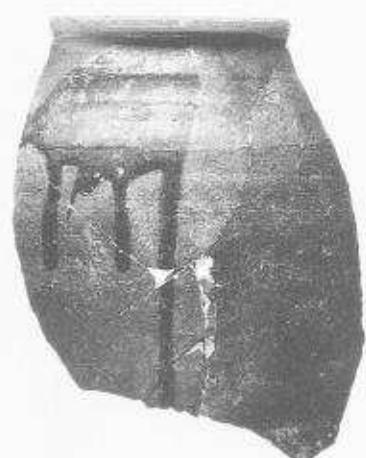
197

# 写真図版24

IV区の遺物（4）



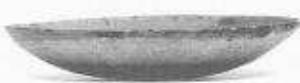
198



199



200



203



204



201



202



205



208



209



206



207



210



211



220



221



219



222



226



225



227



223



224



228



230



231



232



229



234



235



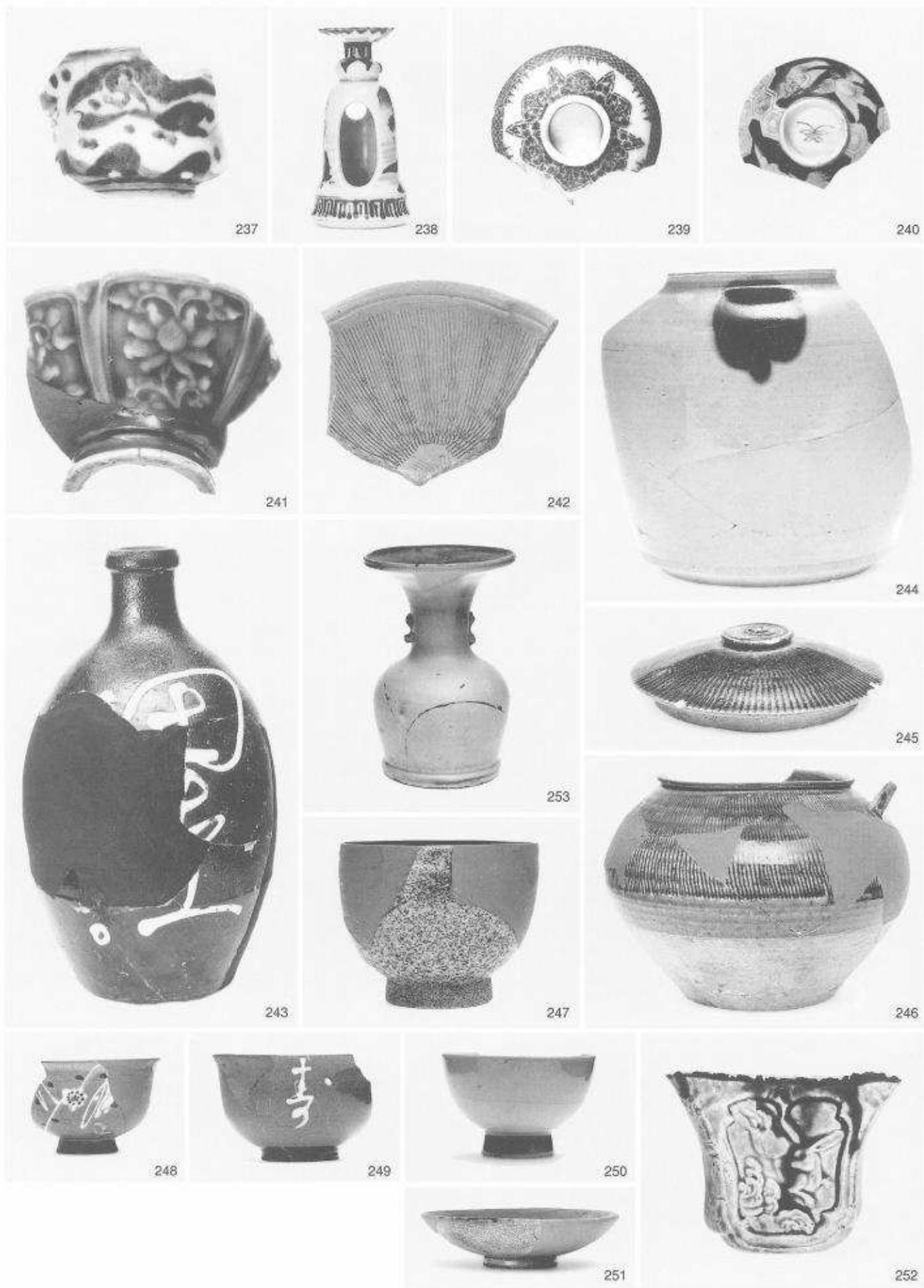
233



236

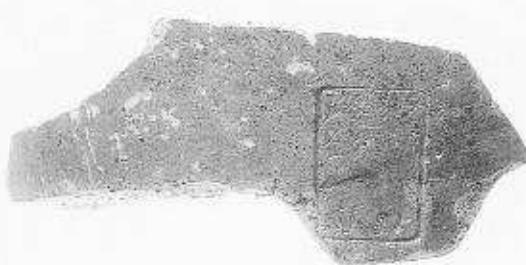
# 写真図版26

IV区の遺物（6）



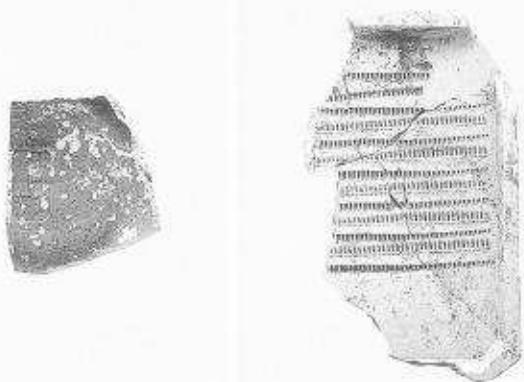


254



256

255



257



258



259



261



262



263

# 写真図版28

## 近代の遺物（2）



264



265



266



267



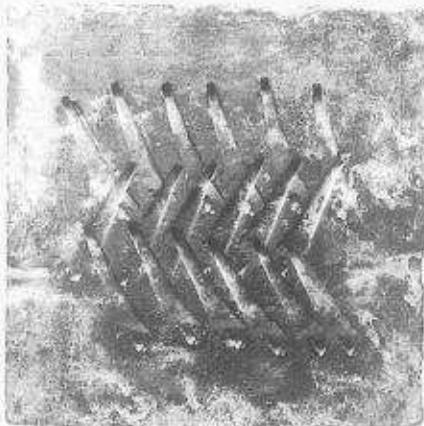
268



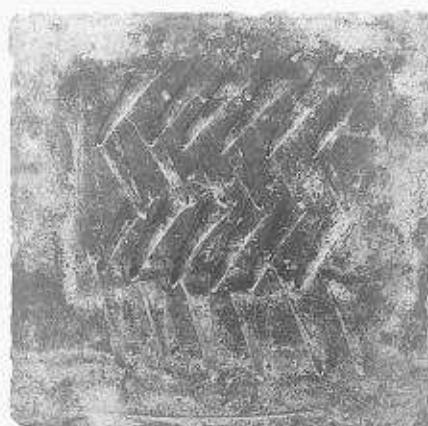
269



270



271



272



273



274



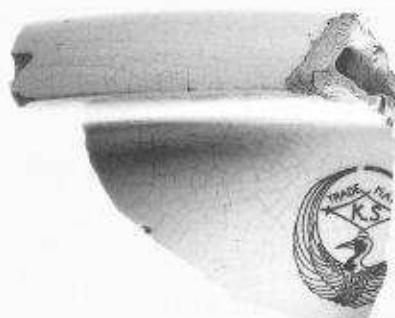
275



276



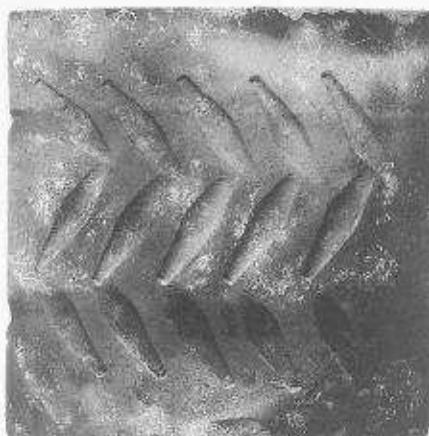
277



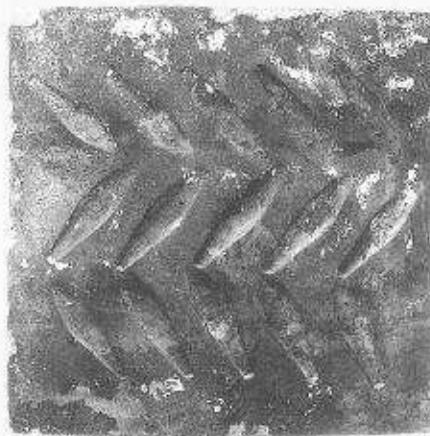
278



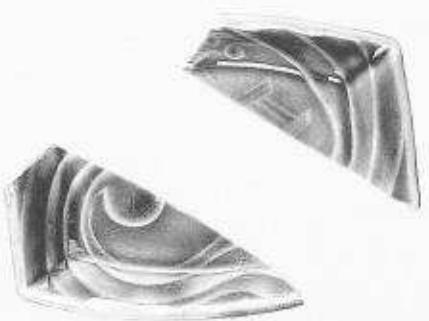
279



280



281



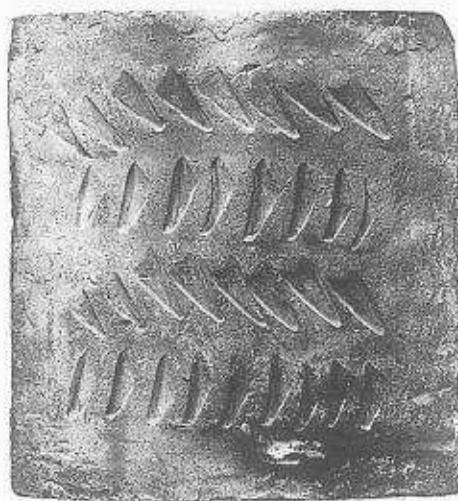
282



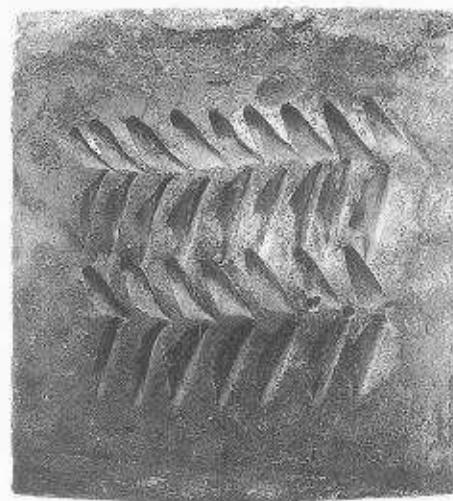
283

# 写真図版30

近代の遺物（4）、金属製品、包含層の遺物



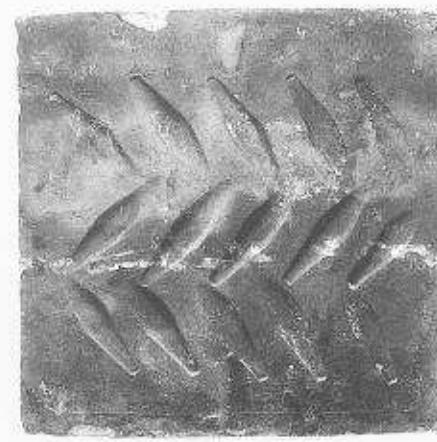
284



285



286



287



288



289



290



291

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	あかしじょうぶけやしきあとⅡ							
書名	明石城武家屋敷跡Ⅱ							
副書名	神戸地方法務局明石支局新営工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第254冊							
編著者名	池田征弘							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号							
発行年月日	西暦2003年(平成15年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	北緯	東経	調査原因
		市町村	調査番号					
あかしじょう 明石城 上記やしきあと 武家屋敷跡	兵庫県明石市 大明石町 2-4-29	28203	20000221	20000717 /	78m <sup>2</sup>	34度 38分 55秒	134度 59分 11秒	神戸地方法 務局明石支 局新営工事
			2000325	20010205 /	760m <sup>2</sup>			
			2001010	20010323 /	193m <sup>2</sup>			
				20010514 /				
				20010602				
		種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
	都市遺跡	江戸時代	溝・井戸・土坑	土器・陶磁器				

---

兵庫県文化財調査報告 第254冊

## 明石城武家屋敷跡 II

—神戸地方法務局明石支局新営工事に伴う発掘調査報告書—

2003（平成15）年3月発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 野崎印刷紙業株式会社

〒603-8151 京都市北区小山下綱町54-5

---